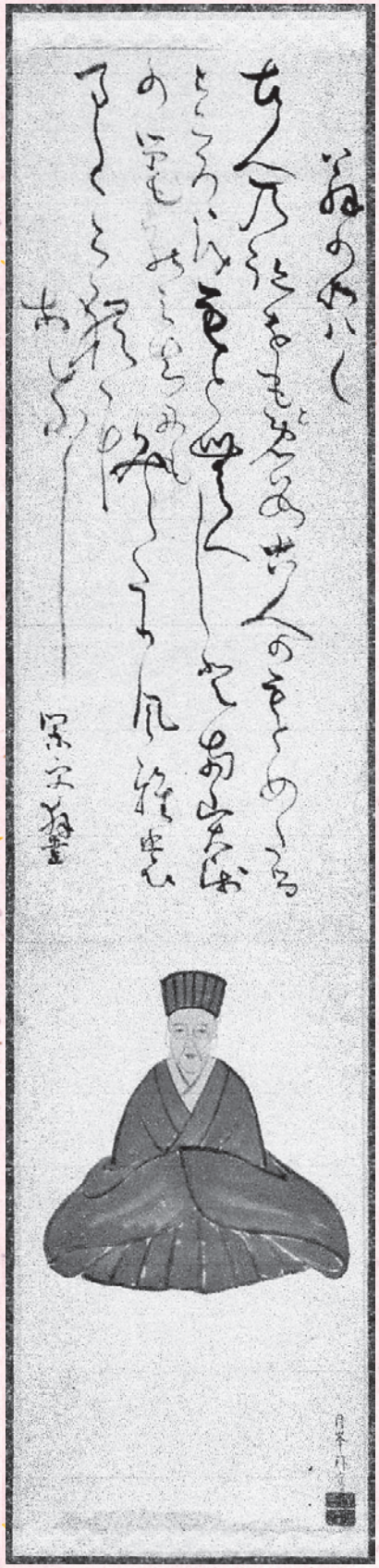
近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧資料

芭蕉堂歴世の俳諧と花供養

竹内千代子　編・著



雲英文庫蔵　芭蕉軸　本稿「はじめに」より

近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧資料

芭蕉堂歴世の俳諧と花供養

目次

はじめに　花供養会の仕掛け　1

第一章　双林寺境内芭蕉堂関係資料　影印　翻刻と解題　11

第二章　初世高桑闌更主催の天明六年『花供養』　影印　翻刻と解題　19

第三章　闌更の点帖「正風点　芭蕉堂闌更宗匠撰」　影印と解題　40

第四章　二世成田蒼虬の点帖　影印と解題　53

第五章　四世北村朝陽の点帖「月並　諸国発句抜章」影印　翻刻と解題　84

おわりに　花供養と京都の芭蕉顕彰　94

参考文献　98

付記　99

はじめに

花供養会の仕掛け

本稿は、近世後期京都における芭蕉堂歴世による芭蕉顕彰に関する俳諧資料を収載し、考察するものである。芭蕉堂は、近世後期京都における俳諧研究史に欠くことのできない重要な拠点のひとつである。芭蕉堂の歴世の俳諧は、研究の緒に就いたところである。本稿はその一端を担うものであるが、今後の継続的な資料収集と考察を課題としている。

初世堂主の高桑闌更は、天明三（一七八三）年、双林寺境内に芭蕉堂、南無庵を設けるべく地所を得る。本稿第一章にその経緯の一端を示す資料を収載している。天明四年五月には芭蕉堂を設け、同六年三月一二日には最初の花供養会を開催する。そして、同日の俳諧興行を収載した『花供養』を刊行する。本稿第二章にその影印と翻刻を収載している。その後、花供養会は毎年のように執り行われ、明治三年頃まで盛会であった。この花供養会の芭蕉追善俳諧は、近世後期京都俳壇における芭蕉顕彰の最も大きな業績の一つである。そればかりではなく、これが全国各地へ展開していくことからは、先発である明和元（一七六四）年からの義仲寺の時雨会とともに各地方の芭蕉顕彰の動きの先例となった。

芭蕉堂では、花供養会を中心として歴世の堂主がそれぞれの俳諧活動を展開する。注目されるものの一つに、市井の俳諧人口の爆発的な増加による時代の要請に応える俳諧指導がある。その指導の実際を考察する資料として、第三章に初世闌更、第四章に二世成田蒼虬、第五章に四世北村朝陽の点帖、点印を収載している。

さて、俳壇に影響力のあった花供養会は、巧妙に仕掛けられている。その一連の仕掛けは、次のごとくである。

一　芭蕉堂の設え

(1)　双林寺境内に芭蕉堂の開庵

闌更は、次の経緯で双林寺境内に芭蕉堂、南無庵を設けた。

1　天明三年一〇月、双林寺境内に借地　（第一章の闌更宛二札参照）
2　同四年五月、堀秦夫が南無庵を訪問しているので、南無庵はこれ以前の完成（『秦夫草』参照）
3　同六年三月一二日、花供養会初回開催　（第二章参照）
4　同七年九月刊『拾遺都名所図会』に登載、宣伝

当初、芭蕉堂、南無庵接待所と別の一棟との三つが建てられたと推察される。後述するが、『拾遺都名所図会』（本稿16頁参照）の絵図がそれで、当初の芭蕉堂の様子を伝えていると推察できるからである。南無庵は、天明四年五月、秦夫が「東山南無庵に入り」としているので、これ以前には完成していたことが知られる。同六年の三月一二日に、花供養会の第一回を開催しているので、借地より二年四ヶ月の準備期間があったことになる。

ここで注目されるのは、出版物による宣伝である。当時の俳諧は、出版の発展、普及に伴って、多くの俳諧人口を獲得した。『拾遺都名所図会』は、秋里籬島の著作で、籬島が先の安永九（一七八〇）年八月に『都名所図会』を上梓し、それが好評であったため「拾遺」を上梓したものである。これら二書は京都の案内地誌で、絵図を多く採り入れ、京都巡りの旅人への利便性が高い。また、京都土産としてや、町人らの読物としての需要もあったと推察される。当時は教育の普及も著しく、より多くの人々に影響を与えた。俳諧にとっても、掲載される句が多くなり、注目されるものとなっている。

『拾遺都名所図会』の特長は、俳諧に関する記述が多いことである。蕪村が設えた金福寺の芭蕉庵なども掲載された。それは、籬島は作家であるが、俳諧師でもあったからである。因みに、彼は安永五年九月に、俳諧の作法書『俳諧早作伝』を上梓しているが、闌更はこれに序文を寄せている。二人には親交があったのである。闌更にとって、籬島は俳諧の友であるとともに、出版による宣伝を可能にする存在でもあった。闌更は、出版を利用して、花供養会への参加者を獲得する足掛かりを作ったといえる。

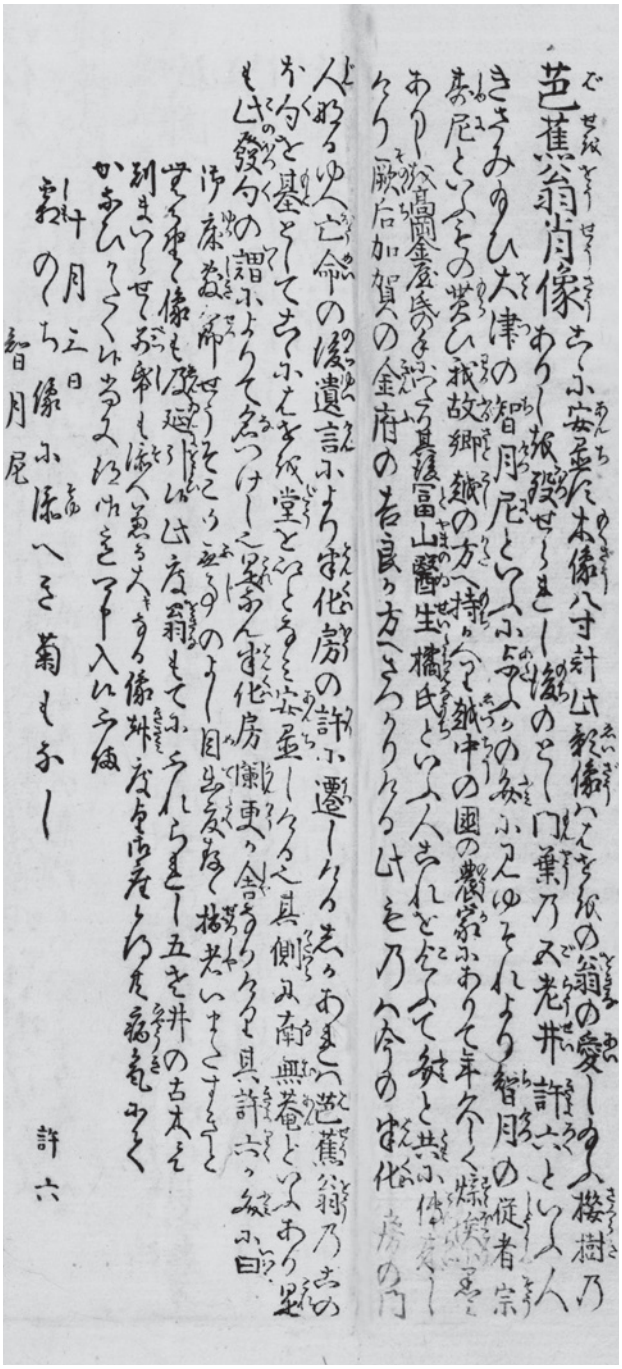
『拾遺都名所図会』の記述をもう少し詳しくみると、絵図は、芭蕉堂、大雅堂、東漸寺、東大谷門前で一丁分である。案内文は、芭蕉堂と東華坊支考の建てた芭蕉翁の碑とでおよそ一丁分である。芭蕉堂については、芭蕉堂が芭蕉の慕う西行庵の隣に位置すること、安置する芭蕉像が森川許六の刻んだものであること、その像が越智智月から巡り巡って闌更に伝来したことなどを記す。これらのことが、多くの人に真実として認知される結果となったであろう。京都に移住し、芭蕉堂を開いた闌更が、『拾遺都名所図会』の登載による宣伝効果を期待したことは想像に難くない。

(2) 芭蕉像の安置

闌更は、芭蕉堂を設けるにあたって、芭蕉に縁のある森川許六が刻んだとする芭蕉像を据えた（図版Ⅱ）。天明六年、最初の『花供養』は、「丙午花供養　蕉翁桜木の尊像に花を奉る」で始まる。このことは、(1)でも述べた『拾遺都名所図会』に次のごとくあるのを受けてのことである（図版Ⅰ）。

芭蕉翁肖像　こゝに安置す。木像八寸計。此影像は、はせをの翁の愛し給ふ桜樹のありしを、歿せられし後のとし、門葉の五老井許六といふ人きざみ給ひ、大津の智月尼といふに与ふ。

その後、越中、加賀へと巡り、闌更の許に伝来したという。数ある芭蕉像の中からこれに付加価値を持たせ、洛東芭蕉堂の象徴たらしめた。許六刀芭蕉像の効果は極めて効果的であったと推察できる。芭蕉像は次の図版Ⅱの有様で、芭蕉堂（現在の洛東芭蕉堂所有者が城陽市にも設けた芭蕉堂）に現存する。



図版Ⅰ　『拾遺都名所図会』（部分）

図版Ⅱ　森川許六刀芭蕉像

図版Ⅲ　『再撰花洛名勝図会』

ただし、許六刀芭蕉像はかなり小ぶりで、『拾遺都名所図会』にも「木像八寸計」とある。現洛東にある芭蕉堂に据えられている芭蕉像は、これとは異なり、かなり大ぶりな陶器製である。参考として、文久二（一八六二）年刊『再撰花洛名勝図会』の芭蕉堂の図会（図版Ⅲ）をみると、現洛東芭蕉堂の設えと同様であり、芭蕉像も大ぶりである。これは、谷峯蔵氏の『芭蕉堂七世　内海良大』によれば、寛政六年に大仏師山田孫右衛門によって造られたもので、許六刀芭蕉像はこの胎内に納められたという。

因みに、『再撰花洛名勝図会』に載る闌更の句は、「はじめて花供養いとなみて　活て居て望の日の花備へけり」である。文久二（一八六二）年当時の五世堂主である河村公成の句は、「咲みちて木間さわがし山ざくら」で、句意は、折からの桜は満開であり、芭蕉を慕って訪れる人も騒がしいばかりである。文久二年の『花供養』は四四丁であり、例年並の賑やかな人出であったと推察される。また、闌更の句をあげて初世に対する畏敬の念を表しているのであろう。かくのごとくして芭蕉堂は宣伝されていったのである。

(3) 南無庵接待所の設立

芭蕉堂を設け、芭蕉を祀り、接待所で俳諧興行を行う様式は、早くは義仲寺にある。洛東芭蕉堂もこれに倣った。五升庵蝶夢の目指した芭蕉顕彰の動きを、俳諧観の共有の有無はともあれ、結果的に闌更はそれを実現していると言ってもよい。これ以後、洛東芭蕉堂の動きは全国に波及するのである。なお、南無庵接待所の絵図については、本稿第一章にその経緯の一端を示す資料とともに収載している。

二　花供養会の開催

闌更は、芭蕉追善の俳諧興行を時雨会に倣い、且つ、独自性を加えて次の手順で開催した。

(1) 芭蕉追善俳諧興行

1　三月一二日に開催する
2　南無庵に芭蕉像軸を掛ける
3　当日出席者による俳諧興行一巻と席上探題を催す

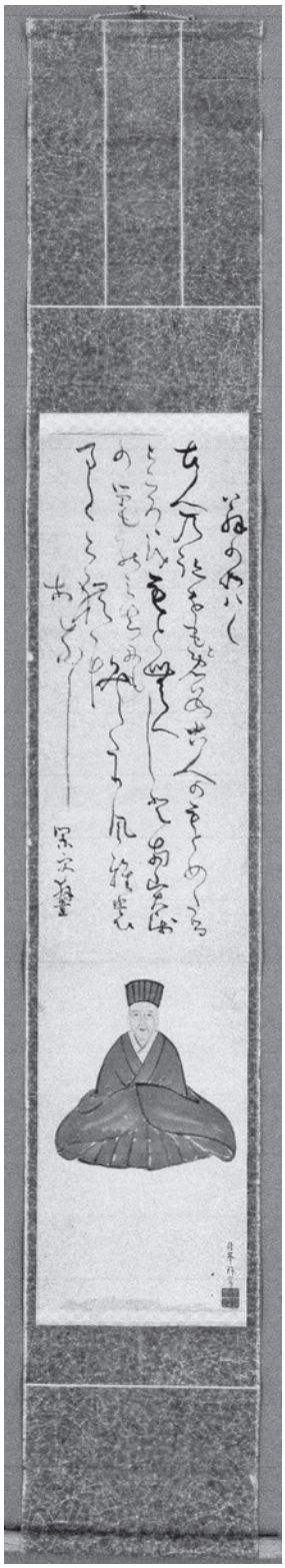
日程は、芭蕉の本廟である義仲寺の、忌日に行われる一〇月一二日の時雨会を避けた。また、五月には義仲寺奉扇会が行われていたので、冬と夏の芭蕉追善会を避けて、春の月命日である三月一二日に行った。桜の咲く好時節であったことは、追善俳諧に参集する人々の高揚感を満たすのに最適であったろう。『時雨会』が真摯に芭蕉を追善して時雨の、冬の句を献句したのに対し、『花供養』は春の句、及び四季の句を献句した。このことが全国からの献句を実現せしめた要因の一つである。ただし、多くは二、三回の献句で終る。それは、『花供養』に登載される目的が、全国に披露されることになっていったからであると考えられる。これも芭蕉顕彰の実態の一つである。参考として、『花供養』の入集状況をみておこう。闌更主催の『花供養』刊行は、在世の天明六年から寛政一一年までのうち、一三回である。この間の入集者は、三一八九名。それを回数別に記す。

一二回―　4名　　一一回―　2名　　一〇回―　7名　　九回―　14名　　八回―　27名　　七回―　14名
六回―　27名　　五回―　62名　　四回―　113名　　三回―　252名　　二回―　777名　　一回―　2096名

右からは、七、八回程度までが常連で、五〇名前後となる。其成、芦涯、白黛、土卵、斗流、車蓋、得終らの門人たちであるが、これについては第二章の解題で述べる。地域は、京、近江、備後、筑前、能登、長州、越前、加賀などである。それに対して、一、二回程度は、西国を中心としたほぼ全国に渡る二九〇〇名足らずとなり、殆んどの人々がこれである。この状況からは、各地に地域宗匠が常連としており、その指導のもとに投句する人々がいることを示唆している。これらの人々は、全国区版の『花供養』誌に掲載されることに意義を見出し、句が評価されるのを求めていないことも示す。句の優劣を示す評価や賞品がないことによって、一句の等価性が高まり、好感をもって受け入れられたと考えられる。『花供養』では、施主料を納めることによって『花供養』一冊が進上されるのみである。句の多くは後に月並であると批評されることになるが、芭蕉に縁があること、『花供養』が大部になっていくこと、名所図会に掲載されることなどによって、花供養は適当な町人の嗜好の対象となっていったのである。真摯な芭蕉追善の義仲寺時雨会とは相反するのであるが、芭蕉を顕彰する意気としては同じであるともいえる。それは、芭蕉顕彰が多くの人々によって支持される必要もあるからである。

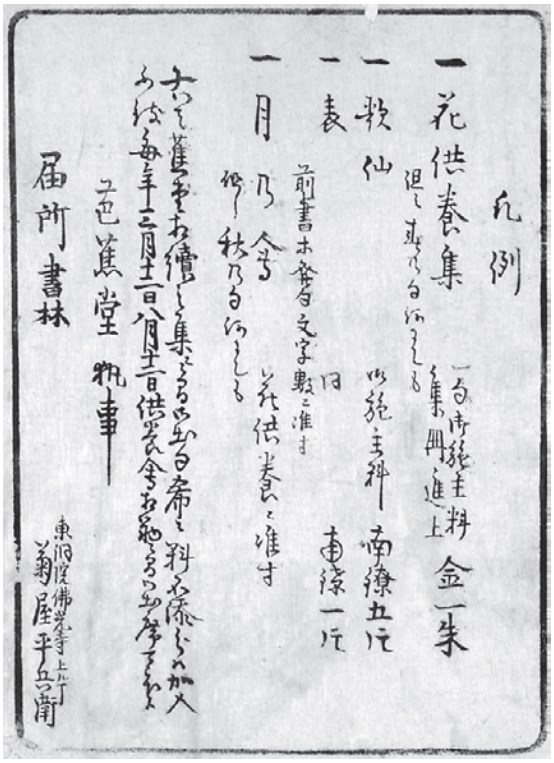
追善俳諧の席では、芭蕉像軸が掛けられたであろう。連歌などでは、菅原天神、人麻呂像などが掛けられるが、芭蕉像はそれらに伍するものとして認識されたのであろう。早稲田大学図書館雲英文庫に双林寺月峰画、闌更賛の一軸がある。左に図版をあげる。月峰は、画を池大雅に学び、双林寺に大雅堂を設け、後には二代大雅堂堂主となる。俳諧も好み、芭蕉堂、闌更の良き理解者の一人である。因みに、後世の芭蕉堂関係者によって、同様の芭蕉像軸が量産され、現存する。

花供養会当日は、出席者による俳諧興行一巻が巻かれ、探題発句が献句される。これは『時雨会』の様式と同様である。



(2) 追善興行集『花供養』の出版

花供養の開催にあたっては、発句と連句が募集された。次は天保四年、蒼虬主催の募句ちらしである。舞鶴市郷土資料館糸井文庫藏。



凡例

一 花供養集　一句御施主料　金一朱
　　集冊進上
　　但し春の句何にても
一 歌仙　御施主料　南鐐五片
一 表　同　南鐐一片
　　前書等発句之字数に准ず
一 月の会　花供養に准ず
　　但し秋の句何にても
右は蕉堂相続之集に候間　御出句希に料不添分は加入
不致毎年三月十二日　八月十二日供養会相勤候間御出席可被下候
　　芭蕉堂執事
　　届所書林　東洞院仏光寺上ル丁
　　菊屋平兵衛

天保四年刊『花供養』は、糸井文庫本によれば、全五六丁、歌仙二、表四、発句八七九である。発句は一人一句であるから、凡そ九百人の参加となる。ちらしに拠って入花料を計算すると、歌仙は南鐐一〇片、表は南鐐四片、発句は金八七九朱。金一両を九万円で計算すると、約五〇〇万円程度になる。出版冊数は、一人一句の入集なので、約九〇〇冊になる。当時の書林は、書簡などの飛脚便も扱い、費用の金銭出納も扱うことが多い。「月の会」については未詳ながら、『花供養』に准じて行われたとすれば、これらはかなりの経済効果もあったと言えよう。

次に、『花供養』の出版状況を一覧する。

『花供養』出版一覧

	刊 行 年	主催者	書 林 名	丁数	底本所蔵	備　考
1	天明６年	初世闌更	菊舎太兵衛	14	糸井	
2	天明７年	闌更	菊舎太兵衛	16	愛知県大	
3	寛政１年	闌更	菊舎太兵衛	10	櫻井	
4	寛政２年	闌更	菊舎太兵衛	25	愛知県大	
5	寛政３年	闌更	菊舎太兵衛	26	月明	
6	寛政４年	闌更	菊舎太兵衛	40	月明	
7	寛政５年	闌更	菊舎太兵衛	49	白鹿	
8	寛政６年	闌更	菊舎太兵衛	45	小林	
9	寛政７年	闌更	菊舎太兵衛	49	白鹿	
10	寛政８年	闌更	芭蕉堂	67	白鹿	
11	寛政９年	闌更	芭蕉堂	42	小林	
12	寛政10年	闌更	芭蕉堂	40	月明	寛政10年５月闌更没
13	寛政11年	二世蒼虬	芭蕉堂・勝田喜右衛門	33	白鹿	
14	享和１年	蒼虬	勝田喜右衛門	28	櫻井	
15	享和２年	蒼虬	勝田喜右衛門	30	弘前	
16	享和３年	蒼虬	勝田喜右衛門・勝田善助	24	弘前	
17	文化１年	蒼虬	勝田喜右衛門・勝田善助	25	高井	
18	文化２年	蒼虬	勝田喜右衛門・勝田善助	36	月明	
19	文化３年	蒼虬	勝田善助	48	糸井	
20	文化４年	蒼虬	勝田善助	46	月明	
21	文化６年	蒼虬	勝田善助	37	石川歴博	
22	文化８・９年	蒼虬	勝田善助	47	糸井	
23	文化11・12・13年	蒼虬	菊舎太兵衛	47	白鹿	
24	文政11年	蒼虬	無刊記	27	武蔵野	
25	天保１年	蒼虬	菊屋平兵衛	45	石川歴博	
26	天保３年	三世千崖	菊屋平兵衛	53	糸井	天保９年５月千崖没
27	天保４年	二世蒼虬	菊屋平兵衛	56	糸井	
28	天保５年	蒼虬	菊屋平兵衛	57	白鹿	天保13年蒼虬没
29	天保10年	四世朝陽	菊屋平兵衛	39	白鹿	
30	天保11年	朝陽	菊屋平兵衛	51	立教	天保11年９月朝陽没
31	天保12年	五世九起	無刊記	61	櫻井	
32	天保13年	九起	近江屋利助	73	糸井	
33	天保14年	九起	菊屋平兵衛	109	立教	
34	弘化１年	九起	近江屋利助	60	月明	
35	弘化２年	九起	菊屋平兵衛	74	櫻井	
36	弘化３年	九起	近江屋利助	72	竹内	
37	弘化４年	九起	菊屋平兵衛	68	小林	
38	嘉永１・２年	九起	近江屋利助	69	白鹿	
39	嘉永３年	九起	菊屋平兵衛	40	立教	明治15年３月九起没
40	嘉永６年	六世公成	近江屋利助	63	小林	
41	安政１年	公成	近江屋利助	59	月明	
42	安政３年	公成	無刊記	61	白鹿	
43	安政４年	公成	無刊記	55	奈良大	
44	安政５年	公成	近江屋利助	54	松本	
45	安政６年	公成	近江屋利助	62	月明	
46	万延１年	公成	無刊記	61	櫻井	
47	文久１年	公成	無刊記	48	月明	
48	文久２年	公成	無刊記	44	櫻井	
49	文久３年	公成	無刊記	43	糸井	
50	元治１年	公成	無刊記	38	小林	
51	慶応１年	公成	無刊記	44	櫻井	
52	慶応２年	公成	無刊記	41	白鹿	
53	慶応３年	公成	無刊記	51	櫻井	慶応４年６月公成没
54	明治１・２年	七世良大	無刊記	45	櫻井	明治25年９月良大没

凡　例

一　所蔵略記は次のとおりである。

糸井	舞鶴市郷土資料館糸井文庫
愛知県大	愛知県立大学付属図書館
櫻井	立命館大学アート・リサーチセンター桜井文庫
月明	石川県立図書館月明文庫
小林	小林孔
白鹿	兵庫県西宮市笹部桜コレクション―白鹿記念酒造博物館寄託
弘前	弘前市立弘前図書館石見文庫
髙井	髙井悠子
石川歴博	石川県立歴史博物館
武蔵野	武蔵野大学付属図書館前田利治文庫
立教	立教大学付属図書館
竹内	竹内千代子
奈良大	奈良大学付属図書館
松本	松本節子

明治三年で一連の『花供養』の刊行は一応終わるが、義仲寺の『時雨会』は、すでに天保五（一八三四）年に一応の終焉を迎えている。『時雨会』後の凡そ四〇年ほどは、芭蕉顕彰を花供養会が支えたことになる。従って、『時雨会』と『花供養』の二つが、近世後期の芭蕉顕彰の動きを継続的に知ることができる資料として位置づけられるのである。

三　門人の獲得と全国展開

現存の『芭蕉堂門人録』は、大正一二年に新刷されたものであるが、これによれば、堂主によって門人数に多少はあるもののそれぞれに門人がいた。これらの芭蕉堂を直接的に支える門人と、その門人達の俳諧ネットワークの間接的な繋がりによって、芭蕉堂は支えられ、全国展開を可能にしたのである。また、免状の発行は、『芭蕉堂門人録』によれば、昭和三年七月から昭和三一年二月まで、一六世岩井藍水の時のことであるが、近世期については未詳である。今後の課題とする。

また、全国展開の要素に二条家俳諧がある。二条家俳諧は、俳諧人口の増大と蕉門の隆盛によって、京都俳壇における新しい勢力として台頭してきた。旧来からの貞徳の流れを汲む俳諧も存続しているが、かつての勢いは感じられない状況であった。

富田志津子著『二条家俳諧　資料と研究』（和泉書院、一九九九年刊）によれば、二条家俳諧宗匠（※花の本宗匠も含む）には、次の芭蕉堂関係者が宗匠免許を受けている。

初世堂主闌更　　寛政二年允可
二世堂主蒼虬（闌更門）　　文化八年允可
何丸（闌更門）　　文政七年允可
抱儀（蒼虬門）　　文政九年允可
梅室（闌更門）　　嘉永四年允可（※花の本）
淡節（七世堂主良大の義父）　安政四年允可
梅通（蒼虬門）　　文久二年允可
芹舎（蒼虬門）　　元治元年允可（※花の本）

さらに、闌更門の其成は、書肆菊舎太兵衛であり、二条家俳諧の御俳諧書林を命じられている。

このように、初世闌更と二世蒼虬が二条家俳諧に加わり、その門人達が脈々と受け継いでいったのである。二条家俳諧の全国俳人達への影響は大きく、花供養会と関係づけられたことであろう。

第一章　双林寺境内芭蕉堂関係資料　影印 翻刻と解題

解　題

本資料は、双林寺境内芭蕉堂関係文書を、影印を付して翻刻したものである。同軸は、関西大学図書館蔵である。

同軸は、次の四文書を収める。なお、縦寸法は巻物の長さである。

(1)　天明三年十月付　林阿弥妙長他四名連署　闌更宛一札

縦三一・七糎、横八三・六糎。

闌更が、草庵を建てるにあたって、双林寺の境内を借用する文書で、地所の図を付す。

参考として、安永九（一七八〇）年八月刊『都名所図会』の双林寺図をあげる（本文12頁）。

(2)　天明七年五月付

西阿弥・林阿弥連署　闌更宛南無庵接待所一札

縦三一・七糎、横四二・九糎。

闌更が、俳諧興行などのために南無庵接待所を建てた文書で、画図を付す。「此度新譲申」とあり、実質的な所有となったことを示す。

参考として、天明七（一七八七）年九月刊『拾遺都名所図会』巻二（部分）と、文久二（一八六二）年刊『再撰花洛名勝図会』（部分）をあげる。『拾遺都名所図会』にある芭蕉堂、南無庵と草庵の三つの建物が当初の様子であったと推察できる。現在の芭蕉堂の設えは、『再撰花洛名勝図会』を引継いでいる。

(3)　明治六年五月並びに十月付

内海良大　戸・区長宛住居届

縦三一・七糎、横四三・八糎。

芭蕉堂主七世の良大の住居届の文書。明治六年に双林寺が寺社領公収令によって上地された際、芭蕉堂も上地されたが、引き続き住居することは認められた。芭蕉堂の沽券が流出中で、双林寺中と判断され、私宅と認められなかった（『芭蕉堂七世　内海良大』）。

(4)　明治八年十月廿八日付

内海良大　木村正幹宛草庵譲渡の一札

縦三一・七糎、横四六・五糎。

良大が南無庵を退去するにあたって木村正幹に譲渡する文書。良大は、慶応四年末から明治八年一〇月二八日まで在庵するが、花供養の主催を確認できるのは、明治二、三年のみである。この間、良大が、芭蕉堂主であり、師である河村公成の佐幕派浪士によって兇刃に殁したことを受け、

その仇討ちを果たしたことが指摘されている（『芭蕉堂七世　内海良大』）。なお、良大は明治二五年九月一四日卒。

正幹は、長州萩藩士。俳諧を能くし、素石と号した。天保一四（一八四三）年生、明治三六（一九〇三）年一月二一日卒、享年六一。のちに三井物産副社長。

参考文献

一　谷峯蔵著『芭蕉堂七世　内海良大』（昭和五二〈一九七七〉年四月、千人社刊）

一　竹内千代子編・校訂「芭蕉堂門人録―影印と翻刻―」（二〇一八年三月、私家版）

翻刻凡例

一　字体は、原則として通行の字体に改める。

一　踊り字は原則として原本の表記に従うが、次のように統一する。

平仮名・同濁点　ゝ・ゞ

片仮名・同濁点　ヽ・ヾ

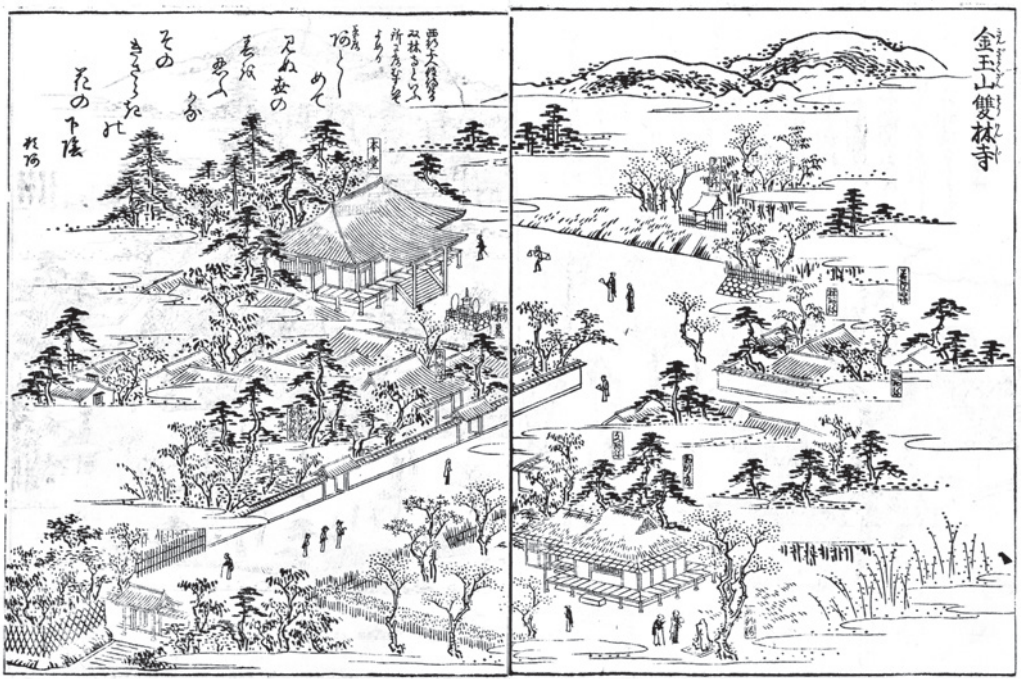
一字の繰返し　々

二字以上の繰返し　〳〵・〴〵

一　濁点・句読点を適宜私に付す。

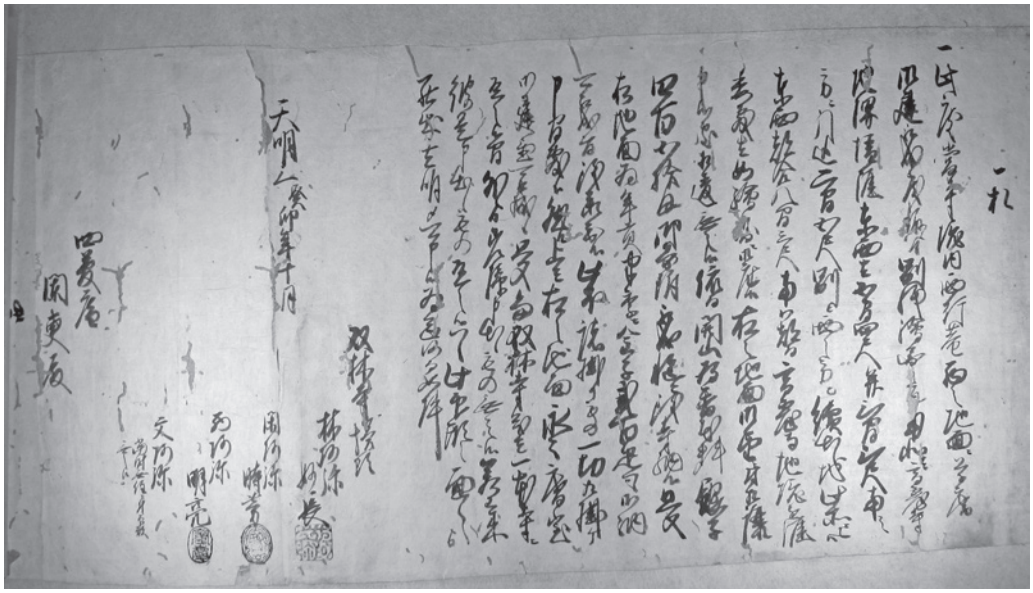
一　改行は、原則として原本に従う。

参考　安永九年八月刊『都名所図会』　金玉山双林寺



本堂の南側に閑阿弥、西行庵の隣に文阿弥、その東側に林阿弥と西阿弥がある。

(1)の1　天明三年十月付　林阿弥妙長他四名連署　闌更宛一札



一札

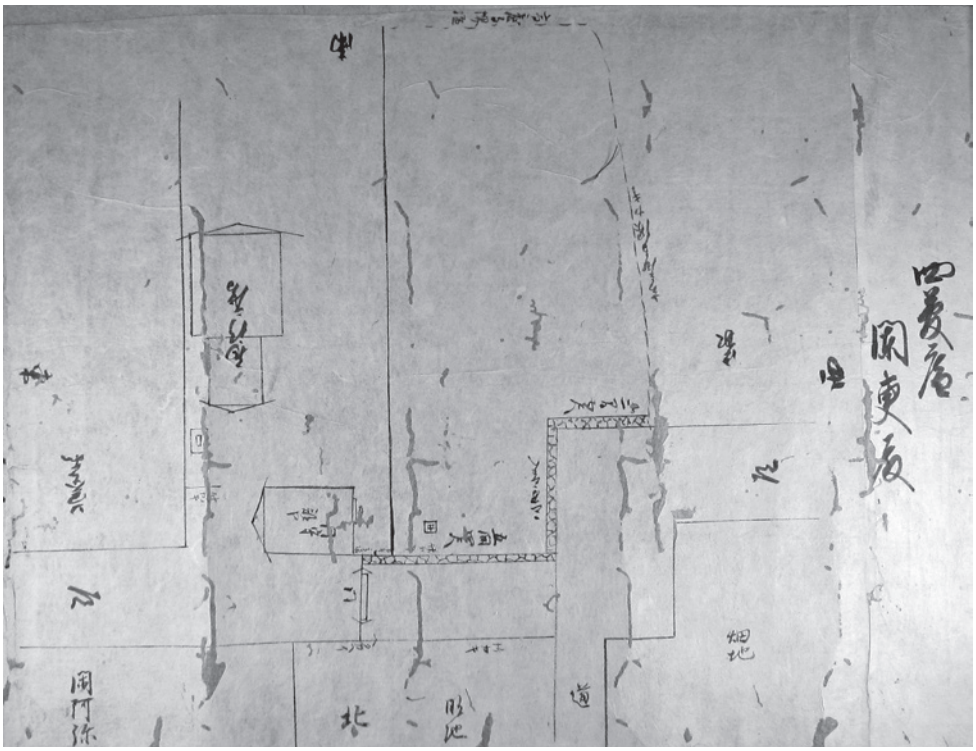
一　此度、当寺境内西行庵西之地面ニ草庵
御建被成度趣ニ付、別紙絵図之通、南北は高台寺
地堺墻涯、東西は五間四尺并、三間三尺南之
方ニ引込、二間五尺別ニ西之方ニ続出地。此所にては
東西都合八間三尺、南は都テ高台寺地境を涯
委敷は如絵図ニ御座候。右之地面御望ニ付相譲
申候処、相違無之候。依テ、開山為香花料、銀子
四百五拾匁御寄付被成、慥ニ致寺納候。且又、
右地面為年貢、半季ニ金子二百疋づゝ御納
可被成旨、致承知候。此外諸掛りもの一切相掛ヶ
申間敷候。然ル上は、右之地面永々庵室
御建置可被成候。且又、当双林寺義は一本寺ニ
有之候間、外より差障申出候もの無之候。若已来
彼是申出候もの有之候はゞ、此印形之面々より
罷出、言明〆可申候。為念仍テ如件。

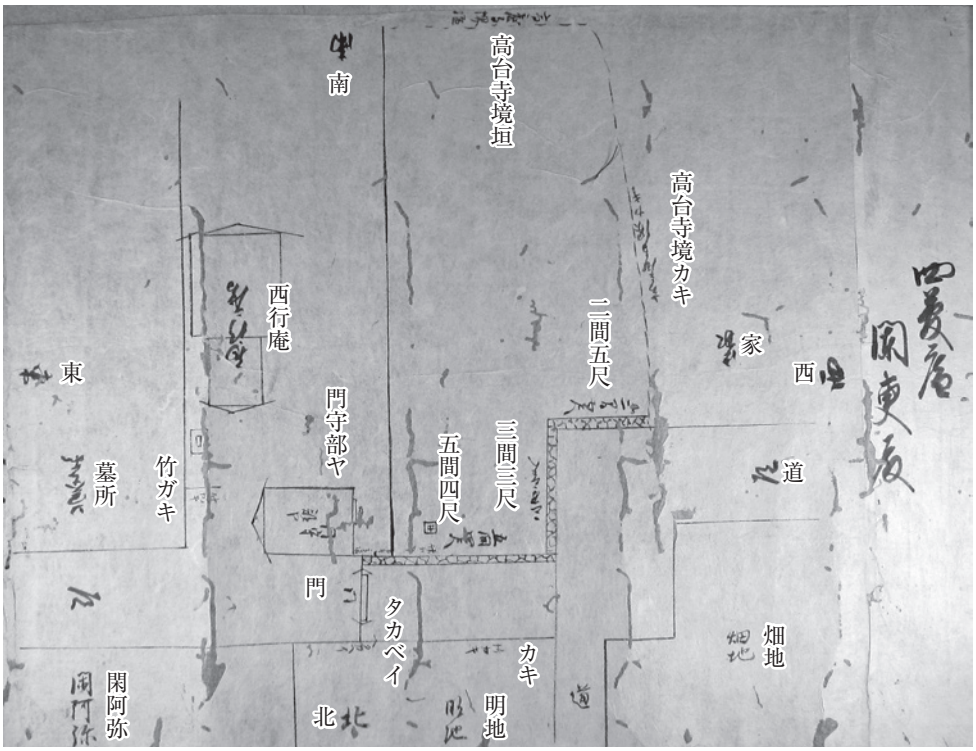
双林寺塔頭
林阿弥　妙長　印
閑阿弥　時芳　印
西阿弥　明亮　印
文阿弥

天明三癸卯年十月

当時無住ニ付印形無之候

四夢庵
闌更殿

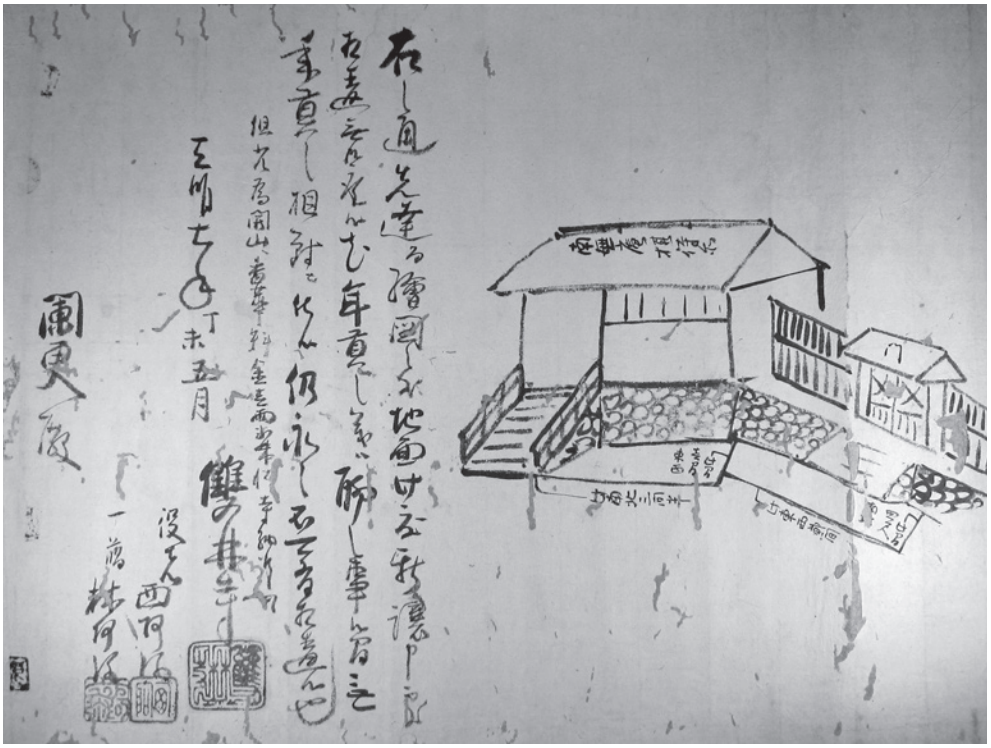


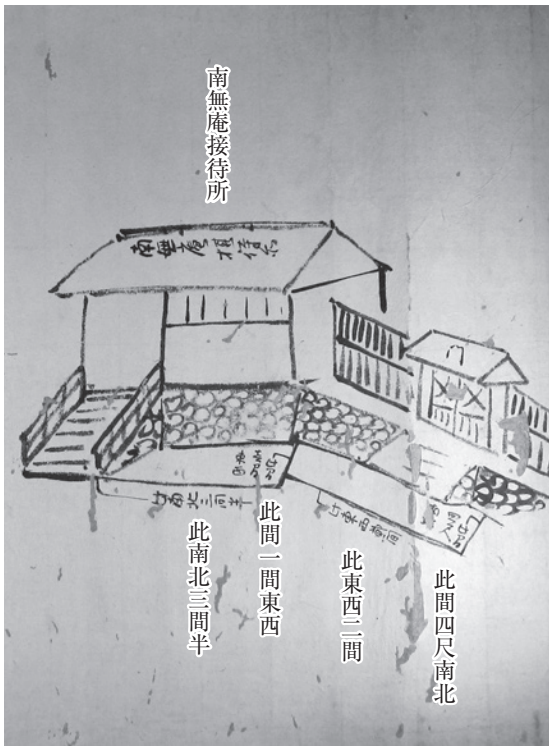

南
高台寺境垣
高台寺境カキ
西行庵
二間五尺
家
西
東
門守部ヤ
三間三尺
五間四尺
道
竹ガキ
墓所
門
タカベイ
カキ
畑地
閑阿弥
北
明地

(2)

天明七年五月付

西阿弥・林阿弥連署　闌更宛南無庵接待所一札





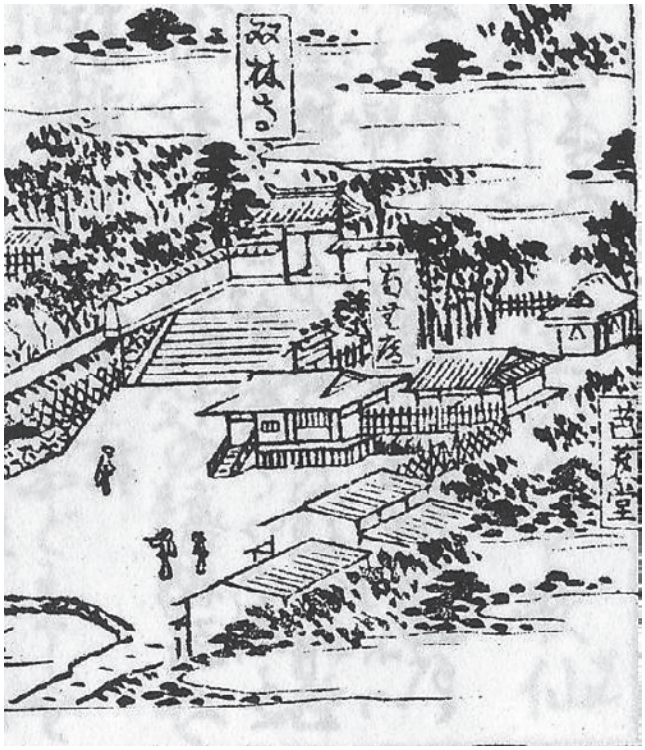
右之通先達テ絵図の外、地面此度新譲申処
相違無御座候。尤、年貢之義ハ、聊之事候間、無
年貢之相対ニ仕候。仍、永々不可有相違候也。
但、右為開山へ香華料金一両二朱仕寺納可被下候。以上

天明七年丁未五月　　双林寺　印
役者　西阿弥　印
一臈　林阿弥　印

闌更殿

参考　天明七（一七八七）年九月刊『拾遺都名所図会』巻二（部分）

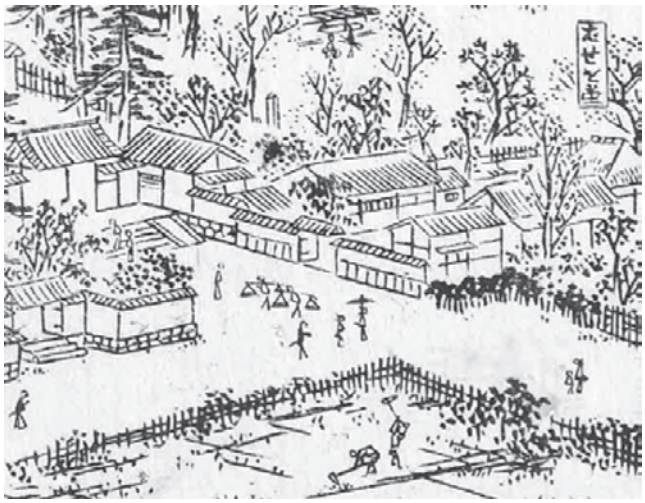
双林寺　南無庵　芭蕉堂



南無庵は、東向き上り坂の北向きに小さな門があり、実際はこの門を入って、東側階段を上がるのであるが、この画図では南無庵の西側に階段がある。芭蕉堂は奥にある。闌更が最初に設けたのは、芭蕉堂、南無庵と草庵の三つの建物であったと推察できる。

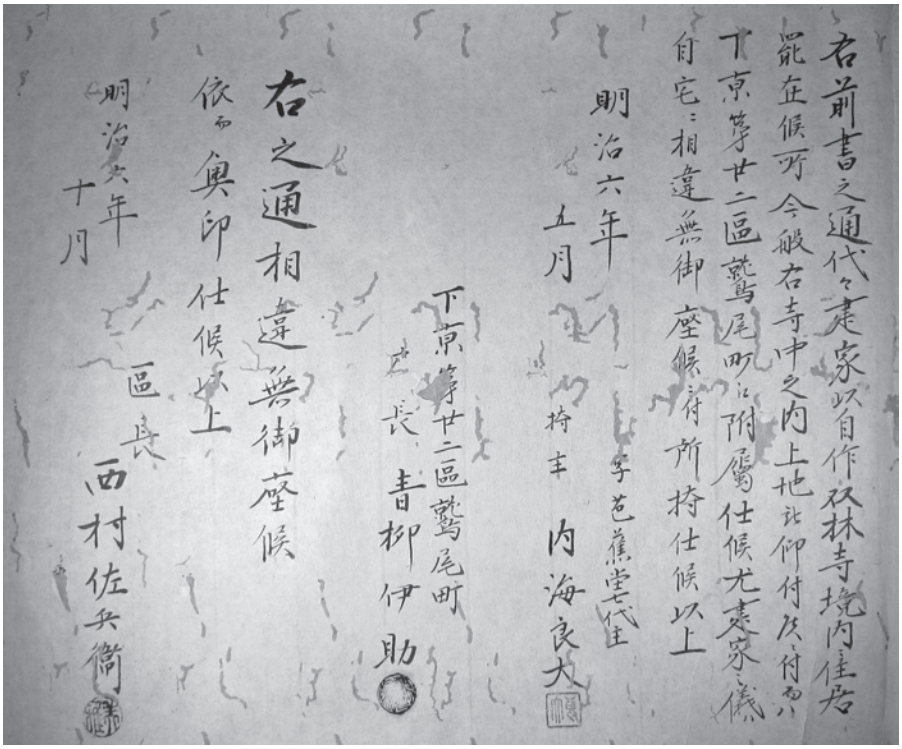
参考　文久二（一八六二）年刊『再撰花洛名勝図会』（部分）

はせを堂



南無庵は、東向き上り坂の北向きに土塀らしき門があり、西側には生垣がある。芭蕉堂は奥にある。

(3)　明治六年五月並びに十月付　内海良大　戸・区長宛住居届



右前書之通代々建家以自作双林寺境内住居
罷在候所今般右寺中之内上地被仰付候ニ付テハ
下京第廿二区鷲尾町ヱ付属仕候尤建家之儀ハ
自宅ニ相違無御座候ニ付所持仕候以上

明治六年
五月

字芭蕉堂七代主
持主　内海良大

下京第廿二区鷲尾町
戸長　青柳伊助

右之通相違無御座候
依テ奥印仕候以上

明治六年
十月

区長
西村佐兵衛

右前書之通、代々建家以自作双林寺境内ニ住居罷在候所、今般右寺中之内、上地被仰付候ニ付テハ下京第廿二区鷲尾町ヱ付属仕候。尤建家之儀ハ自宅ニ相違無御座候ニ付、所持仕候。以上

明治六年　　字　芭蕉堂七代主
五月　　持主　内海良大　印

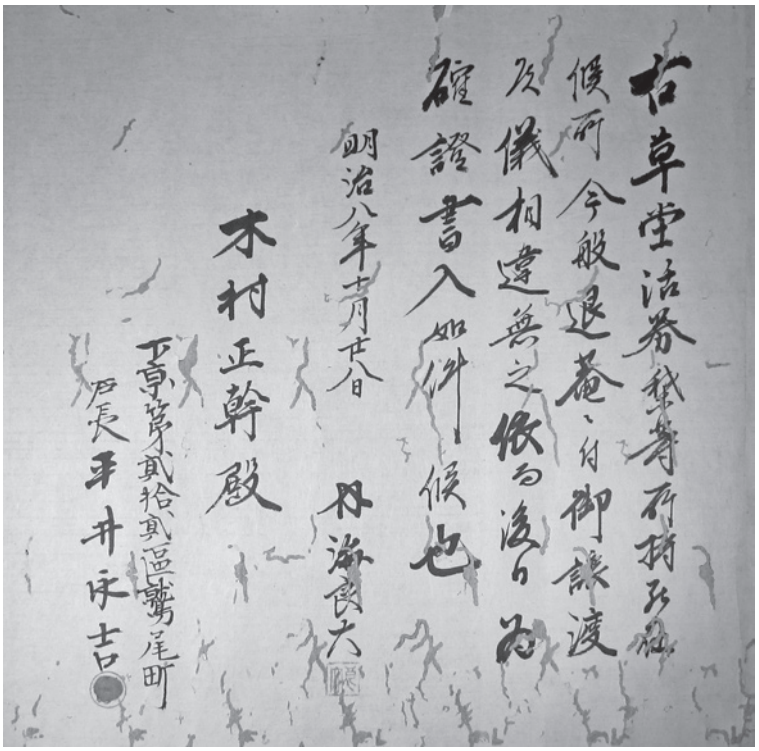
下京第廿二区鷲尾町
戸長　青柳　伊助　印

右之通、相違無御座候。
依テ奥印仕候。以上

区長
明治六年　　西村佐兵衛　印
十月

(4)

明治八年十月廿八日付
内海良大　木村正幹宛草庵譲渡の一札



右草堂沽券我等等所持罷在
候所、今般退庵ニ付、御譲渡
候儀、相違無之。依テ後日為
確証書入如件候也。

明治八年十月廿八日　内海良大

木村正幹殿
下京第二十二区鷲尾町
戸長　平井永吉　印

第二章　初世高桑闌更主催の天明六年『花供養』影印 翻刻と解題

解　題

天明六年刊『花供養』は、京都東山芭蕉堂の初世堂主である闌更の主催である。半紙本一冊。墨付一四丁。舞鶴市郷土資料館糸井文庫蔵。請求番号、十四・ハ・22。天明六（一七八六）年の初刊から明治三（一八七〇）年までの現存する書冊は全五四巻であるが、本稿は最初の刊行本である。なお、同資料を含む『花供養』は、本文の画像と翻刻とをWEB公開している。

『花供養』は、年刊の俳諧追善集である。途中で休刊することもあったが、天明六年から明治三年までの凡そ九〇年の長きに亘る。この間、投句数は次第に増加し、地域は凡そ全国に及んだ。このような状況からは、近世後期の京都俳壇に限らず、全国の俳諧を考察する資料として第一次の基礎資料であるといえる。全冊の画像と翻刻の完成を目指して、順次翻刻と画像の公開を継続中であるが、ここにその成果の一端を示す。

闌更とその門人を『芭蕉堂門人録』から引用する。なお、通し番号を私に付した。また、〔　〕は後の堂主らによる補筆、訂正を示す。

1　一世　闌更　　在庵　自天明三年　至寛政十年　　十二ケ年

高桑氏、通称を長次郎と呼び、名を忠保と云ふ。二夜庵、半化房、桃亭は、その別号なり。加賀金沢の人。医を業とし、俳諧を希因に学ぶ。後年京に出で、天明三年、東山に芭蕉堂を建て、南無庵を結びて俳師となり、寛政五年、花の本の允許を蒙り、寛政十年五月三日歿す。年七十三。高台寺に葬る。

一世門人

2　蒼虬　　成田久左ヱ門。加賀金沢藩士。当庵二世継襲。〔年八十三　天保十三年三月十三日歿〕

3　梅價　　北〔喜多〕川萬造〔象〕。名ハ公香、字ハ子国。京ノ人。万象居、枯魚堂ト号ス。天保十四年三月三日歿ス。〔年七十〕

4　一杪　　浅野屋長太郎。加賀ノ人。後年、馬来ノ門ニ入ル。冬葉庵ノ号アリ。

5　文角　　太田平右衛門。可中庵ト号ス〔樹々トモ号ス〕。筑後〔久留米〕ノ人。

6　松菊　　池村氏、加賀〔金沢〕ノ人。圃辛亭ト号ス。

7　篤老　　飯田完蔵、名ハ利矩、芸州広島藩士。大坂ニ住シ、医ヲ業トス。南惠園ノ号アリ。文政九年四月二十三日歿ス。〔年四十九〕

8 何丸　小沢治郎右ヱ門。信州ノ人。〔毛呂一元ト称シ〕医ヲ業トス。月院社ノ号アリ。後、江戸ニ出デ　天保八年十月二十七日歿ス。〔年七十七〕

9 可都里　五味宗蔵。甲斐ノ人。雪亭、鶏鳴館ト号ス。晩年、明を失ひ、文化十四年九月十五日歿ス。〔年七十五〕

10 梅室　桜井治郎作。名は宜弘。方円居、遅速庵、余花園、寒松庵等ノ号アリ。後、花ノ本トナリ、嘉永五年十月一日歿す。〔年八十四〕

11 馬来　上田氏。加賀金沢ノ人。槐庵ト号シ、始、希因ノ門ニ学ブ。寛政四年七月十二日歿ス。〔年五十四〕

12 嵐外　辻五七〔政輔〕。越前敦賀ノ人。椰の屋、六庵、北亭ト号シ、南無庵ノ号ヲ継グ。後、甲斐ニ住シ、天保〔弘化〕二年三月〔二十六日〕歿ス。〔年七十五〕

13 可枝　豊田屋九郎兵衛。加賀ノ人。米商。一渓堂ト号ス。始メ希因ノ門ニ学ブ。〔後、闌更門ニ入ル〕

14 既白　棲来〔無外〕庵〔雲水房〕ト号ス。加賀ノ人。始メ希因ノ門ニ学ブ。釈氏。〔後、闌更門トナル。やぶれ笠、千代尼句集ノ著アリ〕

15 珈涼女　藤田氏。藤蔵ノ妻。草婦人ト号ス。始メ希因ニ学ビ、晩年、千代女ニ教ヘヲ受ク。

16 鷺白　黒岩忠右ヱ門。上州草津ノ人。雲嶺庵と号ス。文化七年八月二十七日歿ス。〔年七十九〕

17 車蓋　よろづ屋ト称シ、京ノ商家ナリ。亭々坊ト号ス。寛政七年二月二十八日歿ス。

18 菱湖　上村氏。菱屋小兵衛。京ノ人。

19 貞松　遠藤氏。奥州弘前ノ人。二夜庵二世トナル。後、江戸ニ出デ、寛政十年十一月十二日、郷里ニ歿ス。〔年四十〕

20 象麿　天真居ト号ス。

21 廉古　浅野伊左ヱ門。加賀金沢ノ人。園亭ト号ス。文政二年五月四日歿ス。年六十六。

22 挙遠　才田屋四郎兵衛。加賀ノ人。

23 久喜丸

24 関叟　号、九々庵。薩摩ノ僧。京ニ住シ、後、暁台ニ学ブ。

25 布雪　号、桑老父。

26 眉山　大坂屋七右ヱ門。加賀山中〔金沢〕ノ人。鳥翠台二世トナリ、北枝堂ト号ス。文化十〔四〕年四月十五日歿ス。

27 雲蝶　号、幾暁庵。宝暦六年四月歿ス。

28 珙木　森岡又四郎。獅子窟、三木ノ号アリ。寛政十一年十二月歿ス。

29 白黛　京ノ人。文化年中歿ス。

30 龍美

31 其成　菊屋太兵衛。京ノ書肆ナリ。又、蕪村ニモ学ビ、後、几董ニ学ブ。

32 土卵　富氏。名ハ敦〔数〕吉。左近将監従五位下ニ叙シ、禁裏ニ奉仕ス。狼狽窟ノ号アリ。〔俳文ヲ能クス〕。文政二年九月〔十〕七日歿ス。〔年五十一〕

33 斗流

34 嵐月

35 芦涯　大杏屋氏。〔京都ノ人〕

36 得終尼
37 百嘯
38 闌居　釈氏。法通。肥後八代、正教寺九世住職。露葵庵、支明ト号ス。
39 五芳　石田氏。播磨ノ人。下総銚子ニ住ス。有無庵蘿堂ノ号アリ。文政六年六月（ママ）日歿ス。
40 乙鶴　西川喜左ヱ門道宜。近江ノ人。蓮水庵ト号ス。後、蒼虬ニ学ビ、天保二年四月十日歿ス。〔年六十四〕
41 護物　谷川氏。伊勢ノ人。江戸に住ス。田喜庵、東寅居、鶴飛ノ号アリ。後、道彦ニ学ビ、弘化元年七月二十八日歿ス。〔年七十三〕
42 虚白　釈氏。名、恵喬。京東福寺ノ住僧。涼蔭園松堂〔偎芋庵〕ト号ス。近江土山ノ人。弘化四年十月晦日歿ス。〔年七十五〕
43 廬峰　逸庵ト号ス。加賀ノ人。
44 黄花　加賀ノ人。五松下ト号ス。
45 素翫　三木氏。若狭ノ人。〔文化年中〕
46 元朝　奈良井氏。松江ノ藩士。八雲庵、元日ト号ス。
47 〔梅仙　浮月楼ト号ス。栗太郡栗山村字辻村ノ人。寛政元年七月二十二日歿。年五十五。妻りき、句ニ親シミシナリ〕

右が『芭蕉堂門人録』中の闌更門の記載であるが、闌更主催の『花供養』に出句している主要俳人について見ると、31其成は、書肆の菊舎太兵衛であり、『花供養』の出版（天明六年から寛政七年迄）を担当している。35芦涯も書肆勝田喜右衛門であり、『花供養』の出版（二世蒼虬主催の寛政一一年から文化二年迄）を担当している。俳諧と出版の強い結び付きが知られる。また、各地域の俳壇を担う7篤老（広島）、8何丸（江戸）、9可都里（甲斐）、14既白（加賀）、16鷺白（草津）、19貞松（奥州）、28珙木（能登）、38闌居（肥後）、41護物（江戸）らも注目される。因みに、32土卵は「左近将監従五位下」であり、市井の俳諧師の門人としては特記すべきものである。36得終尼は、闌更の妻である。

次に、花供養会に出席している人々を一覧する。○が、参会である。これらの人々によって花供養会は支えられていたのである。＊は、『芭蕉堂門人録』に登載されている門人であるが、半数に満たない。これは、『花供養』が門人であるかどうかに拘らない自在な性格をもった撰集であることを示す。同時にこのことが、門人ではない多くの人々を惹き付けた要因の一つであるとも言える。

資料１　花供養会出席一覧

＊は『芭蕉堂門人録』に登載されている者
○は花供養会出席
天明７年については出席者が確定できないので除く

俳名（書肆名）	地域	天明6	寛政1	同2	同3	同4	同5	同6	同7	同8	同9	同10
＊闌更	京	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
＊其成（菊舎太兵衛）	京	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○
＊芦涯（勝田喜右衛門）	京		○		○	○	○	○	○	○	○	○
百池	京			○	○	○	○	○	○	○	○	○
月峰	京				○	○	○	○	○	○	○	○
古塘					○	○	○	○	○	○	○	
＊白黛	京					○	○		○	○	○	○
＊土卵	京					○	○	○	○	○		○
＊斗流	南山城					○	○	○	○	○	○	
桃睡	越後		○	○	○	○	○					
魯長	南山城			○			○	○	○			○
杜桂	京					○	○	○	○	○		
志諺	京						○	○	○	○		○
驢丹	近江大津							○	○	○	○	○
＊車蓋	京	○		○			○	○				
南栄		○		○							○	○
＊得終	京				○	○			○			○
一峰	越中富山				○		○	○	○			
俚尤	京						○		○	○	○	
木貞	京							○	○	○	○	
都雀	京							○	○	○	○	
応美	京								○	○	○	○

翻刻凡例

翻刻にあたっては、次の方針に従う。

(1) 丁移りは、丁の最後に、柱刻によって漢数字で示し、丁の表は「オ」裏は「ウ」で略記する。柱刻が無い時は、「見返し」「序」「跋」などと適宜補う。

(2) 本文の改行は、原則として原文のとおりとする。

(3) 連句における短句は、一字下げとする。

(4) 漢字の字体は、概ね常用漢字体に統一する。

(5) 濁点・半濁点は私に附し、原文にあるものは「(濁ママ)」とする。

なお、濁音が繰り返されない場合の踊り字は、左のように統一する。

親こゝろ→親ごゝろ

(6) 墨で書き入れたルビは振らない。

(7) 踊り字については、原文の表記に従い、次のように統一する。

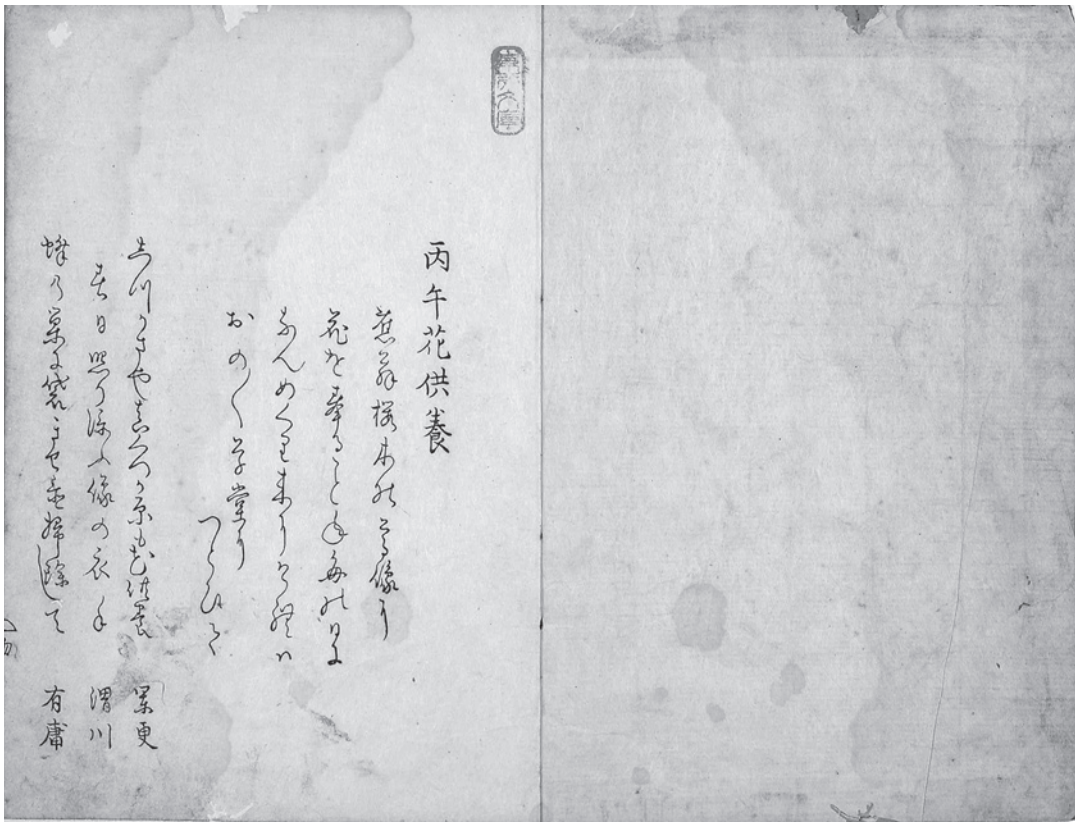
漢字一字　々
ひらがな一字・同濁点　ゝ・ゞ
カタカナ一字・同濁点　ヽ・ヾ
二字以上の繰り返し・同濁点　〳〵・〴〵

参考文献

一　京都俳諧研究会著「『花供養』書誌」(立命館大学アート・リサーチセンター紀要「アート・リサーチ」10号、二〇一〇年三月刊)
一　立命館大学アート・リサーチセンター主催、二〇一〇年一一月一日、展示図録「花供養と京都の芭蕉」、WEB公開中
一　京都俳諧研究会著「花供養と京都の芭蕉」(立命館大学アート・リサーチセンター紀要「アート・リサーチ」11号、二〇一一年三月刊)
一　竹内千代子編・校訂「芭蕉堂門人録—影印と翻刻—」(二〇一八年三月、私家版)
一　京都俳諧研究会編・翻刻「『花供養』翻刻集成」(継続中)、WEB公開中

花供養

（表紙）

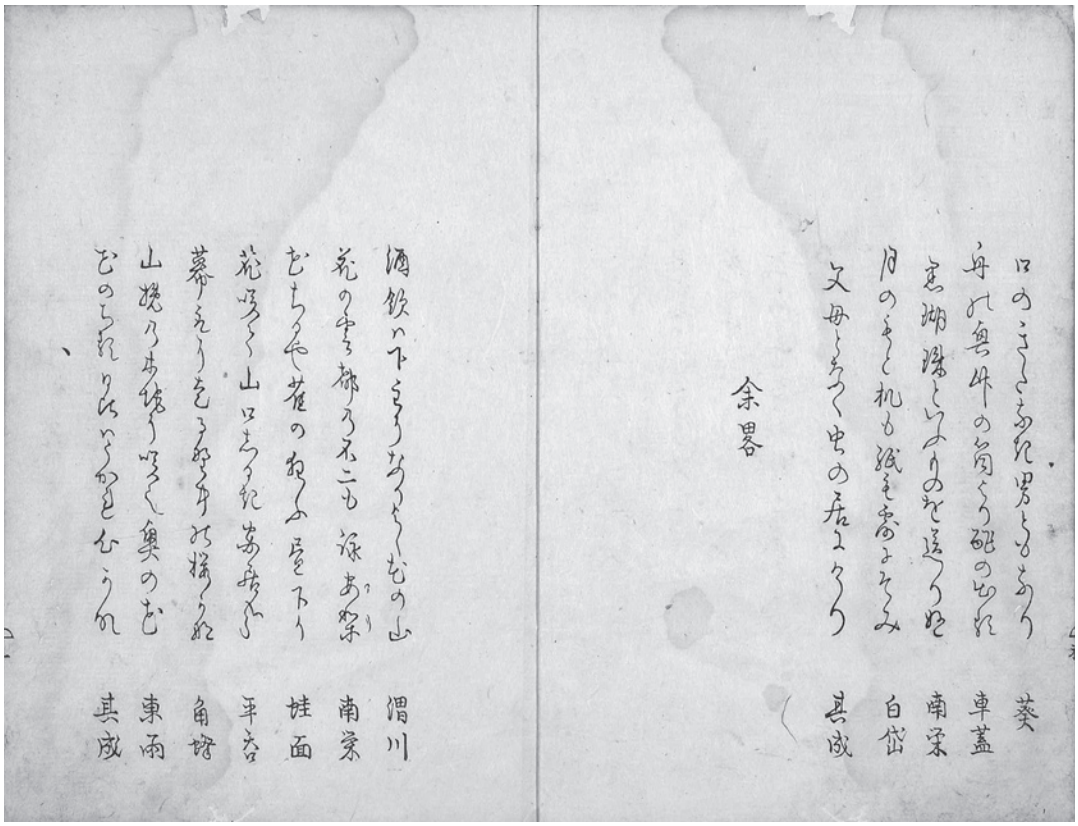


丙午花供養
蕉翁桜木の尊像に
花を奉ること、年毎の日に
なんめぐり来にければ、
おの〳〵草堂につどひて
しづかさや真くづが原も花供養
春日照り添ふ像の衣手
蜂の巣に袋きせ置掃除して

闌更
渭川
有庸

（表紙見返し）

（初オ）



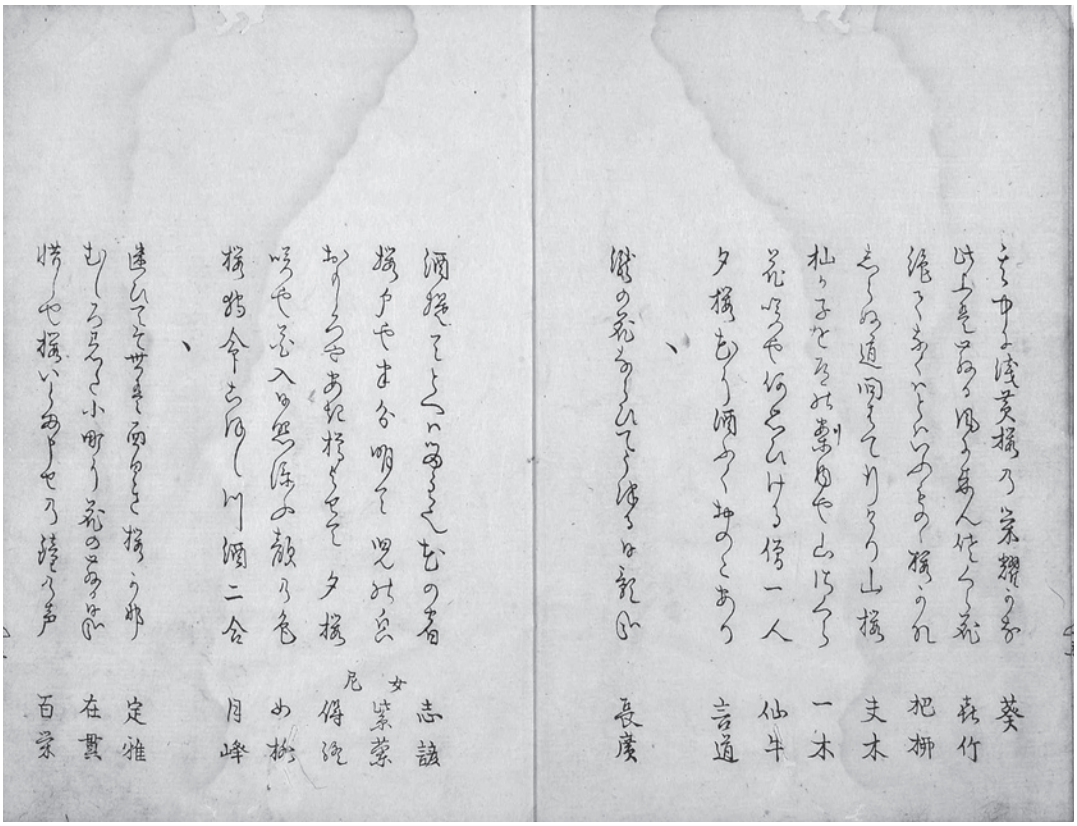
口のきたなき男どもなり　葵
舟の興竹の筒より酢の出る　車蓋
黒瑚珠といふものを送りぬ　南栄
月のもと机も紙も露にそみ　白岱
父母となく虫の居にけり　其成

余略

（初ウ）

酒飲ば下主になかよく花の山　渭川
花の雲都の不二も詠あり　南栄
花ちるや雀の狂ふ昼下り　蛙面
花咲て山口しるき家居哉　平呑
幕取に走る野中の桜かな　角蜂
山挽の木地に咲也奥の花　東雨
花のちる日比はうかれ心かな　其成

（一オ）



其中に浅黄桜の栄耀かな　葵
此上は散る風に来んさくら花　喜竹
絶てなくばとはいふものゝ桜かな　杷柳
しらぬ道問はで行けり山桜　夫木
杣が子を道の案内や山ざくら　一木
花咲や何思ひける僧一人　仙牛
夕桜花に酒ふくおのこあり　言道

、

瀧の花ならびてうつる日影哉　長広

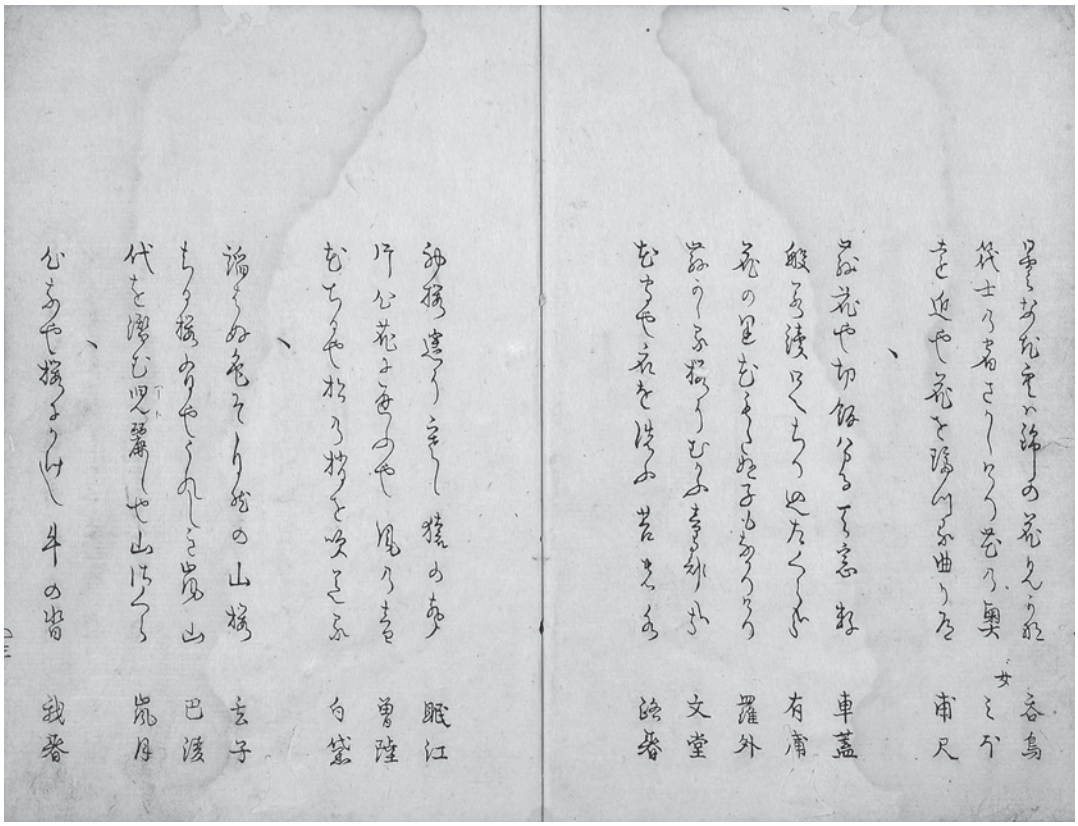
（一ウ）

酒提てとへば留主也花の宿　志諺
桜戸や半分明て児の顔　女紫蘭
おもしろやあき樽よせて夕桜　尼得終
咲や花入日照添ふ顔の色　女桃
桜狩命こぼしつ酒二合　月峰

、

迷ひてぞ世は面白き桜かな　定雅
むしろ着た小町に花の散る日哉　在貫
惜しや桜いとま申せの鐘の声　百栄

（二オ）



曇なき空は錦の花見かな　呑鳥
筏士の宿さがしけり花の奥　みほ（女）
遠近や花を隔つる曲り道　甫尺

、

散花や切飯分る天窓数　車蓋
般若読口へちり込さくら哉　有庸
花の里花もたぬ子もなかりけり　羅外
散かゝる桜にむかふ童部哉　文堂
花守や衣を洗ふ苔の水　路春

（二ウ）

初桜遥に寒し猿の声　眠江
片心花に通ふや風の音　曽陸
花ちるや松の梢を吹送る　白黛

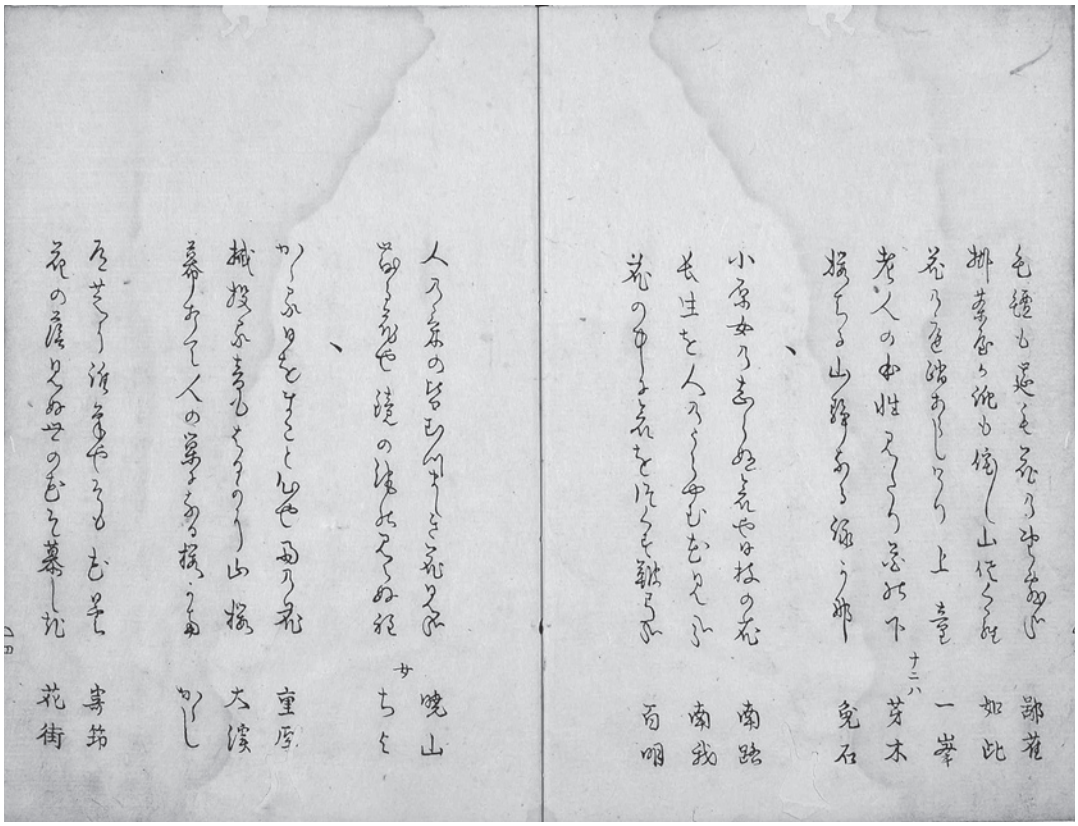
、

謟はぬ色ぞ自然の山桜　玄子
ちる桜有やうれしき嵐山　巴凌
代を潜む児麗しや山ざくら　嵐月

、

心なや桜にかけし牛の沓　我春

（三オ）



毛氈も莚も花の座敷哉　鄙雀
掛茶屋が訛も侘し山ざくら　如此
花の庭踏あらしけり上童　一峰
老人の本性見たり花の下　ナニハ　芽木
桜ちる山静なる詠かな　兎石

、

小原女のしらぬ哀や日枝の花　南路
長生を人のうらやむ花見哉　南我
花の中に哀をつくす皷弓哉　百明

（三ウ）

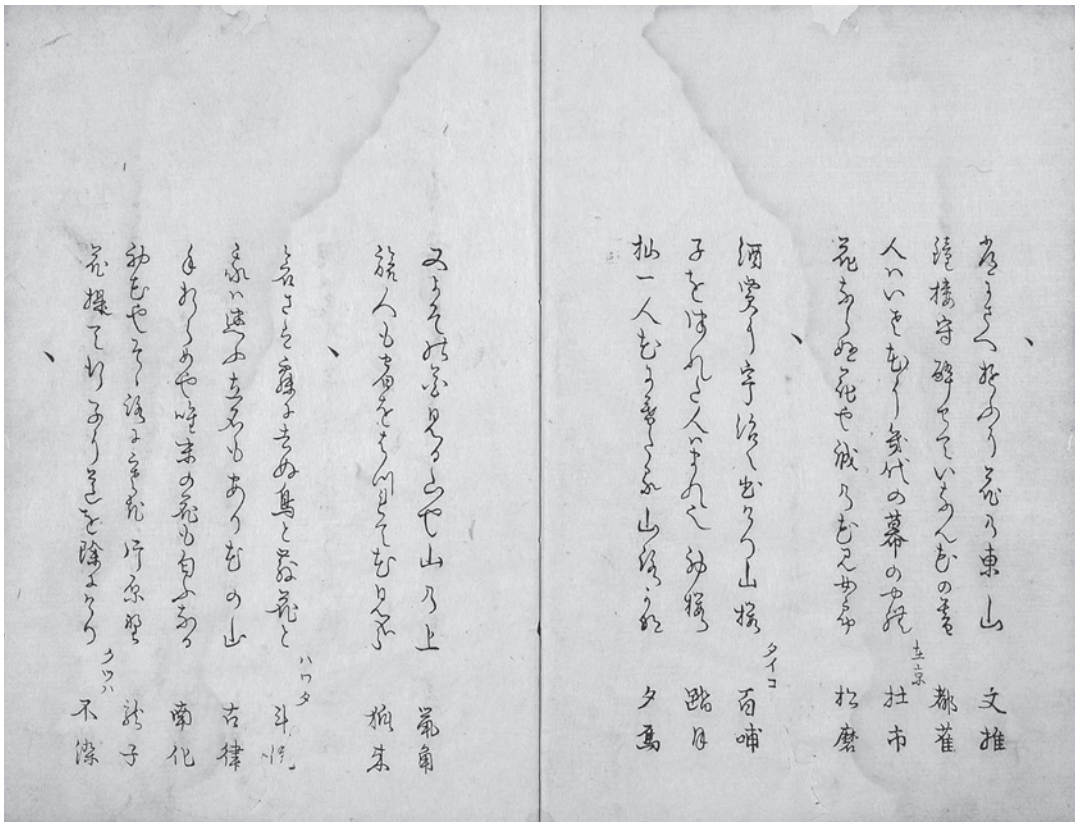
人の気の皆むつまじき花見哉　暁山
散る花や鏡の池の見えぬ程　女　ちよ

、

かゝる日をまこと心や雨の花　重厚
械投る音もはるかに山桜　大渓
幕打て人の巣になる桜かな　かゝし

道芝に誰筆やそも花曇　寄笻
花の陰見ぬ世の花ぞ慕しき　花街

（四オ）



、

常にさへ遊ぶに花の東山　文推
鐘楼守酔せていなん花の暮　都雀
人はいさ花に幾代の幕のゆれ　杜市（在京）
花ならぬ花や誠の花見女郎　松磨

、

酒買に宇治へ出けり山桜　百哺（ダイゴ）
子をつれた人はまれ也初桜　踏月
杣一人花に暮たる山路かな　夕烏

（四ウ）

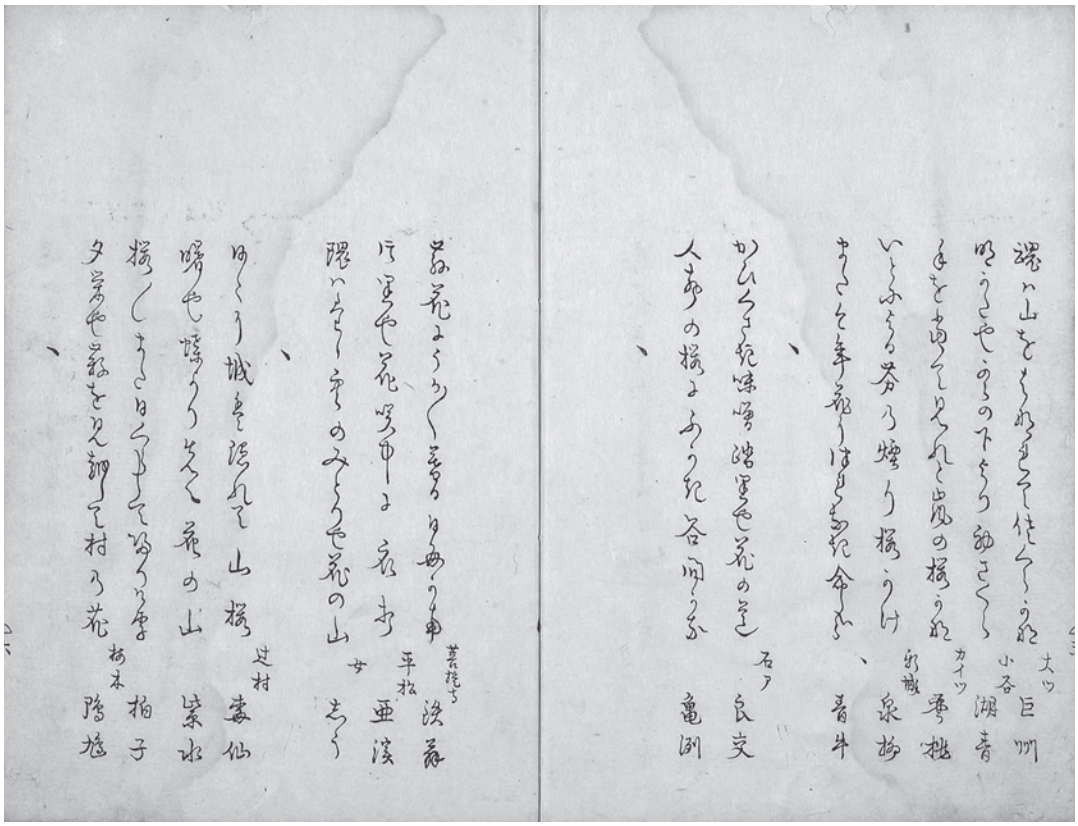
又よその花見る山や山の上　鼠角
旅人も宿をはづれて花見哉　狐来

、

哀さは寝に去ぬ鳥と散花と　斗流（ハワタ）
我は迷ふ立名もあり花の山　古律
手折らめや唯末の花も匂ふなる　南化
初花やそゞろに寒き片原野　龍子
花堤て行子に道を除にけり　不染（クヅハ）

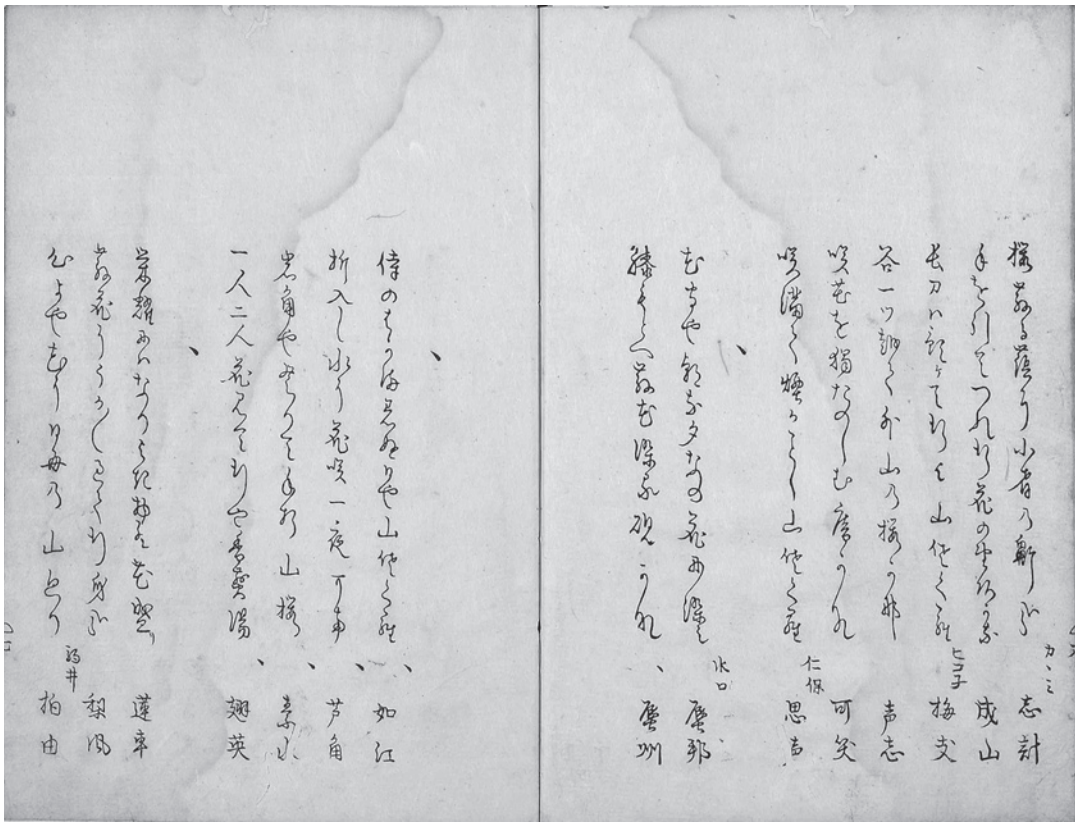
、

（五オ）



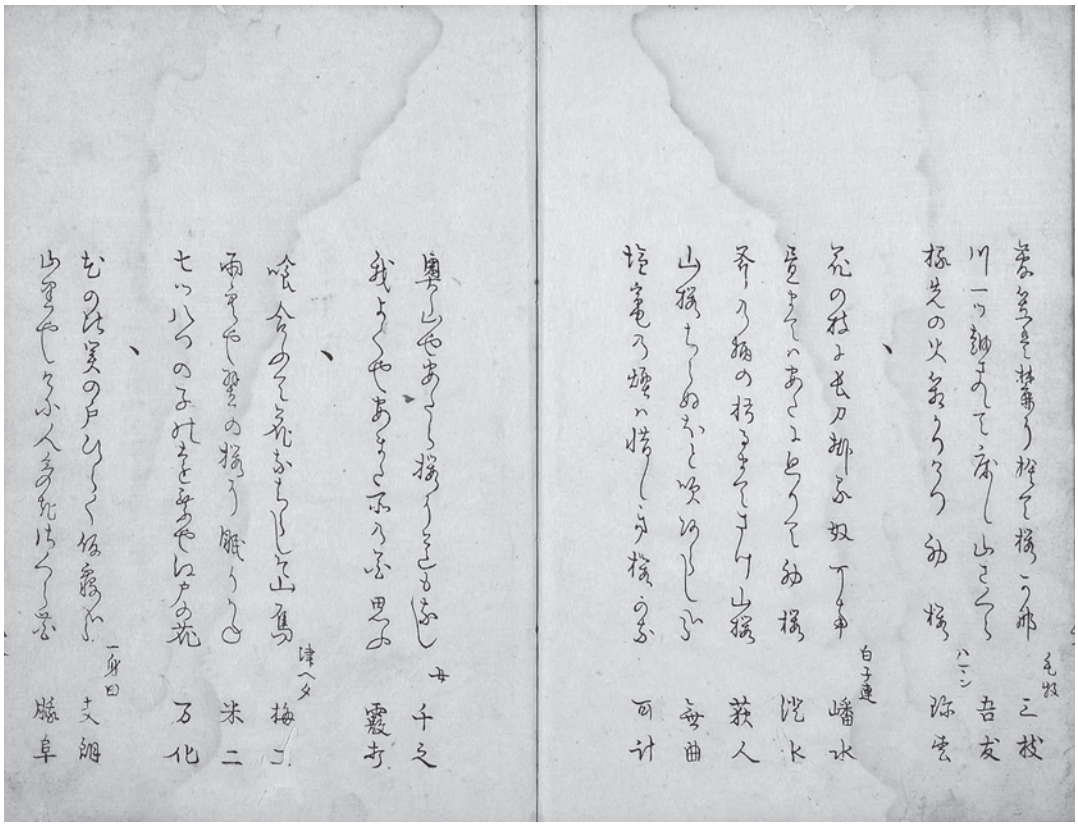
魂は山をはなれてさくらかな　大ツ　巨州
明がたや雲の下より初ざくら　小谷　湖青
手を当て見れど嵐の桜かな　カイヅ　琴桃
いとによる芬の煙り桜かげ　新城　泉柳
また今年花につれなき命哉　、　青牛
、
かびくさき味噌踏里や花の道　石部　良交
人声の桜にふかき谷間かな　亀洌
、
（五ウ）

散花にうか〳〵暮る日毎かな　菩提寺　鉄翁
片里や花咲中に衣打　平松　亜渓
隈はたゞ空のみどりや花の山　女　しう
、
日々に城は隠れて山桜　辻村　梅仙
曙や蝶より先へ花の山　紫水
桜〳〵また日くらして帰りけり　柏子
夕栄や薮を見越して村の花　梅木　鴨鳩
、
（六オ）



桜散る陰に小者の鮮哉　カゞミ　志計
手を引てつれ行花の座頭かな　成山
長刀は預ヶて行よ山ざくら　ヒコネ　梅支
谷一つ越て外山の桜かな　声志
咲花を独たのしむ庵かな　可笑
咲満て煙がごとし山ざくら　仁保　思声
、
花守や朝な夕なの花に染み　水口　蜃邦
膝もとへ散花染る硯かな　蜃州
（六ウ）

、
侍のはかま着ぬ日や山ざくら　、如江
折入し水に花咲一夜かな　、芦角
岩角や登りて手折山桜　、素水
一人二人花見て行や香煎湯　、翅英
、
栄耀にはなりよき物か花盛リ　蓮車
散花にうか〳〵過て行身哉　梨風
心よや花に日毎の山廻り　駒井　柏由
（七オ）



菅笠は麓に捨て桜かな　毛牧　三枝
川一つ越されてゆかし山ざくら　吾友
椽先の火箱かりけり初桜　八マン　弥松

、

花の枝に長刀掛る奴かな　白子連　嶓水
昼まではあだに廻りて初桜　澄水
斧の柄の朽るまでさけ山桜　荻人
山桜ちらぬほど吹あらし哉　無曲
塩竈の煙は惜しき桜かな　可計

（七ウ）

奥山やあたら桜に道もなし　女　千之
我よくやあまた所の花思ふ　霰打

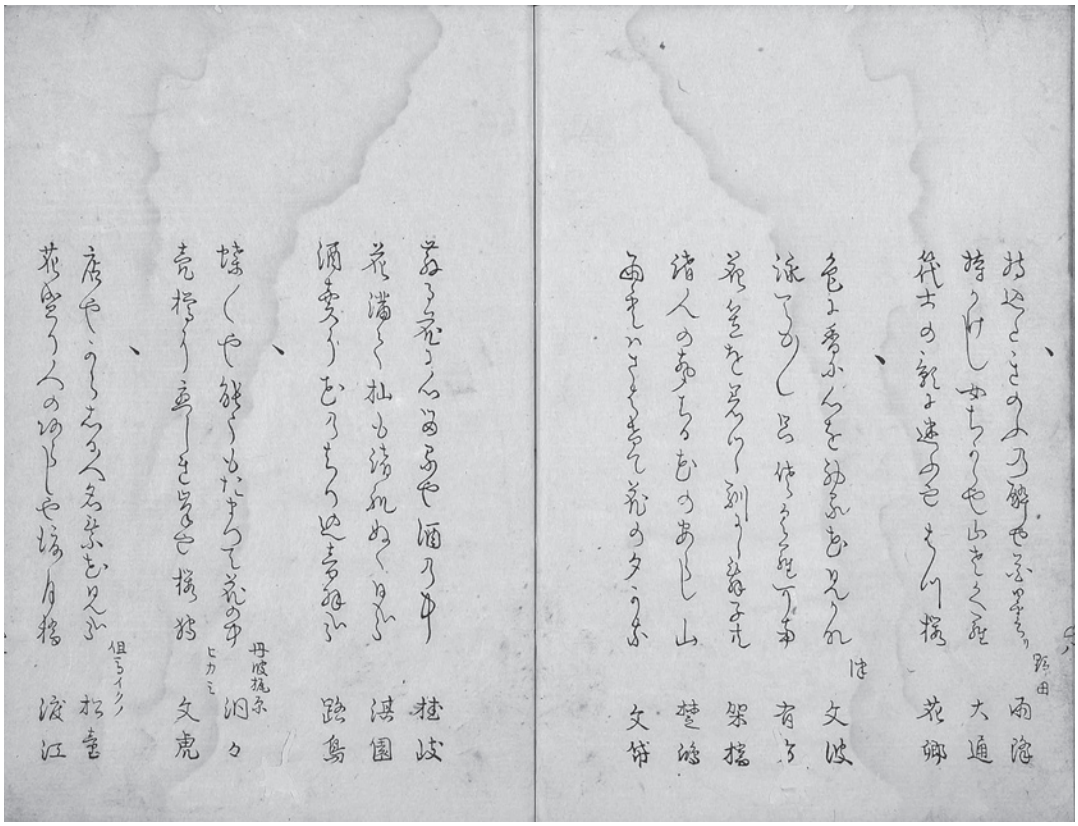
、

喰合ふて花なちらしそ山鳥　津ベタ　梅二
雨空や翌の桜に眠りかね　米二
七つ八つの子の遠乗や江戸の花　万化

、

花の比関の戸ひらく仮寝哉　一身田　支朗
山里やげに人多きさくら花　腛阜

（八オ）



、

持込だきのふの酔や花曇り　野田　雨降
持かけし女ぢからや山ざくら　大通
筏士の影に迷ふやはつ桜　花郷

、

色に香に心を初る花見かな　津　文波
詠でも〳〵只さくらかな　有方
花笠を着つゝ馴にし舞子共　架橋
諸人の声ちる花のあらし山　楚鴻
雨雲はさばけて花の夕かな　文帑

（八ウ）

散る花に心留るや酒の中　桂岐
花満て杣も諸肌ぬぐ日哉　淇園
酒売に花のちり込音羽哉　路鳥

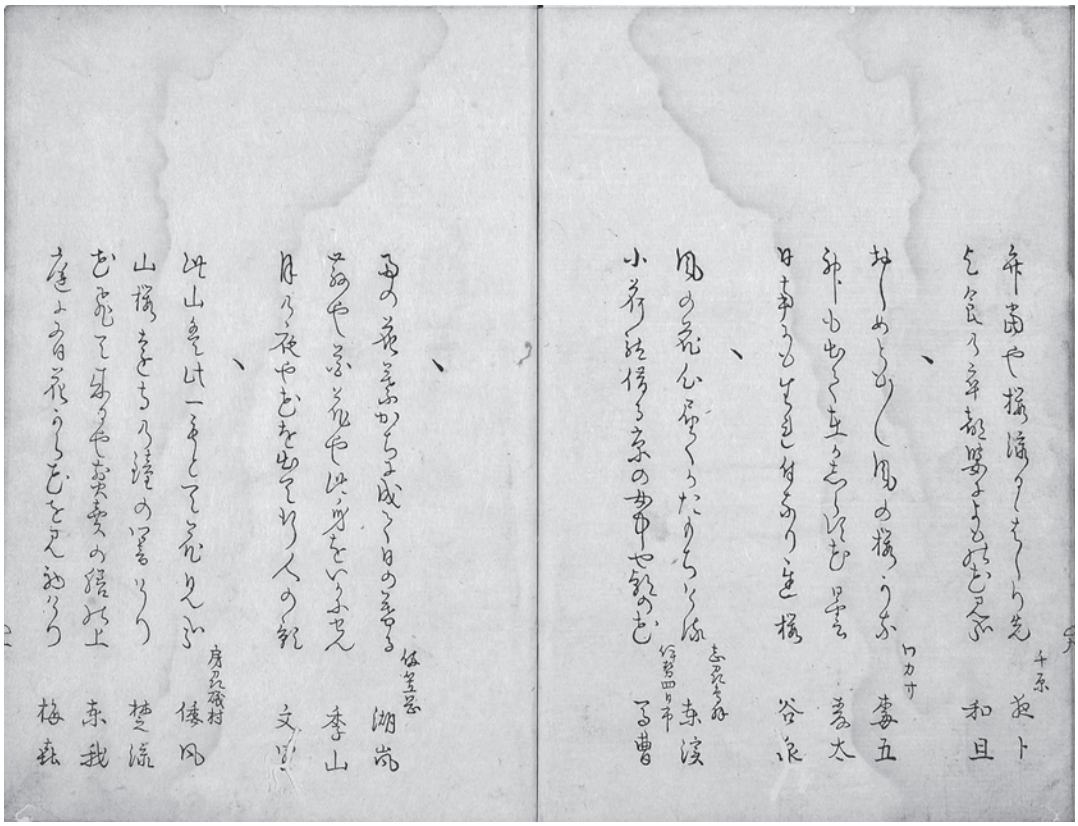
、

蝶〳〵や能うもだまつて花の中　丹波梶原　洞々
殻樽に恋しき峰や桜狩　ヒカミ　文虎

、

店やからしる人名乗花見哉　但馬イクノ　松童
花盛り人のあらしや渡月橋　渡江

（九オ）



弁当や桜流るゝはしり先　千原　夜卜
乞食の卒都婆によもの花見哉　和旦

、

おしめども〳〵風の桜かな　ワカサ　梅五
神も出て在かしらず花曇　麦太
日南にも生れ付なり遅桜　谷泉

、

風の花心届くかたもちける　志州鳥羽　東渓
小荷駄借る京の女中や朝の花　伊勢四日市　馬曹

（九ウ）

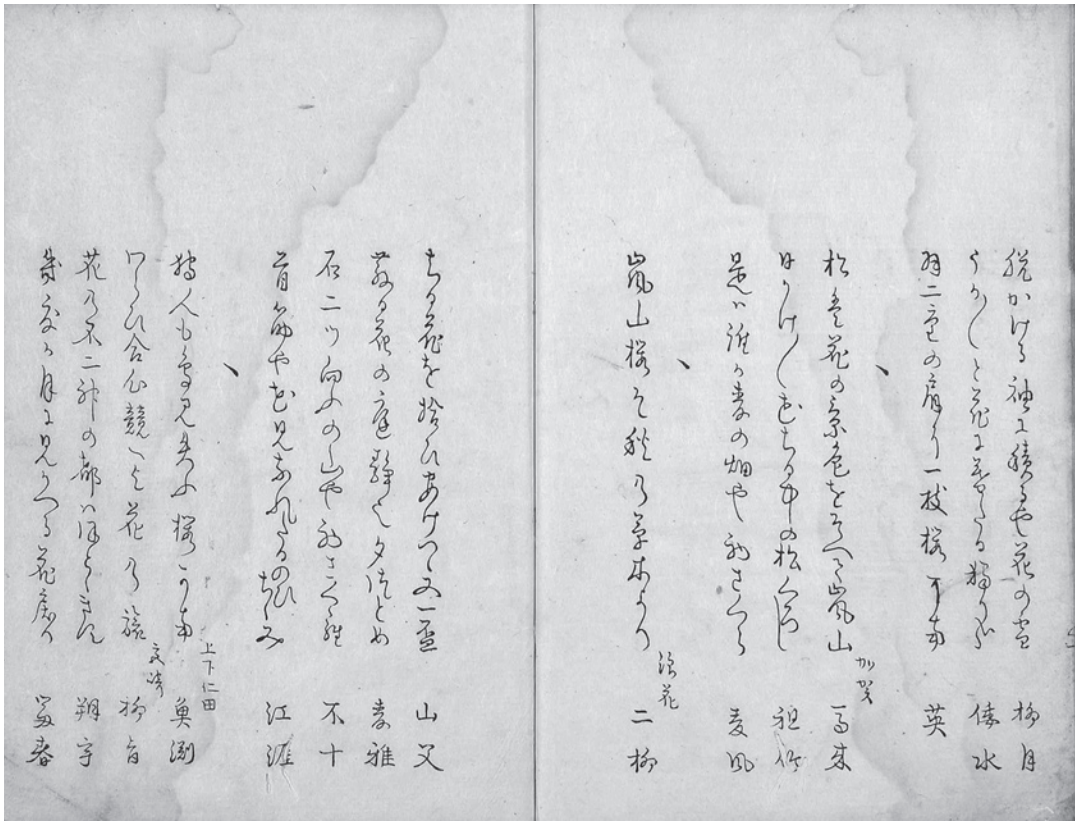
、

雨の花葉がちに成て日の暮る　備笠岡　湖嵐
散や花花や此身をいかにせん　季山
月の夜や花を出て行人の影　文里

、

此山は此一もとで花見哉　房州磯村　倭風
山桜遠寺の鐘の響けり　楚流
花飛で来るや煎売の膳の上　東我
庭に有花から花を見初けり　梅喜

（一〇オ）



脱かける袖に積るや花の雪　柳月
うか〳〵と花に暮たる独り哉　倭水
羽二重の肩に一枝桜かな　英

、

松は花の景色をそへて嵐山　馬来
日かげ〳〵花ちる中の松くろし　祖竹
是は誰が麦の畑や初ざくら　麦風

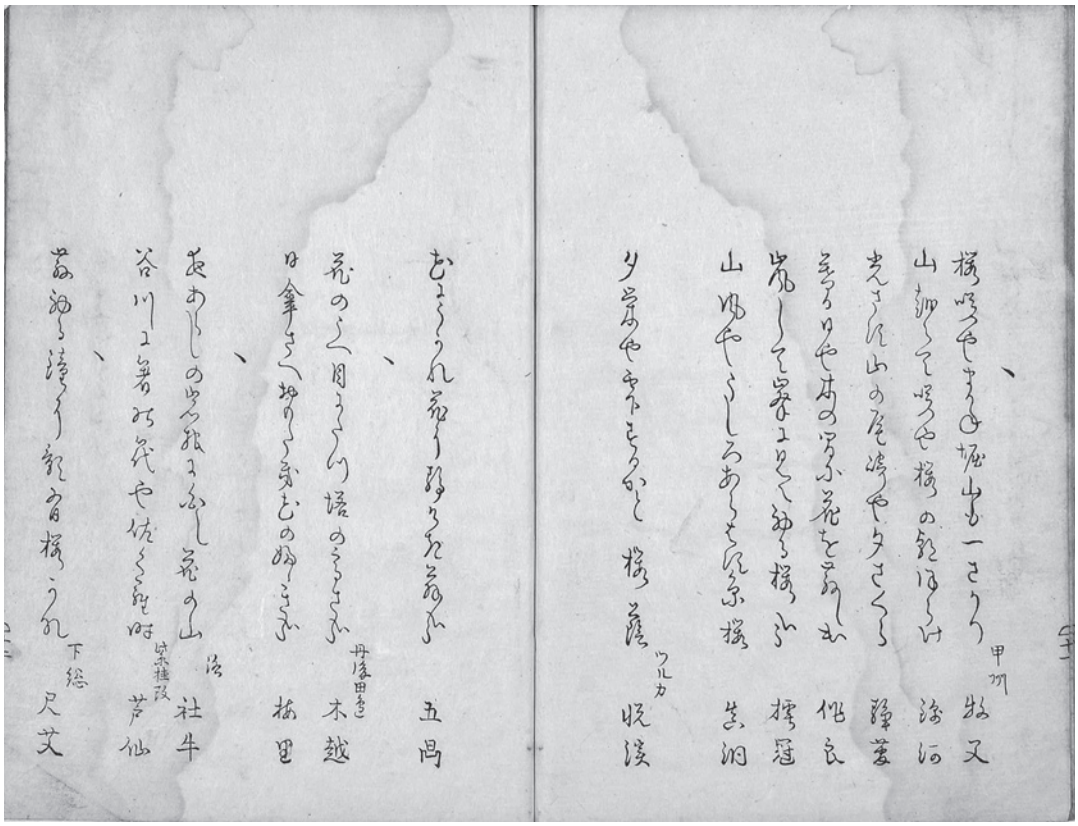
、

嵐山桜ぞ秋の草木より　浪花　二柳
（一〇ウ）

ちる花を拾ひあげつゝ又一盃　山父
散る花の庭静也夕づとめ　麦雅
石二つ向ふの山や初ざくら　不十
首筋や花見なれたるのびちゞみ　江涯

、

狩人も鳥見失ふ桜かな　上下仁田　魚渕
わらひ合心競へよ花の旅　宮崎　柳旨
花の不二神の都はほとゝぎす　朔宇
幾度か月に見かへる花戻り　富春
（一一オ）



、

桜咲やまがね堀山も一さかり　甲州　牧父

山越えて咲や桜の朝ぼらけ　錦河

光さす山の尾崎や夕ざくら　静夢

暮る日や木の間に花を散し出　作良

嵐して峰に見え初る桜哉　樗冠

山風やうしろあらはす糸桜　真洞

夕栄や雫するかと桜陰　ツルガ　悦渓

（一一ウ）

花にうかれ花に静けき翁哉　五鼎

、

花のうへ目にたつ塔の高さ哉　丹後田辺　木越

日傘さへおもたき花のふゞき哉　梅里

、

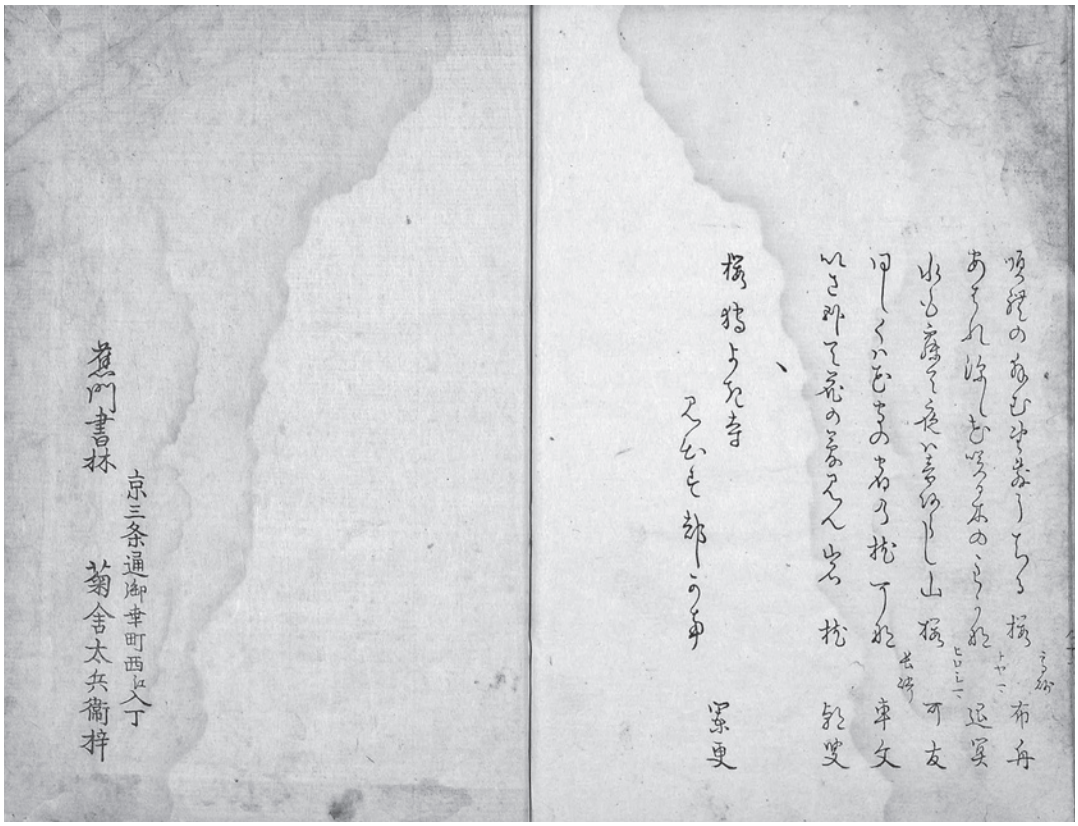
夜あらしの岩根に白し花の山　洛　社牛

谷川に箸の筏やさくら時　紫桂改　芦仙

、

散初る鐘に影有桜かな　下総　尺艾

（一二オ）



順礼の拝む座敷にちる桜　高砂　布舟
あはれ深し花咲る木の主かな　トヤマ　退冥
水も寝て夜は音あらじ山桜　ヒロシマ　可友
同じくは花守の宿の枕かな　長崎　車文
いざ臥て花の夢見ん岩枕　朝叟

、

桜狩よき寺見出す都かな　闌更

（一二ウ）

京三条通御幸町西江入丁
蕉門書林　菊舎太兵衛梓

（裏表紙見返し）

（裏表紙）

第三章　闌更の点帖「正風点　芭蕉堂闌更宗匠撰」影印と解題

解　題

本点帖は、闌更が点を付けた様子が伺える資料である。表紙に「寛政七卯五月中旬より」とあるところからは、闌更晩年の七〇歳のことである（寛政一〇年五月三日卒、享年七三）。二条家より、寛政二年に二条家俳諧宗匠、寛政五年に花の本の允許を蒙り「正風点」とする。筆記者の「松蒼」については、『芭蕉堂門人録』に記載がない。本書の所蔵者は、夢望庵文庫であるが、本稿では国文学研究資料館のマイクロ資料（モノクロ撮影）を用いた。マイクロ請求記号「318-17-3」。因みに、夢望庵は、芭蕉堂一二世藍水の門人である。

縦二二・八糎、横一四・〇糎。紙縒り綴じ。共紙表紙。墨付二七丁。全二五〇句、大半が秋冬句、春夏句が若干あり四季混交。評点は闌更、清書は松蒼。成立は、寛政七年五月中旬以降。

本書における点は、墨による長点と○点を組み合わせたものである。それに評語を加える。

まず、長点と○点であるが、次の四通りがある。

A　 　長点一本　98句

B　 　長点一本と○点一個　73句

C　 　長点二本と○点一個　36句

D　 　長点一本と○点二個　8句

点のないものは、35句であるが、このうち評語、添削があるものを含む。

点を付けるとき、最初の一順でAの長点（払い上げることに特別な意味はない）を付ける。これは平点に相当する。次に、二順目でBの○点を付け加え、厳選してAより句数は少なく、且つ高点となる。三回目の一順で、長点や○点を加えていくが、闌更の場合は、Cのように二本目の長点を加えたり、一方で、Dのように二個目の○点を加えたりしたと推測される。後述するが、A・B・C句には難点を示す評語があるが、D句には難

点を示す評語はなく、八句に厳選した様子が窺える。多くの点帖にみられる最高点などの順位、作者名などはなく、控え帖であると考えられる。

次に、評語を検討する。闌更点がある場合は、句の上に右で分類した記号を示す。濁点は適宜施す。

・　水の手は心太屋の楽屋哉　「このさくよからず」(二ウ)
・A　舟洗ふ堅田の面や落る雁　「作りやうあるべし」(六オ)
・　取入て先あたゝかな新綿哉　「作りやうあるべし」(七オ)
・　銀屏に夜の納りし草まくら　「作りやうあるべし」(二一ウ)

これらの評は、漠然とした言い方で、無点、無評よりは注目したが、評価できないというものである。ただ、A評価の句が入っているのが残念な選である。

・　風の手に狂ず梢の鳴子哉　「古し」(七オ)
・A　心太崩の白雲移りけん　「類あり」(二ウ)
・A　奈良坂や人に交る鹿の声　「類あり」(一七ウ)
・　其影の移りてふりぬ月の雨　「この句は類句あり」(六ウ)
・　魂棚や有しむかしの上になく　「類句あり」(一一オ)
・A　朝顔やまだ灯籠に灯の残り　「類作あり」(九オ)
・　便りなく地を這ふ秋の蛍哉　「類作あり」(一〇オ)

これらの評は、新しみを評価し、類句を嫌うものである。A評価があるのは、闌更の好みに合致していることを示唆するが、やはり残念な選である。

・A　鹿の声殊更月の夜也けり
　「ほとゝぎすにこのさたあり」(一七ウ)
・A　五月雨や籔の中行水の音
　「はるの句にあり」(二〇オ)

これらの評も、類句を嫌うものであるが、より具体的に言及し、闌更の関心を引いたものである。

・A　五月雨や筍籔に魚踊る
　「七夕やにあるべし」(二〇オ)
・A　髪置や華表の旭見て通る
　「かみ置にさだめがたし」(一二オ)

これらの評は、より具体的に句の難点を示し、関心の高さを窺わせる。

次に句の添削を検討する。全句が加点句であり、関心の高さが慮られる。

・C　鼠さへ住飽家ぞきりぐ〜す(ヒカ)　(一一ウ)
・C　虫干や家の風をも吹せてし(洗ん)　(二〇オ)
・B　麻刈て雨にも窓の明さかな(窓の前)　(二〇オ)
・B　水無月も志有しぞ風もをのづから(ヒの)　(二〇ウ)
・B　鼻紙の仇(アダ)に濡けり初時雨(化)　(二四ウ)
・A　日々に露のふとり(かさ)や老の秋　(二五オ)
・B　露時雨瀧(たる)にある身の思はる、　(二五ウ)

これらの添削は、助詞の一字、用字、一単語を添削したもので、細かに丁寧に添削がなされている。次の用例では大胆に添削が行われており、良句故の添削であると判断できる。

・C 鷲の羽の流水出たる清水哉（一八ウ）
・B 玉簾の内なつかしや蘭の花（二二ウ）
・B 露霜に池の姿の変りけり（二五オ）
（稿者注　露霜に変れる池の姿哉）
・A うら枯や梅も十度はかく計（二五オ）

次の二句は、前書を加えた例で、句形に添削はない。高点句である。

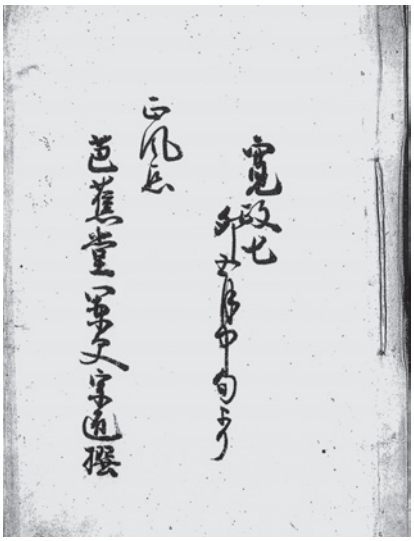
・C 水音に入てふ寒のきとく哉
前書「夜舟にて」を付す（一三ウ）
・C 火は消て萩打雨の夜や長し
前書「夜泊」を付す（二二オ）

最後に添削のないD句をあげておく。

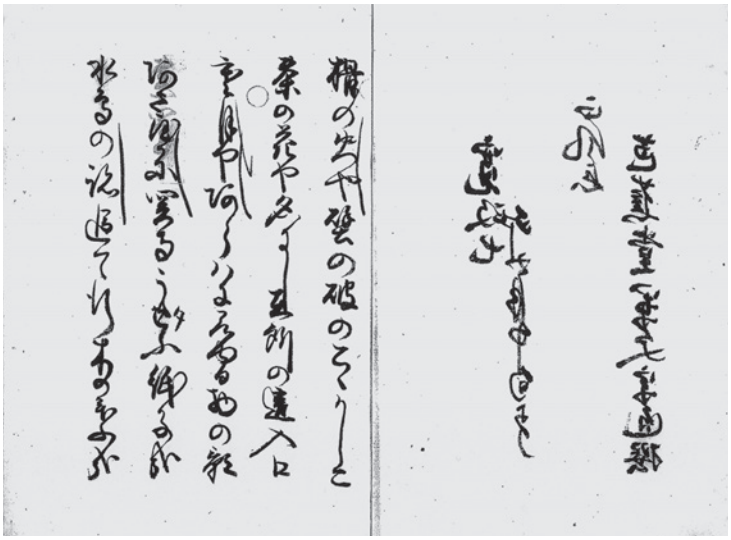
・D 江戸を出て向ふ枯野の夕哉（四ウ）
・D きり〴〵す啼や棒木の祈祷札（一〇ウ）
・D 移り行舟の灯や岸の露（一六オ）
・D 鳴立て其日の秋は過にけり（一七オ）
・D 葛水や又吹立る出立貝（一九オ）
・D 松の葉の泣き立チけらし心太（一九オ）
・D 鳥の目の明ぬ内から鳴子哉（二二オ）
・D 浮人に白髪見らるゝ炬燵かな（二三オ）

以上のことから、闌更には「正風」を看板に挙げて指導しようという意識はあったと判断されるが、「正風」の本質に迫る明確な言及は認められない。また、評、添削は、二五〇句中の二七句、約一割程で、指導の意識は薄いといえる。

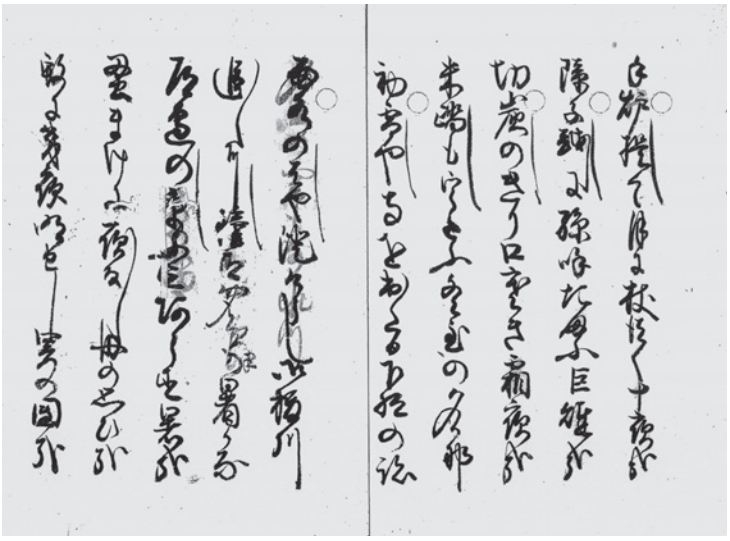
寛政七卯五月中旬より
正風点
芭蕉堂闌更宗匠撰



（表紙）



（表紙見返し）

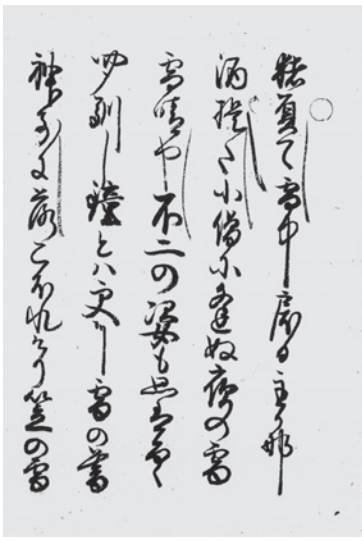


（一ウ）

（一オ）

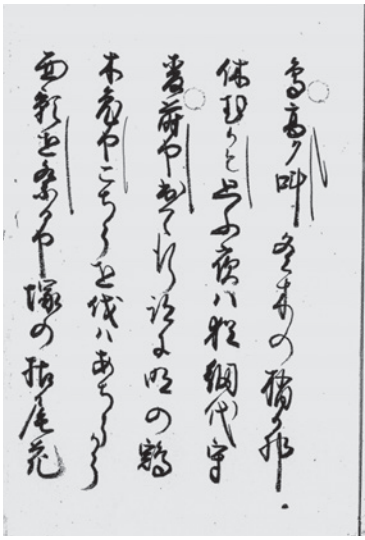
（二オ）

（二ウ）



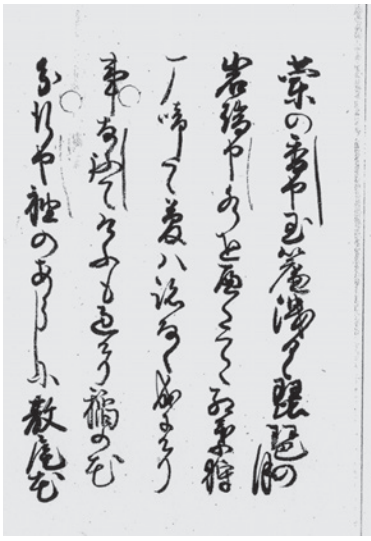
（三オ）

（三ウ）



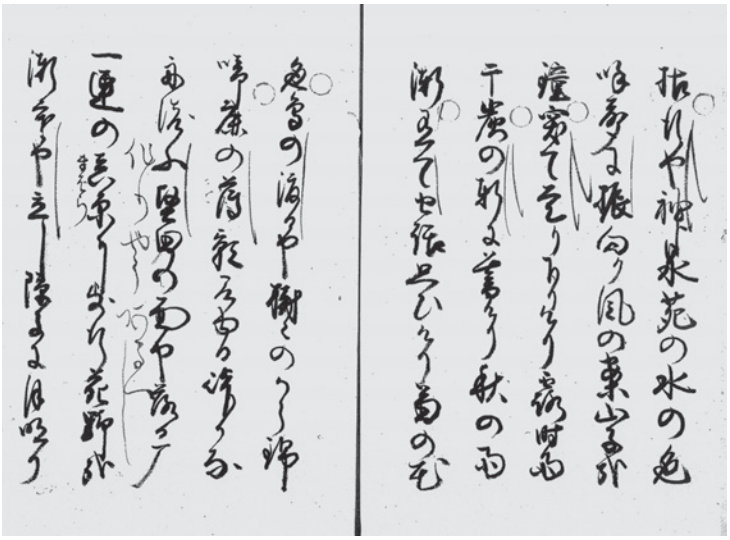
（四オ）

（四ウ）



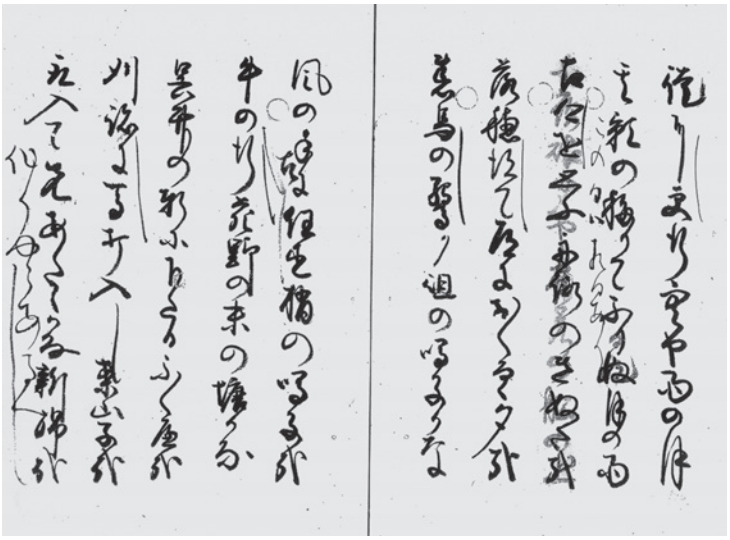
（五オ）

（五ウ）



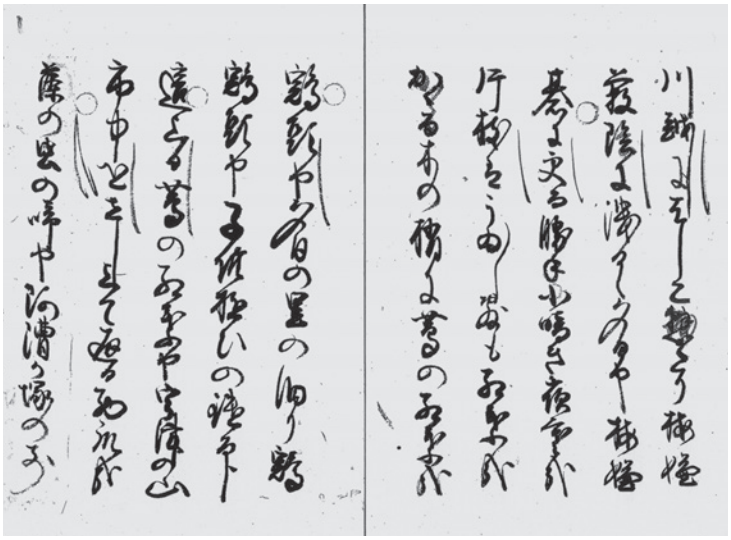
（六オ）

（六ウ）



（七オ）

（七ウ）



（八オ）

（八ウ）

（九オ）

（九ウ）

（一〇オ）

（一〇ウ）

（一一オ）

（一一ウ）

（一二オ）

（一二ウ）

（一三オ）

（一三ウ）

（一四オ）

（一四ウ）

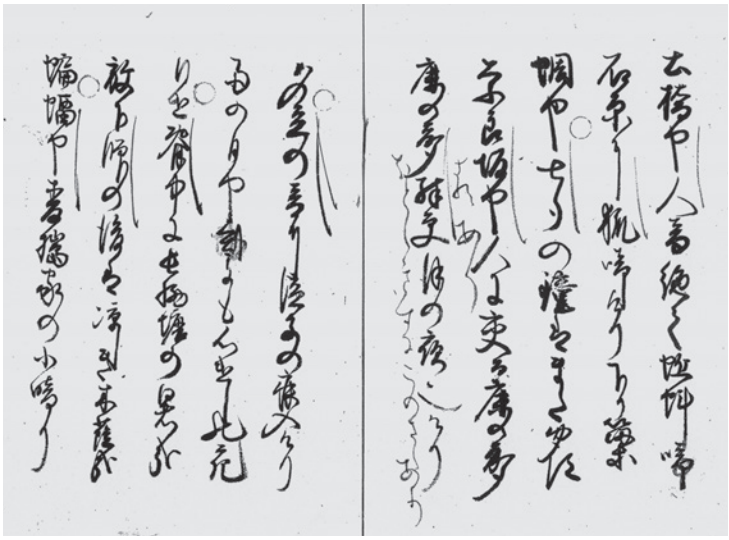
（一五オ）

（一五ウ）

（一六オ）

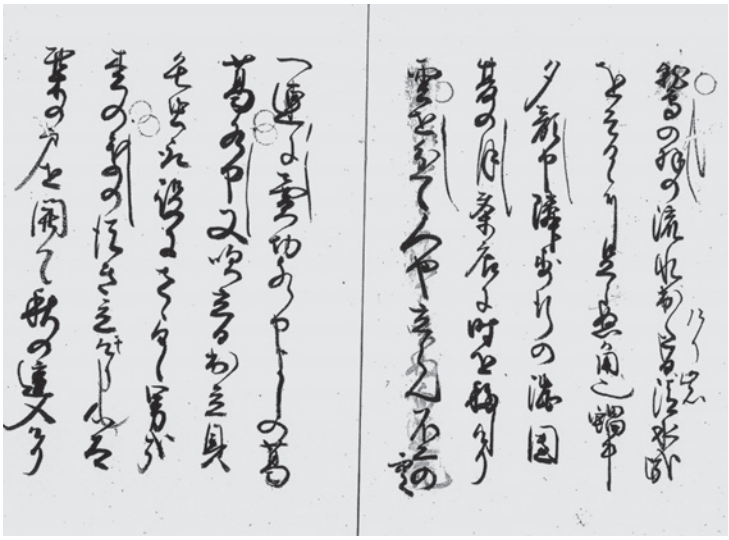
（一六ウ）

（一七オ）



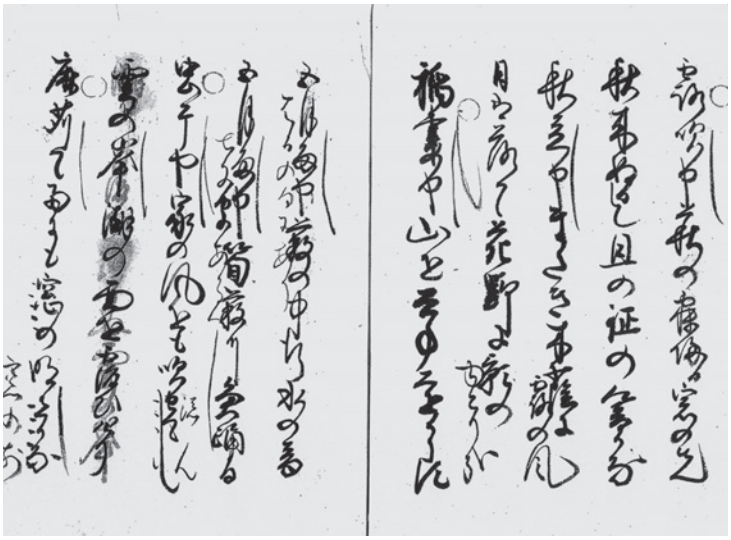
（一七ウ）

（一八オ）



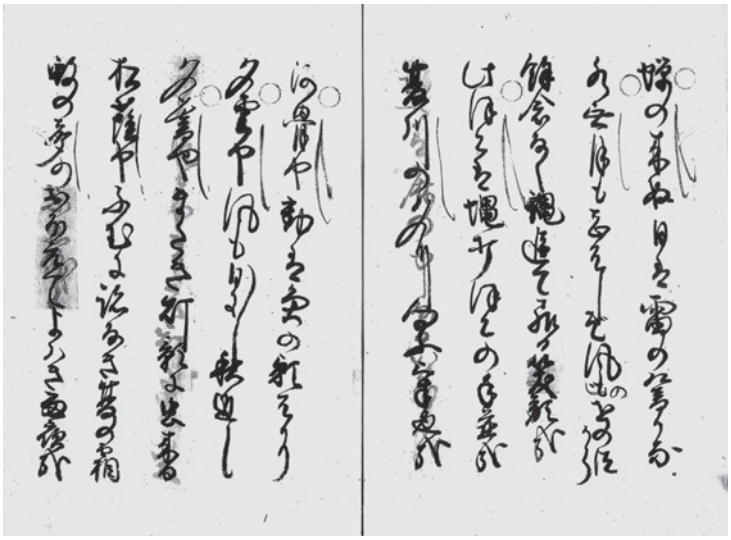
（一八ウ）

（一九オ）

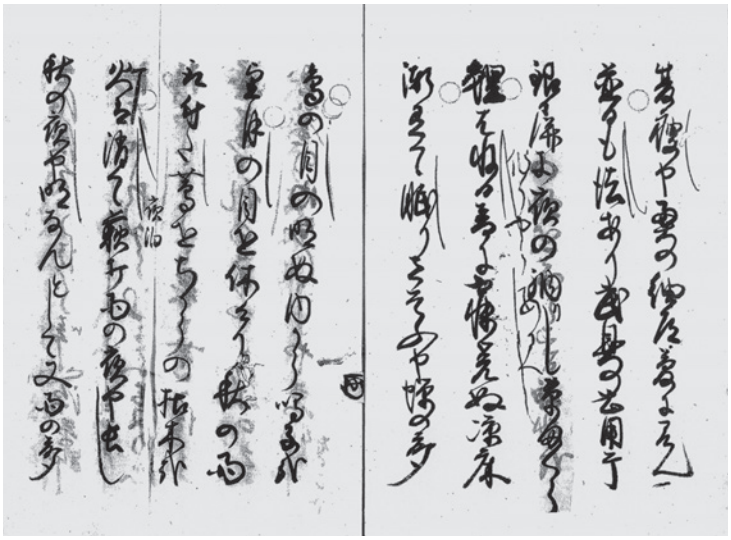


（一九ウ）

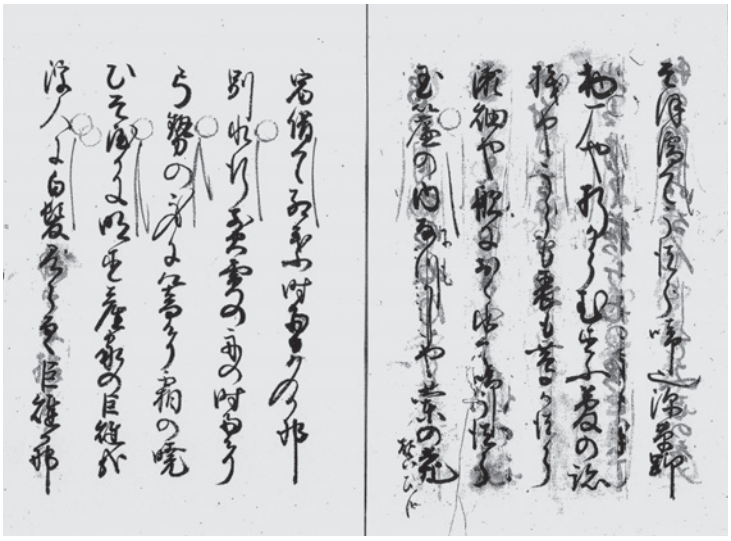
（二〇オ）



（二〇ウ）



（二一ウ）

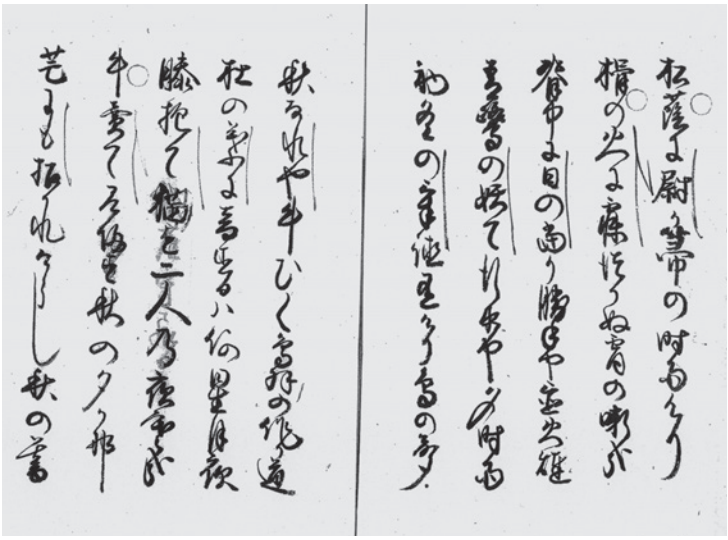


（二二ウ）

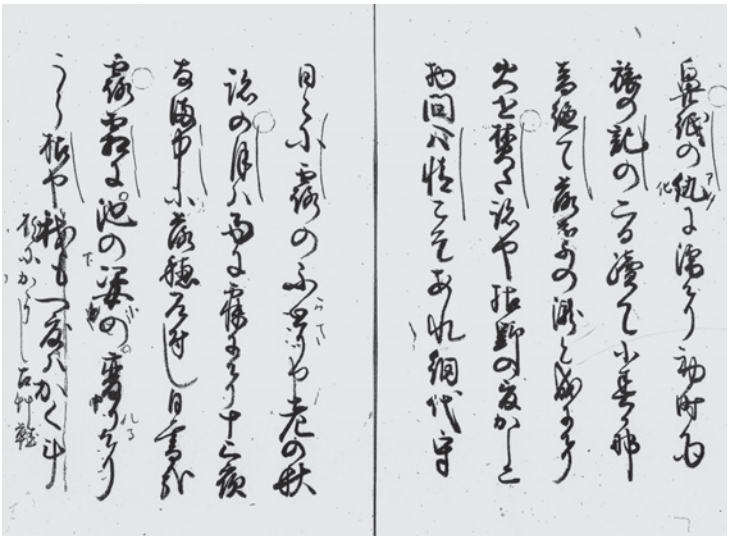
（二一オ）

（二二オ）

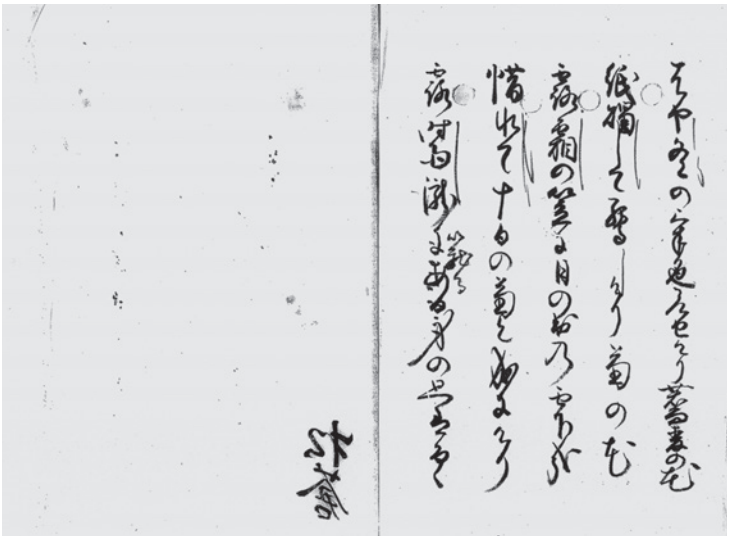
（二三オ）



（二三ウ）



（二四オ）

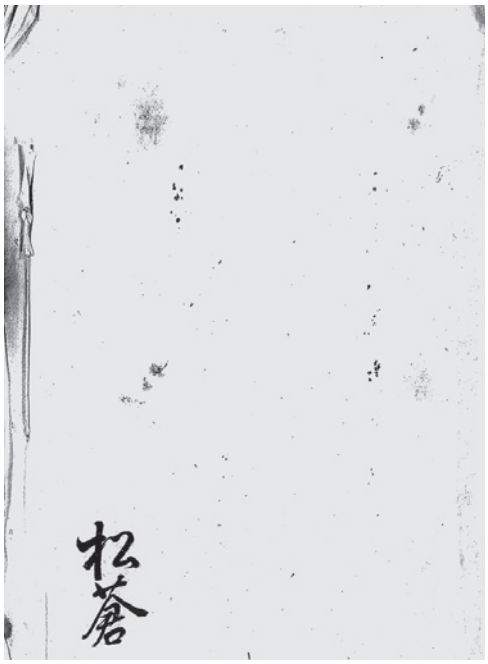


（二四ウ）

（二五オ）

（二五ウ）

（裏表紙見返し）



（裏表紙）

第四章　二世成田蒼虬の点帖　影印と解題

解　題

本冊は、芭蕉堂二世である成田蒼虬の点帖である。影印に適宜翻刻を付す。蒼虬の点帖は、本冊に限らず多数存在すると思われる。しかし、蒼虬に限らず多くの点帖は、褒美の一つとして最高点の人に与えられ、個人の蔵するところとなる。このため、旧家の蔵に収められたままであったり、散逸したりして、調査する機会は少ない。また、当該の一冊により、蒼虬の点印と評の様式の一端が知られ、今後の調査の便に資すると考える。

さて、本点帖の書誌を記す。縦一七・四糎、横二五・二糎。横本、写本一冊。表紙は、目白と草花の彩色画、裏表紙は山家の水墨風景画である。内題「奉納発句合」。一丁裏に「下之巻　題　春の旅／夏の山／シキ　恋／秋の生類／冬の居所」とある。なお、上巻があったと推察されるが未詳。墨付、八三丁。原本は永井一彰氏蔵。

点印には次のA～Dの四種類があり、長点と点数を付して優劣、順位を示す。また、最高点の句は「秀一」、次点句は「軸」とする。ただし、選句中の点数等と巻末の秀吟集とは一致していない。例えば、二九丁裏の万海の句は、「浴した」にA印があり「三十一」点が加えられている。しかし、巻末の七四丁裏では、その右の「夏山や」の句がA印からB印に変更されて高評価されている。又、一九丁表の「面白きさまや旅路の遠柳」はA印であったが、添削されて中七が「けしきや旅の」となり、巻末の七九丁裏ではC印が押されている。

加点以外の評や添削は少なく、指導の意識は薄い。また、褒美の一冊として清書したものであるが、精力的な俳諧活動に比して、点印は種類が少なく、デザインも単調である。

A

明月

B

有明

C

野宮嵐

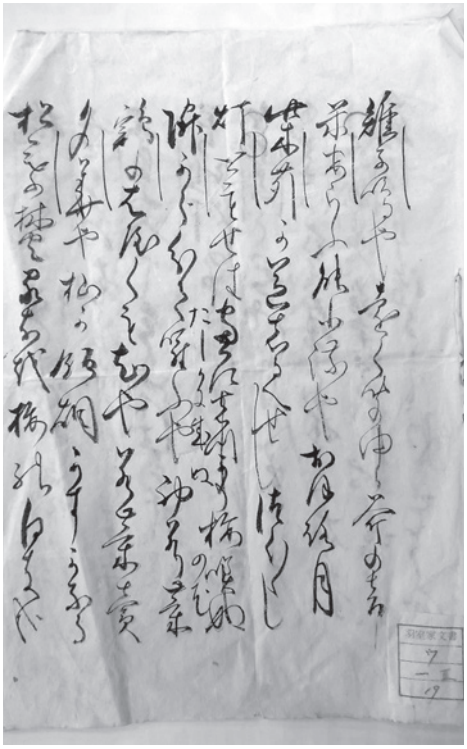
D

祇王化野

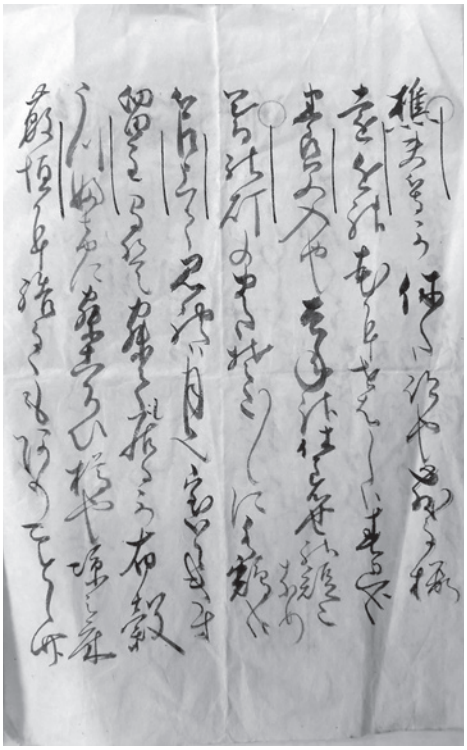
入集者は、多くは丹波の人々で、蒼虬の指導を受けていた。他に、讃岐、浪花、南山城の人も少数いる。丹波綾部の羽室（はむろ）万海、綾部（位田）の柿流、梅雄、流川、一口（以上三人も綾部と思われる）、上杉の梅枝、上林の中好、上林の可少、福知山の王蕉。これら丹波の、特に綾部の人々が中心になって行われた「奉納発句合」であろう。下巻のみで五五〇句入集（但し、一人が数句入集している）なので、中規模の俳諧興行であるが、地方興行としては大規模といえよう。蒼虬は丹波との交流が深く、なかでも綾部の羽室万海とは親しい交流があった。蒼虬の書簡や二条家俳諧に同座した資料などがある。

蒼虬は、初世闌更が没した直後の寛政一一（一七九九）年から花供養を主催するが、最後に主催した天保五（一八三四）年迄の三五年間のうち、一七年間は欠座している。この間、蒼虬は、京都二条家俳諧に精勤したり、地方の俳諧指導をしたりしている。綾部を中心とした丹波へもしばしば出向いている。

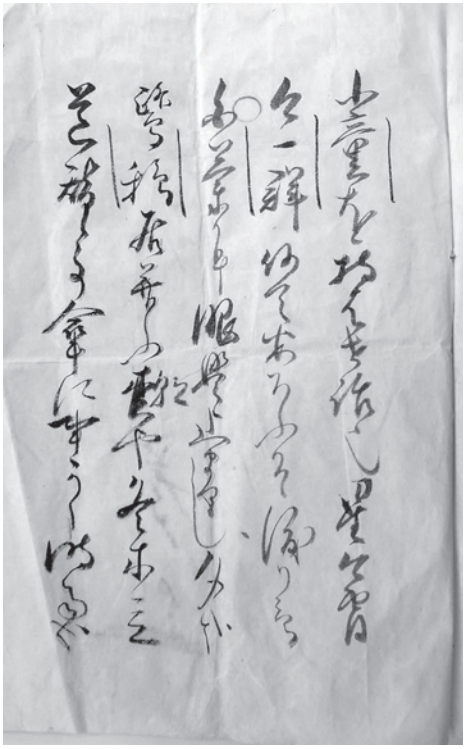
因みに、京都府綾部市資料館に、「蒼虬愚評」の点を付した二丁ほどの一冊がある。次に全容を示す。長点と朱の○とを組み合わせたものである。このことからは、蒼虬が点印をいつもは用いなかったことが知られる。また、評語は記さず、添削も少なく、指導の意識は薄いと言える。



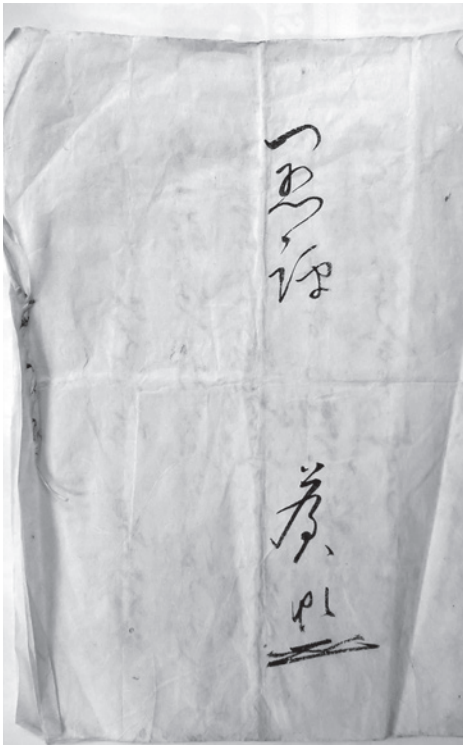
（一オ）



（一ウ）



（二オ）



（二オ）

参考文献

京都府綾部市資料館編『羽室家文書（文芸史料）調査報告』（二〇一七年三月、京都府綾部市資料館刊）

翻刻凡例

一　本稿は、江戸後期の芭蕉堂蒼虬の点帖の影印であるが、適宜翻刻を付す。

一　丁移りは、各丁の最後に丁数を付す。丁の表は「オ」、裏は「ウ」の略号で示す。

一　発句の清書と作者名の記載は別筆であるが、翻刻にあたっては区別しない。

一　字体は、原則として通行の字体に改める。

一　踊り字は原則として原本の表記に従うが、次のように統一した。なお、二字以上の繰返しについては原本に従わない。

平仮名・同濁点　ゝ・ゞ
片仮名・同濁点　ヽ・ヾ
一字の繰返し　々

一　濁点・句読点を適宜私に付す。

一　改行は、原本に従わない。

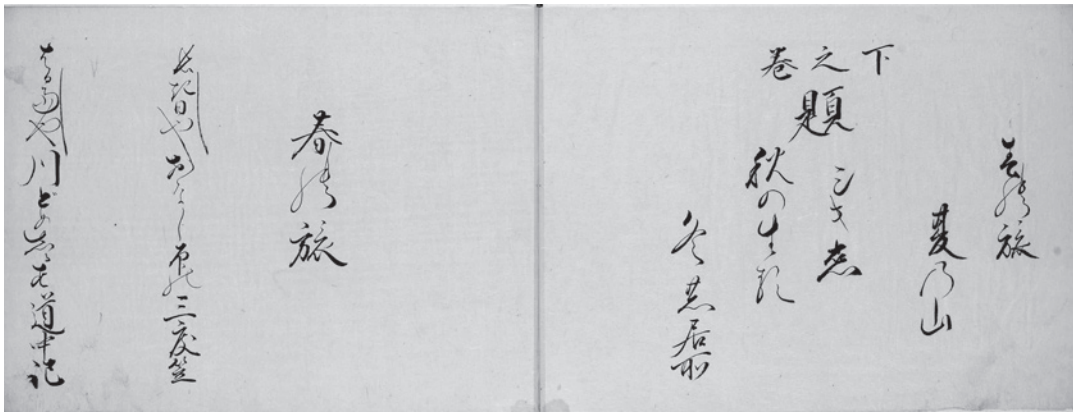
一　点印については翻刻しないが、A～Dの記号で句頭に記す。A「明月」、B「有明」、C「野宮嵐」、D「祇王化野」である。

一　句頭に付した点印と巻末の点印の変更を「A→C（丁数）」などと記す。

一　点数は翻刻しないが、六丁裏一句目は「廿六」点である。

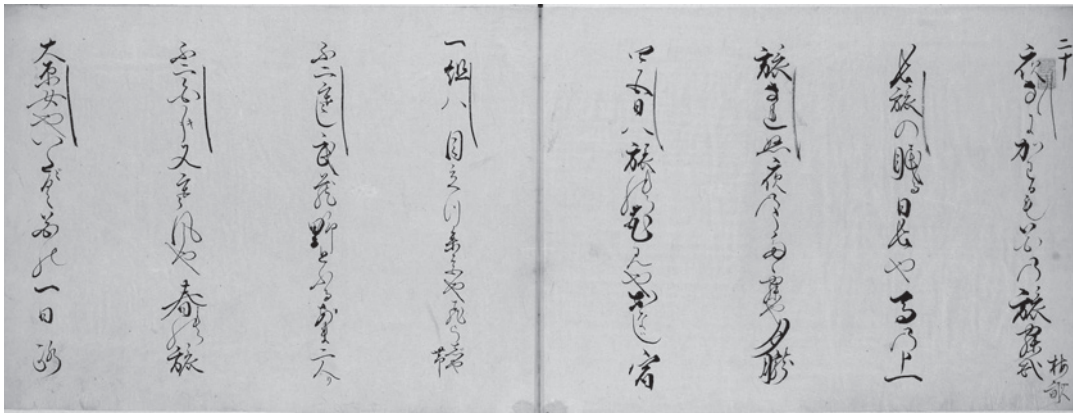
（表紙）

（１オ）　奉納発句合　　（表紙見返し）



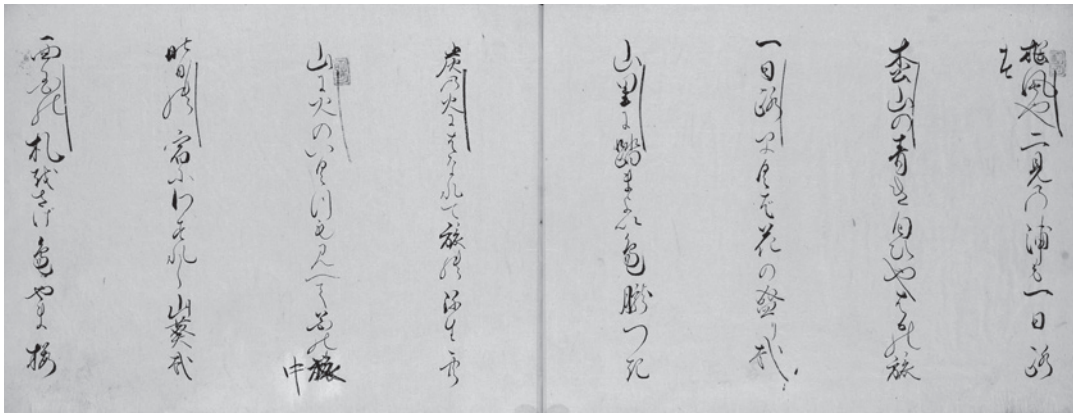
（２オ）　春の旅　　（1ウ）下之巻 題 春の旅／夏の山／シキ　恋／秋の生類／冬の居所

B



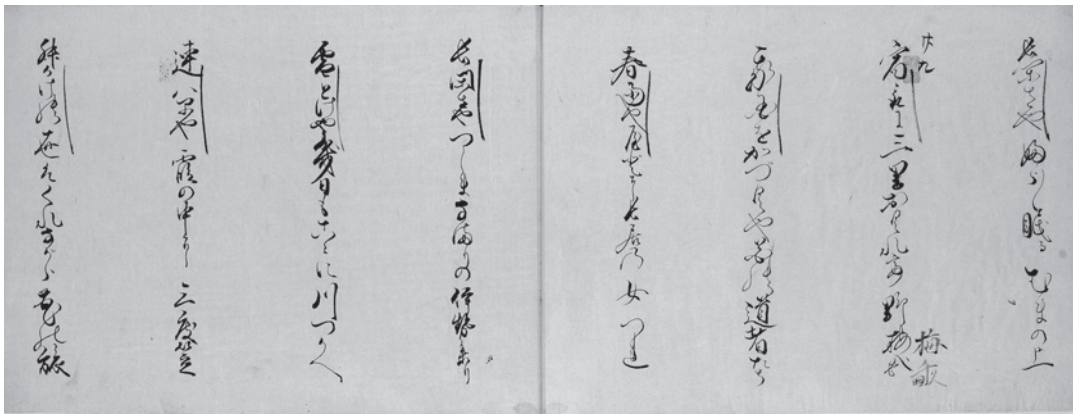
（3オ）　（2ウ）

A→B（73オ）　A→B（72ウ）

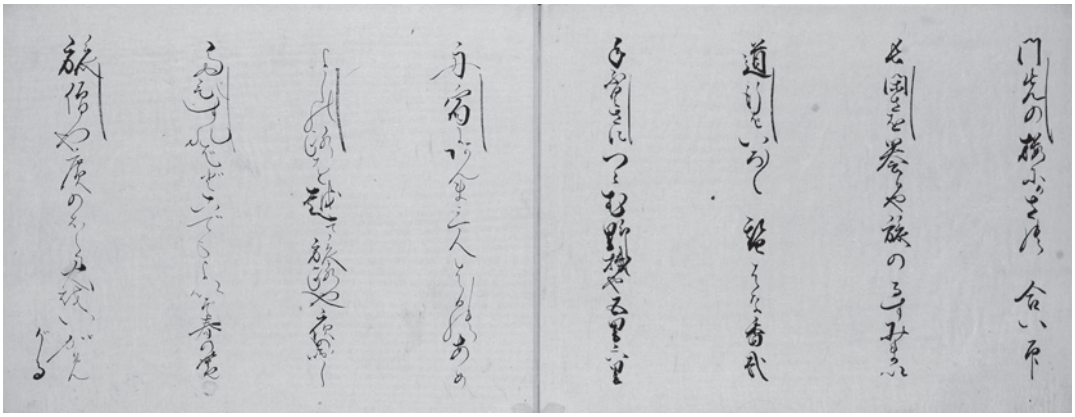


（4オ）　（3ウ）

A

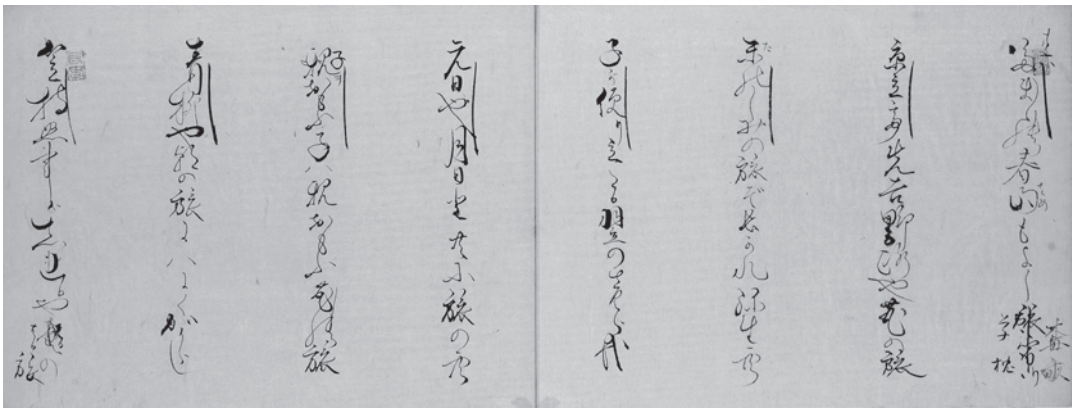


（5オ）　（4ウ）



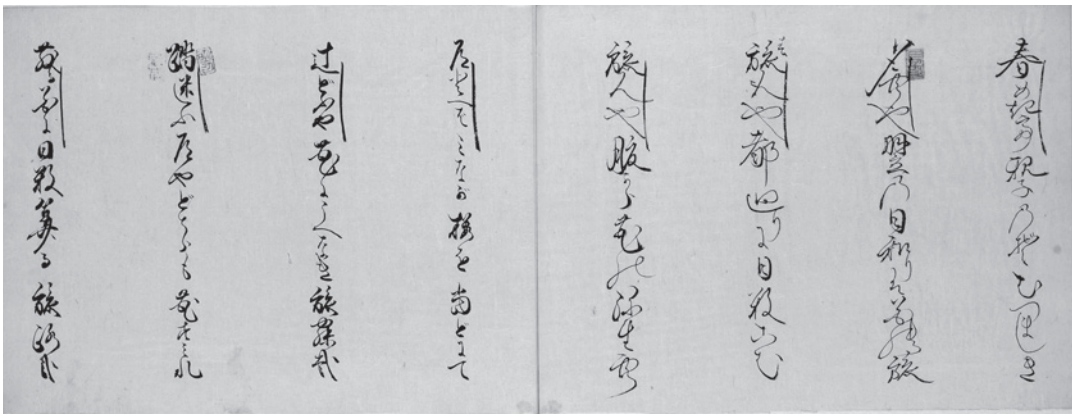
（6オ）　（5ウ）

B　A



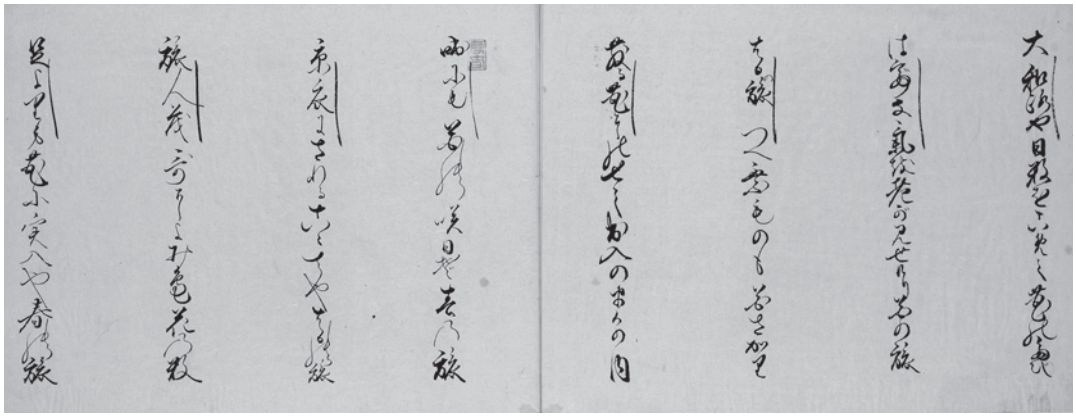
（7オ）　（6ウ）　梅畝

A→B（76オ）　B



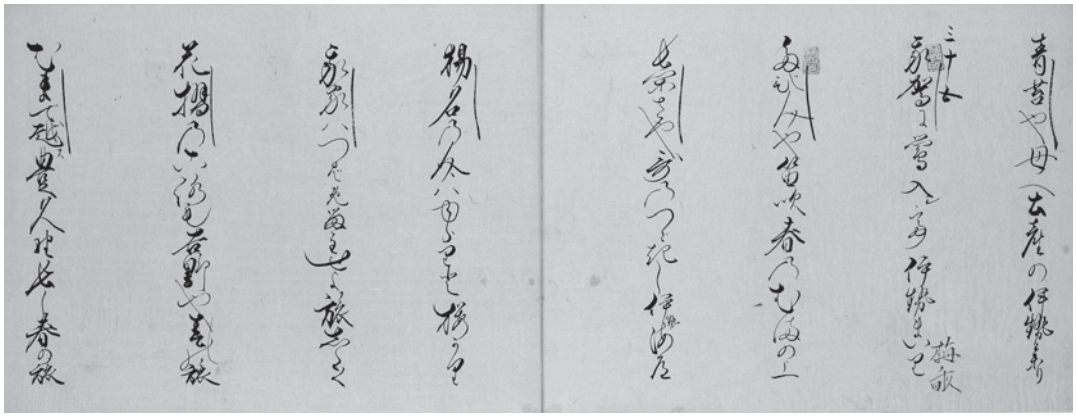
（8オ）　（7ウ）

B



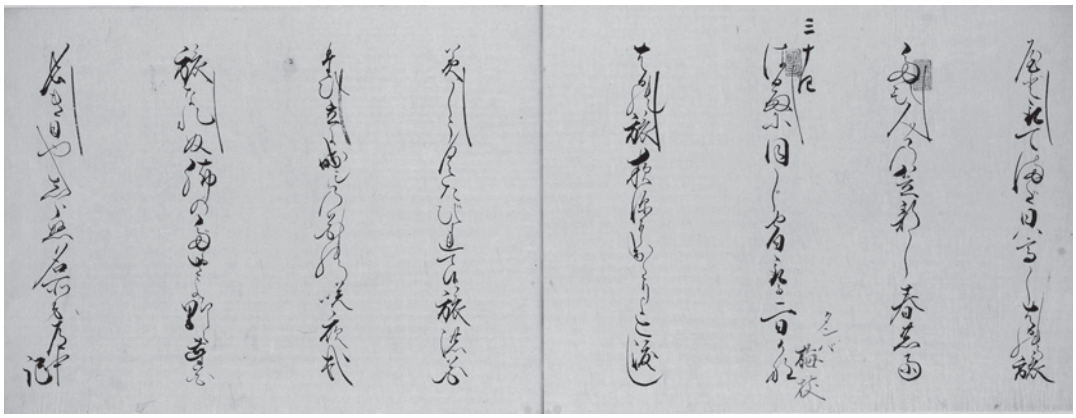
（9オ）　（8ウ）

A→B（75ウ）　A



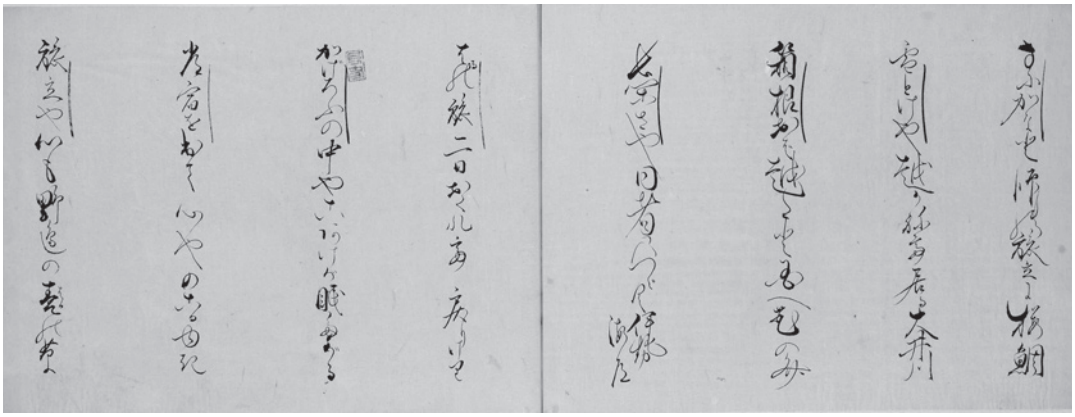
（10オ）　（9ウ）　梅畝

A　B

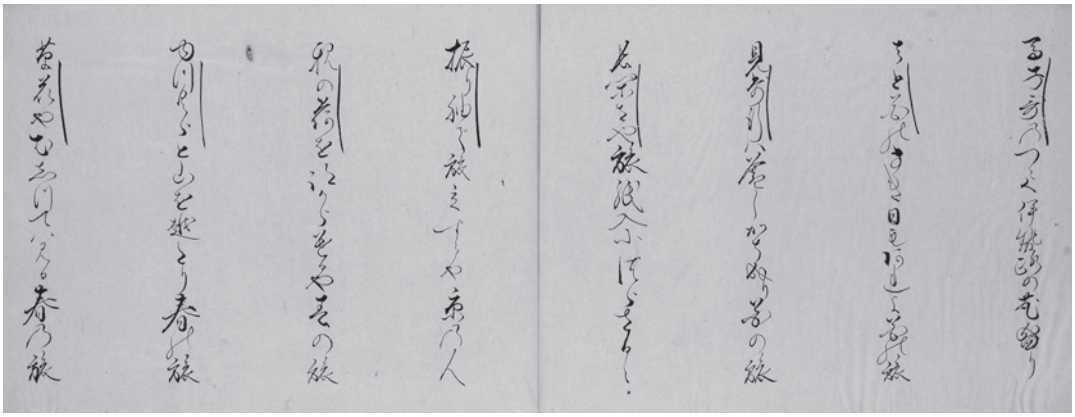


（11オ）　（10ウ）　タンバ梅枝

B

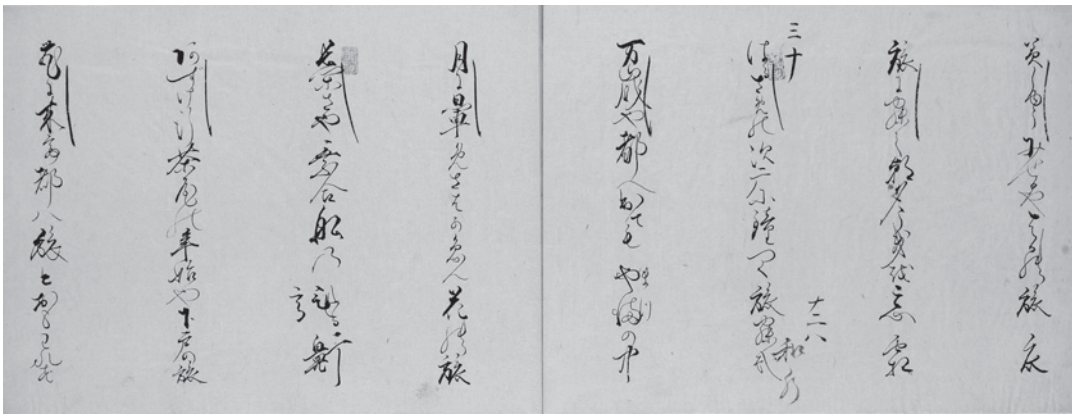


（12オ）　（11ウ）

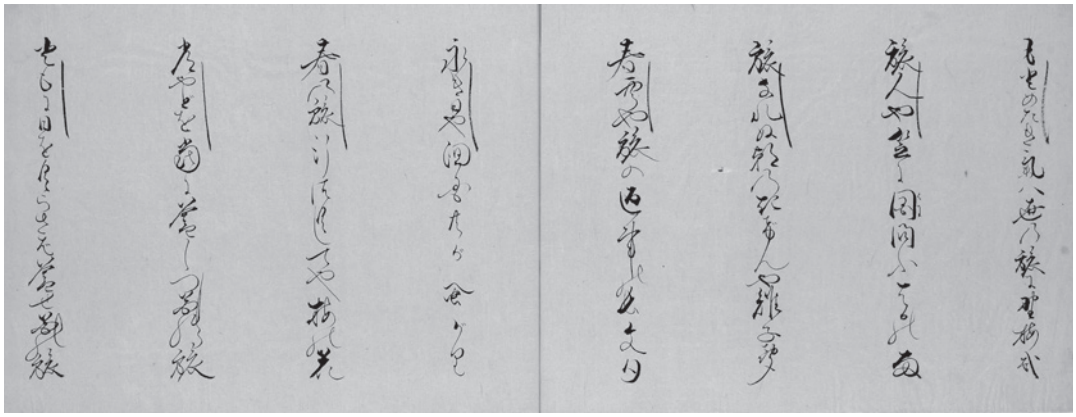


（13オ）　（12ウ）

A→C（79オ）　A

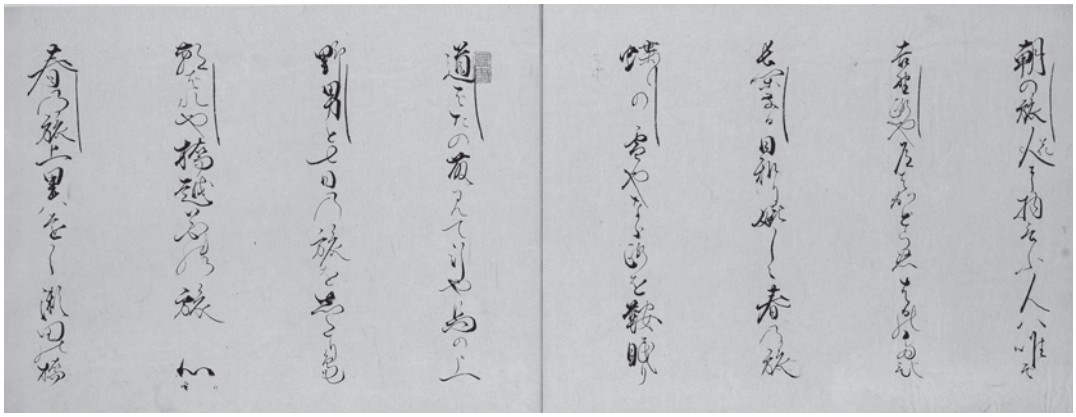


（14オ）　（13ウ）　ナニハ和水



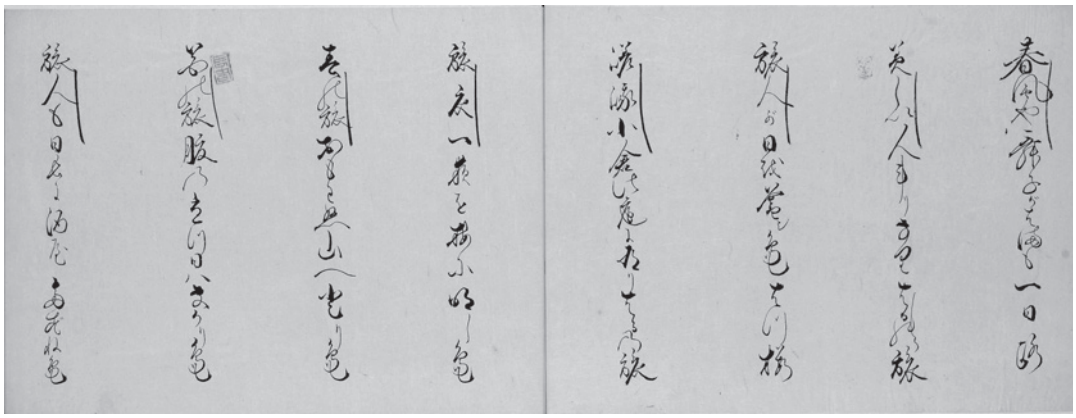
（15オ）　（14ウ）

B



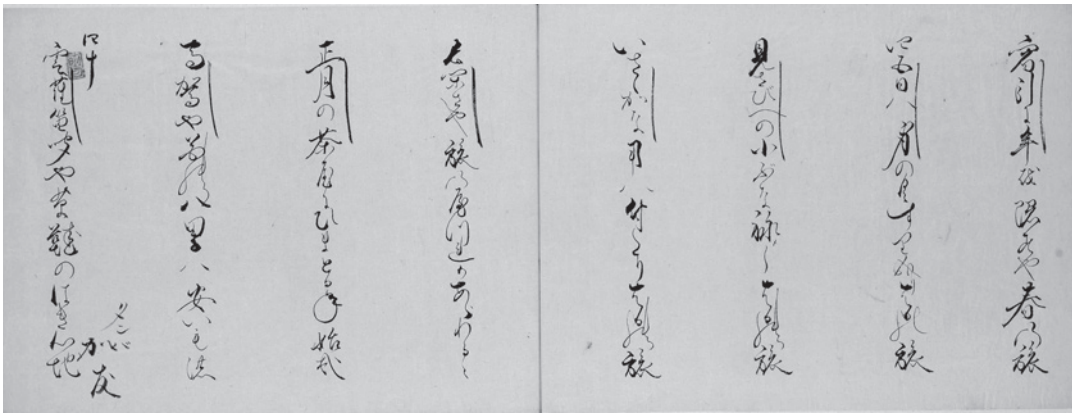
（16オ）　（15ウ）

B



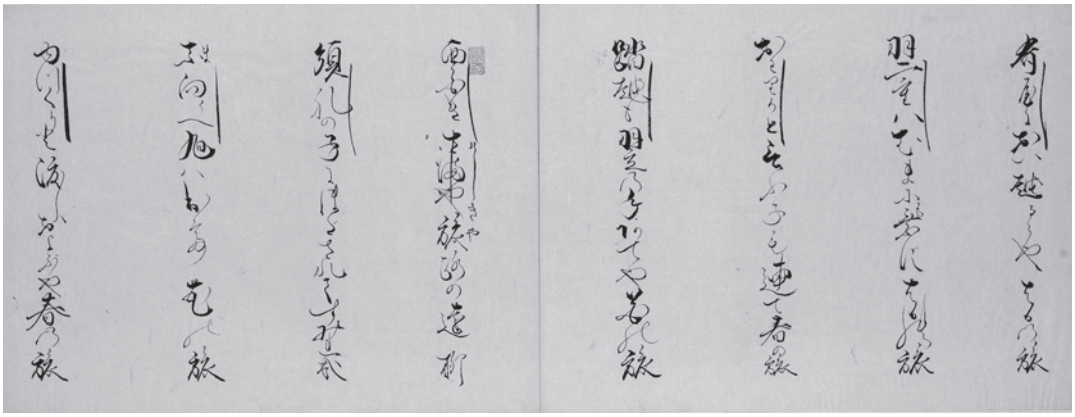
（17オ）　（16ウ）

A

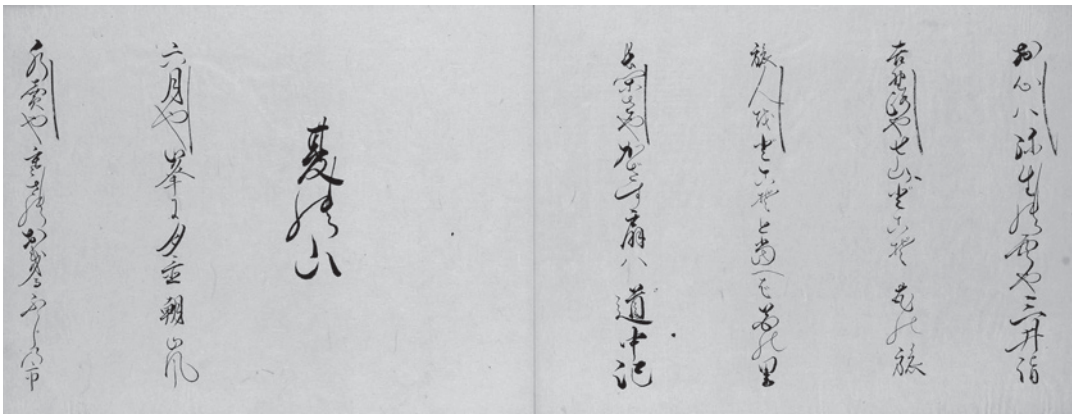


（18オ）タンバ加友　　（17ウ）

A→C（79ウ）

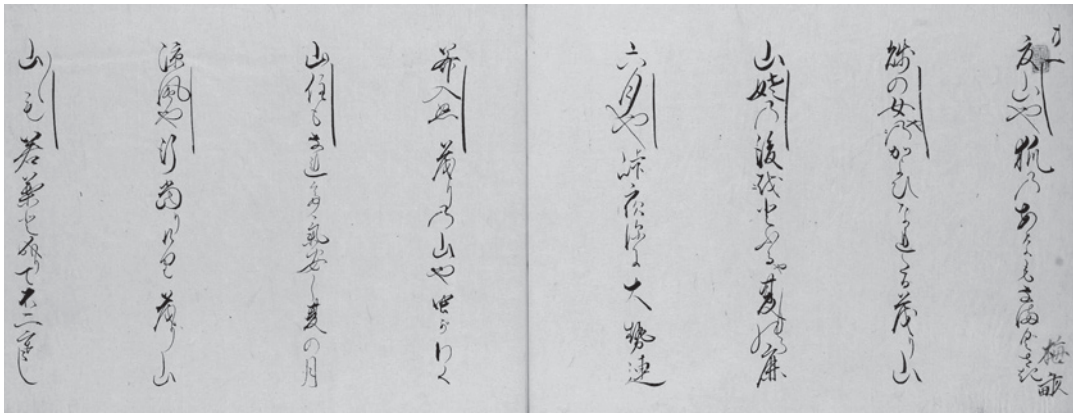


（19オ）　　（18ウ）



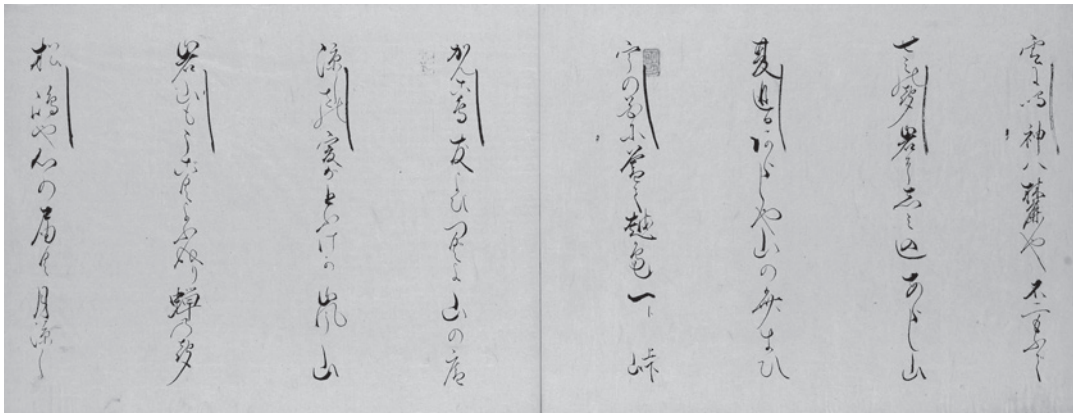
（20オ）　夏の山　　（19ウ）

A



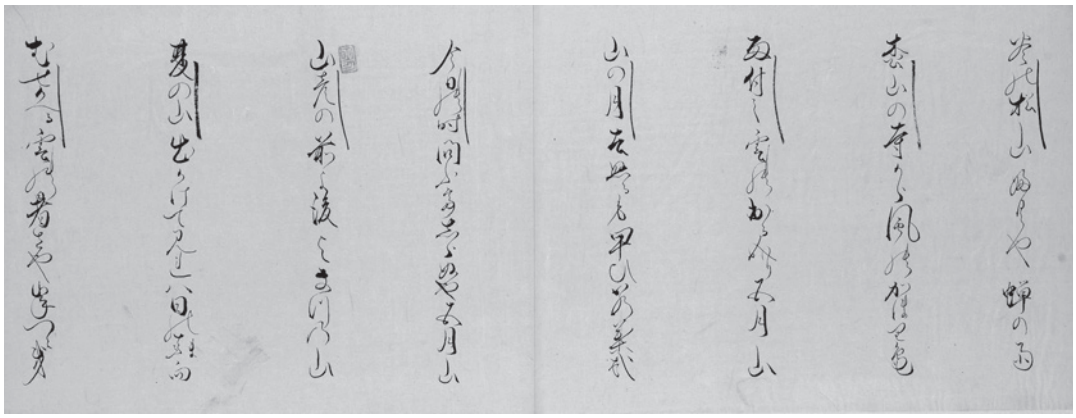
（21オ）　（20ウ）　梅畝

A→C（77ウ）



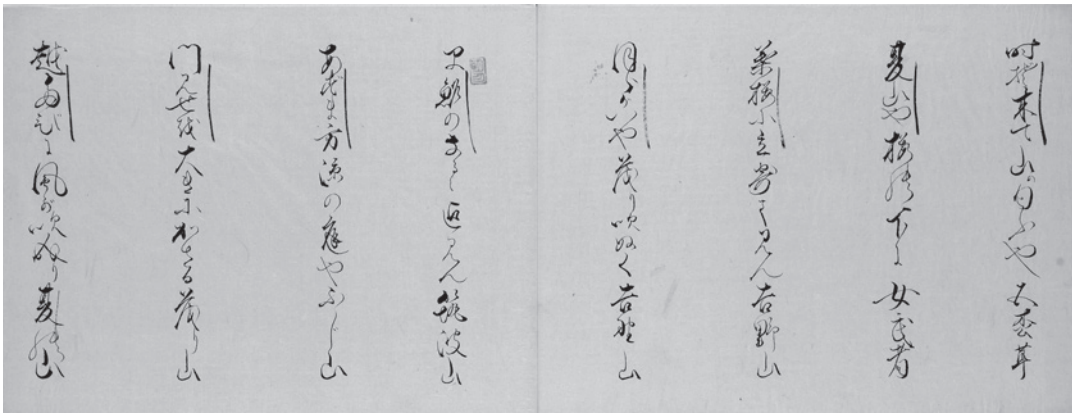
（22オ）　（21ウ）

A→C（78ウ）

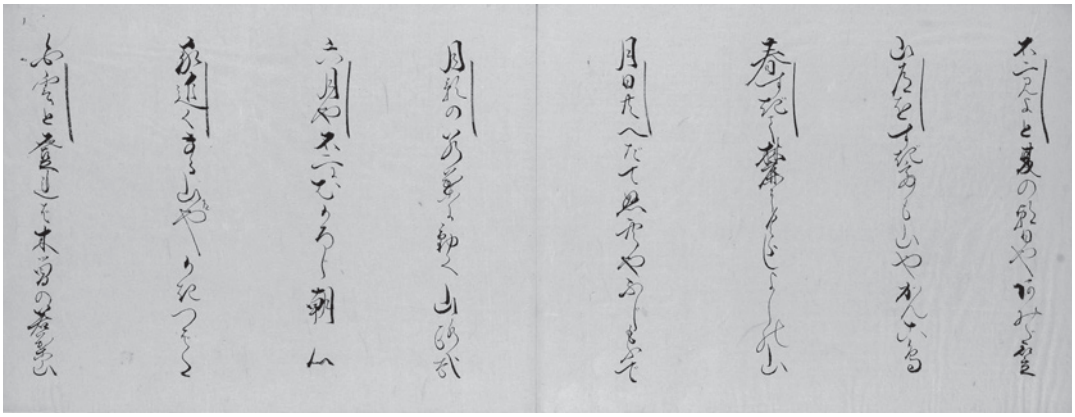


（23オ）　（22ウ）

A→C（80オ）

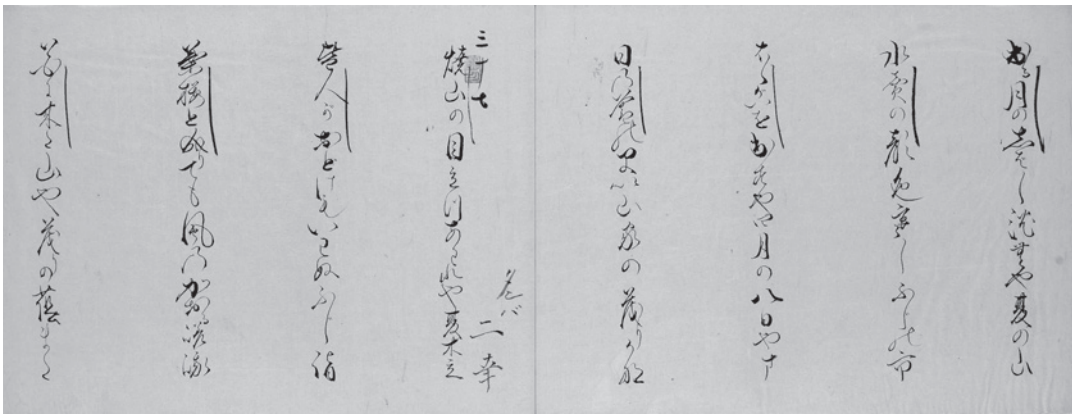


（24オ）　（23ウ）

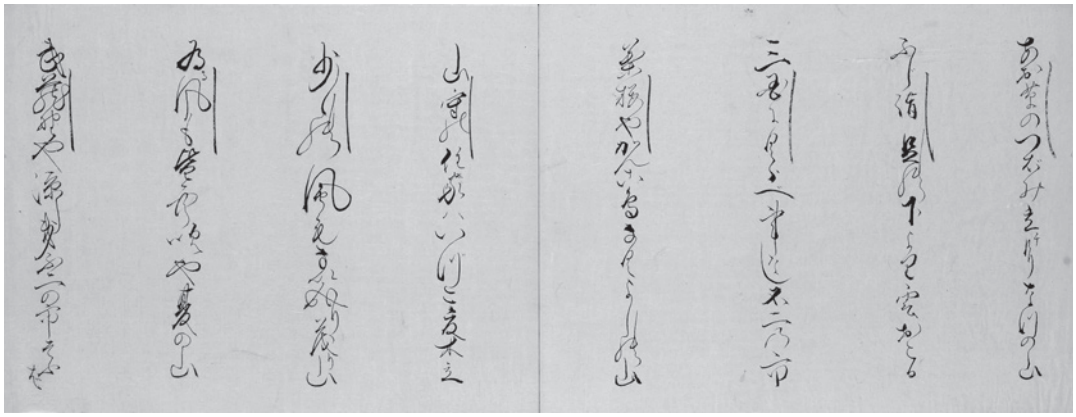


（25オ）　（24ウ）

A

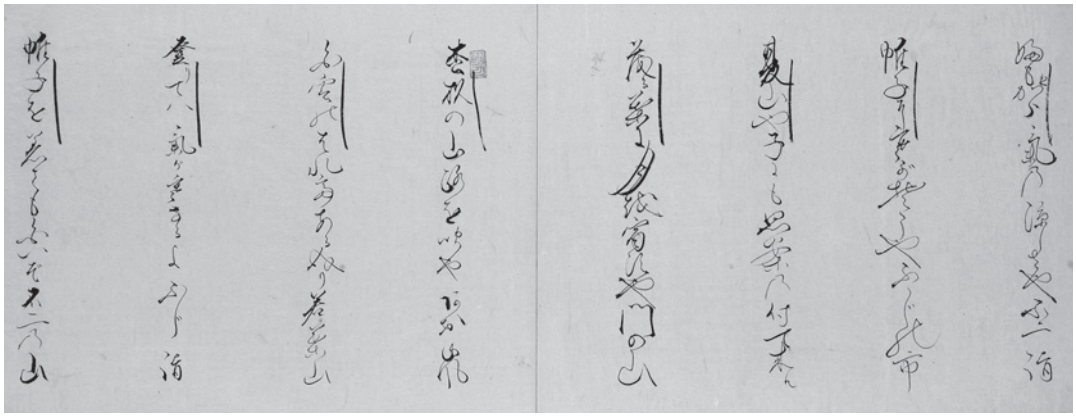


（26オ）　タンバ二幸（25ウ）

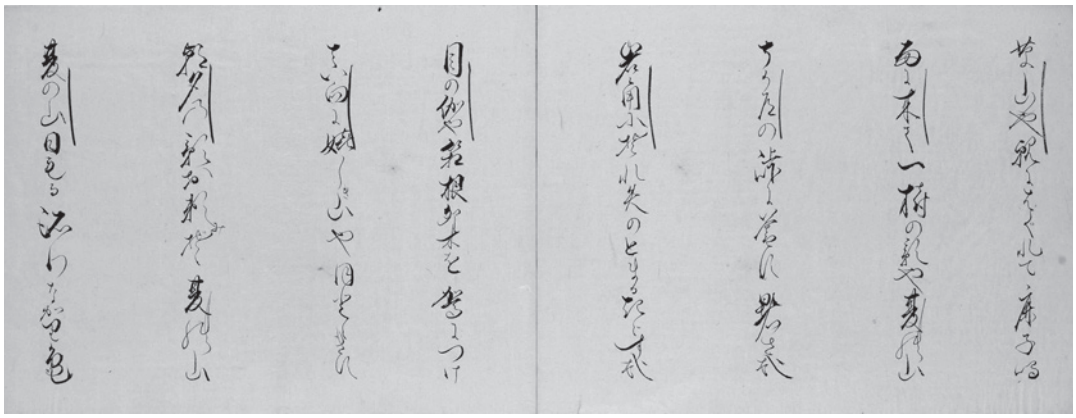


（27オ）　（26ウ）

A→B（72オ）

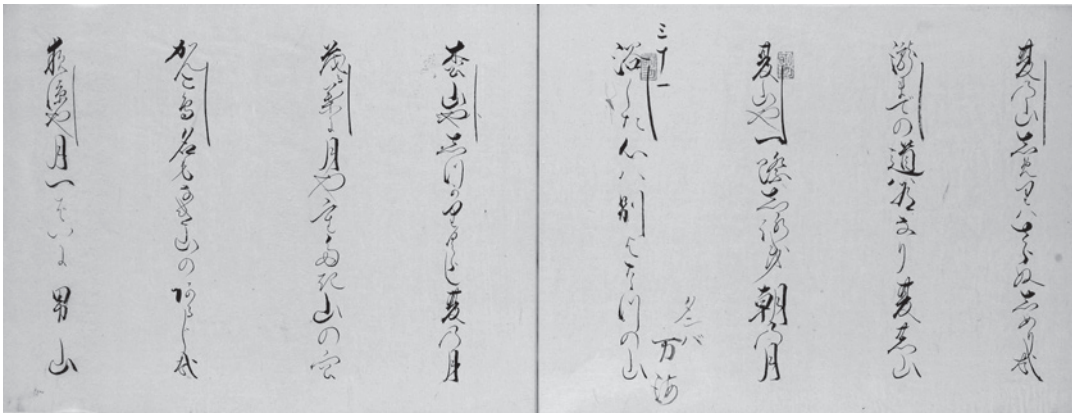


（28オ）　（27ウ）

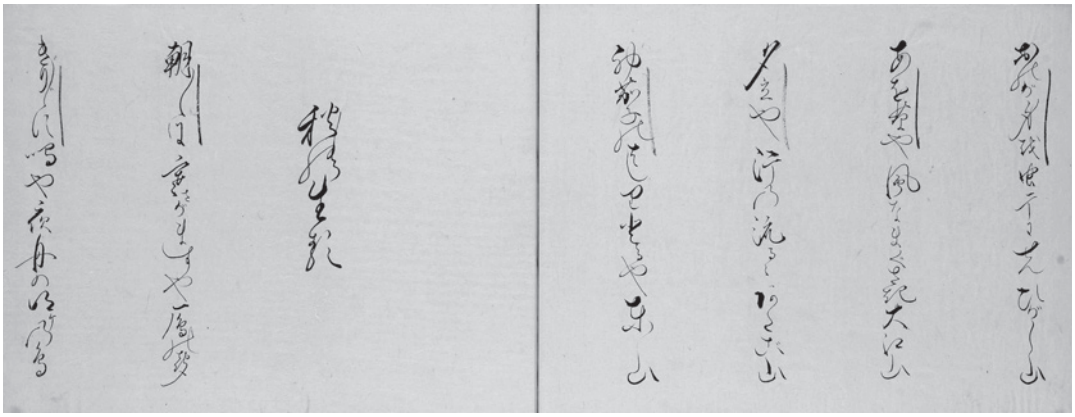


（29オ）　（28ウ）

A　　A→B（74ウ）

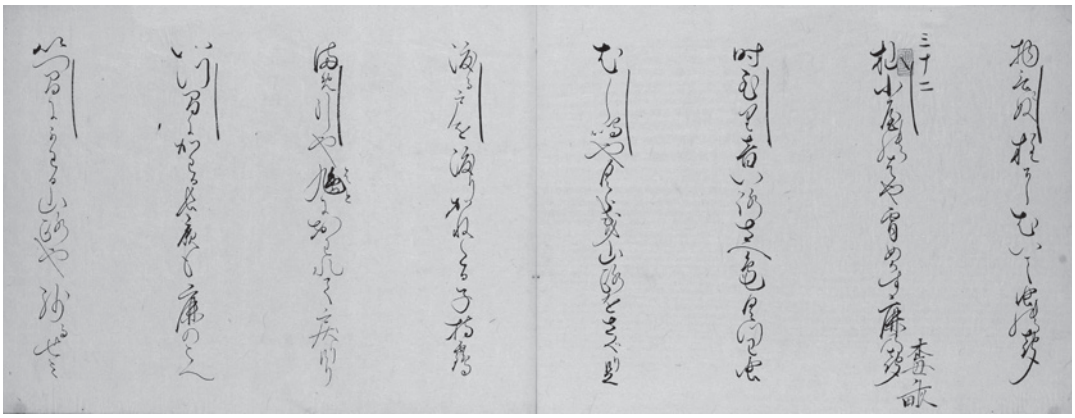


（30オ）　　（29ウ）タンバ万海



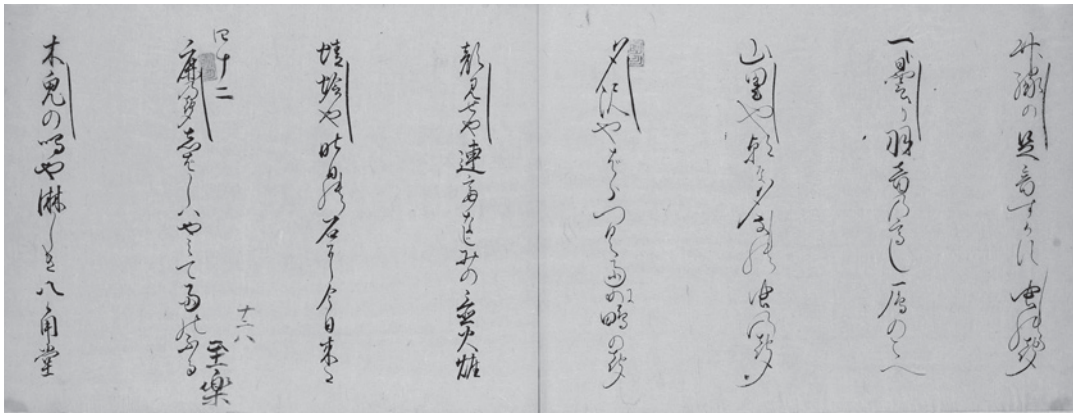
（31オ）　秋の生類　　（30ウ）

A



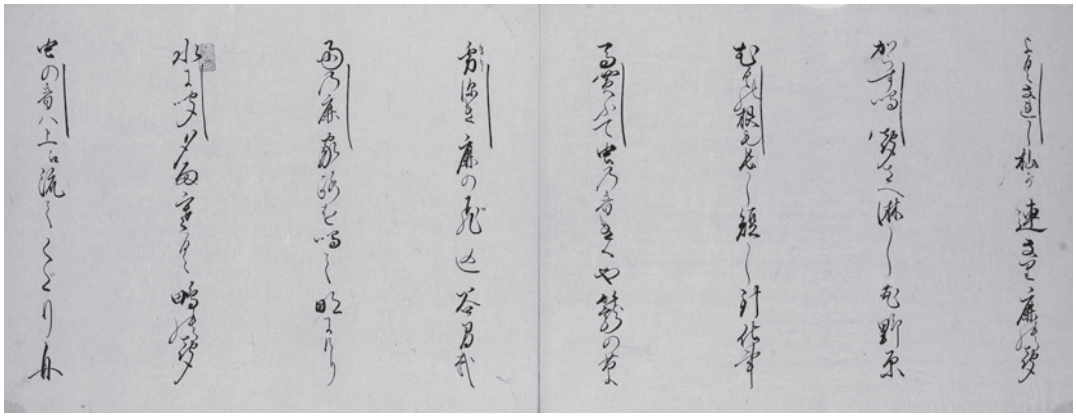
（32オ）　　（31ウ）　　梅畝

A　　A→C（78オ）

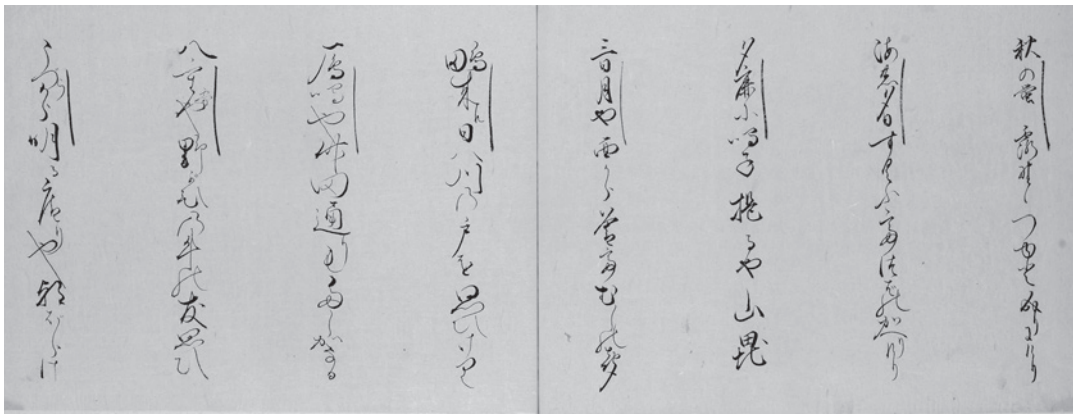


（33オ）　ナニハ至楽　（32ウ）

A→B（75オ）

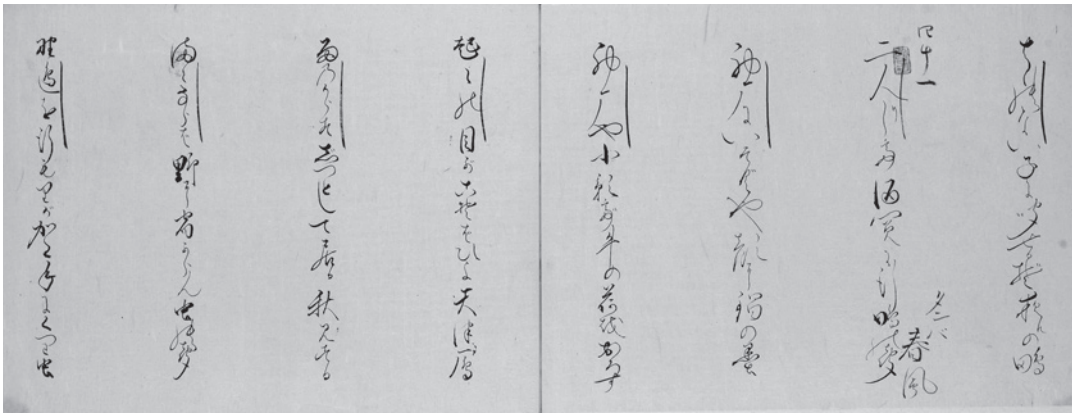


（34オ）　（33ウ）



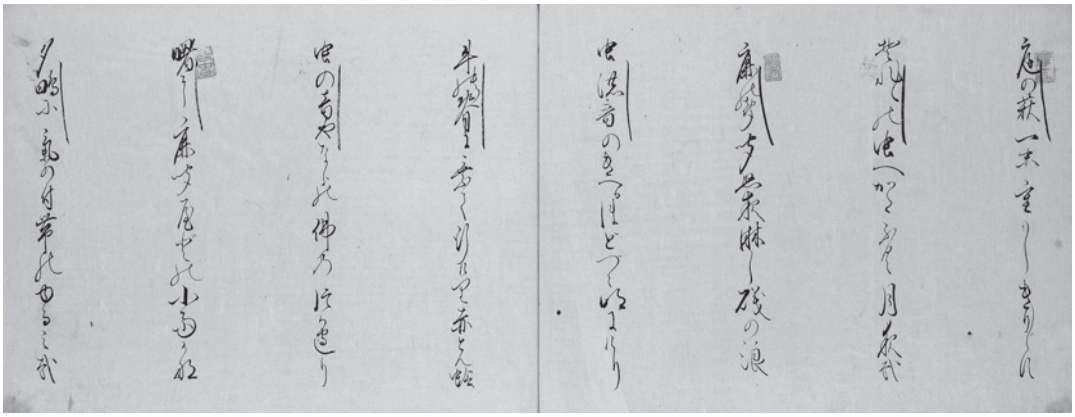
（35オ）　（34ウ）

A



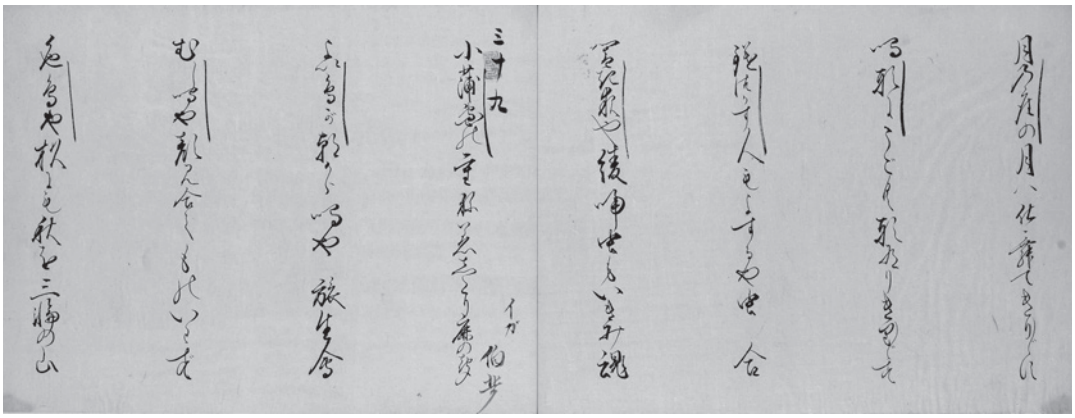
（36オ）　（35ウ）　タンバ春風

B　A→D（81ウ）　B



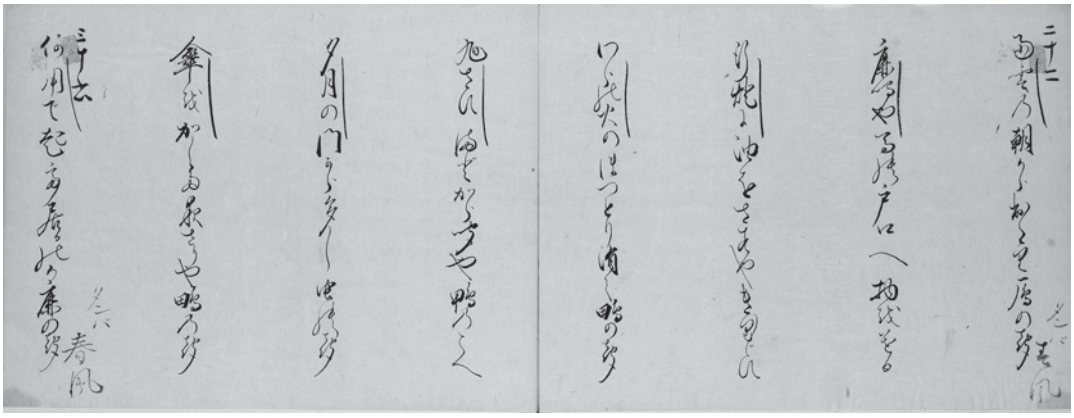
（37オ）　（36ウ）

A

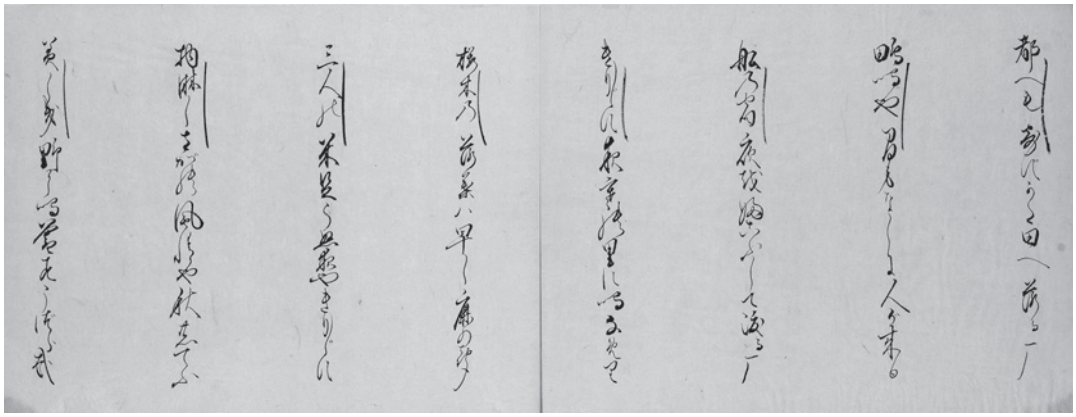


（38オ）　イガ伯夢（37ウ）

A　　A

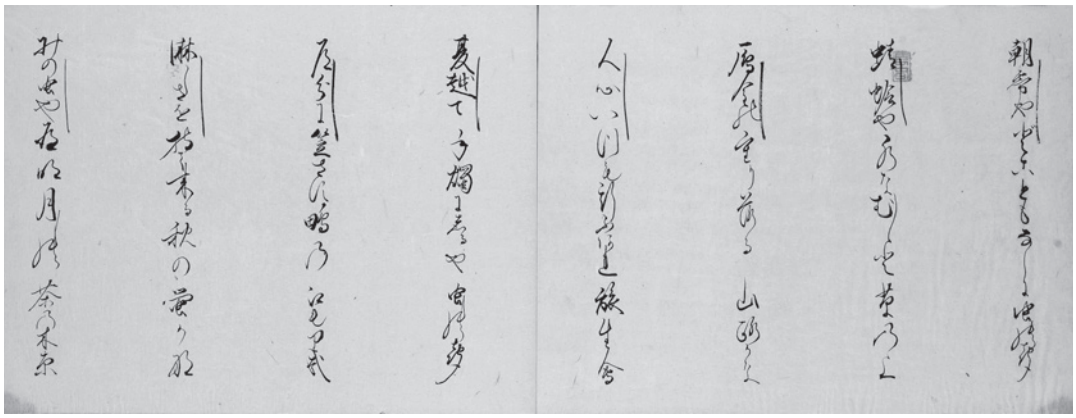


（39オ）タンバ春風　　（38ウ）　　タンバ春風



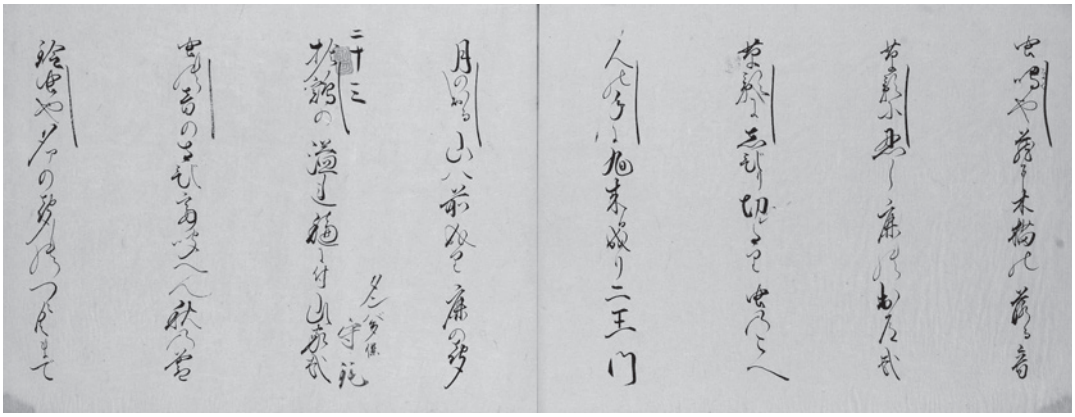
（40オ）　　（39ウ）

B



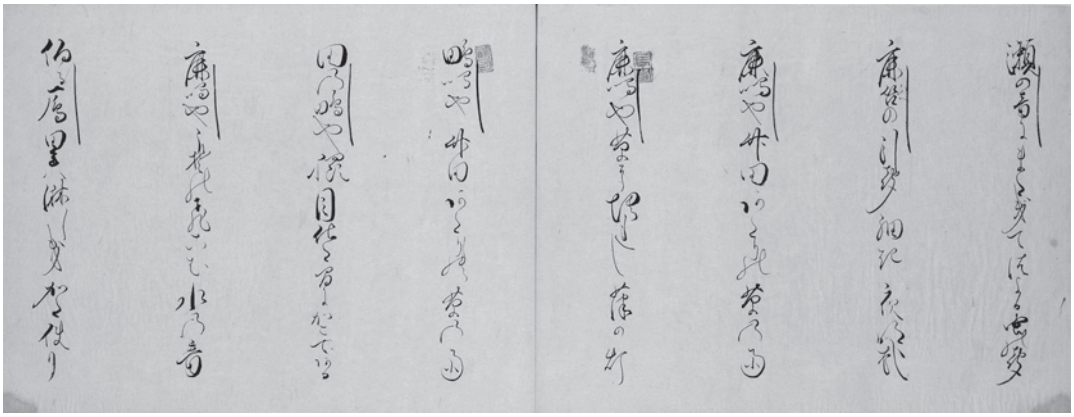
（41オ）　　（40ウ）

A

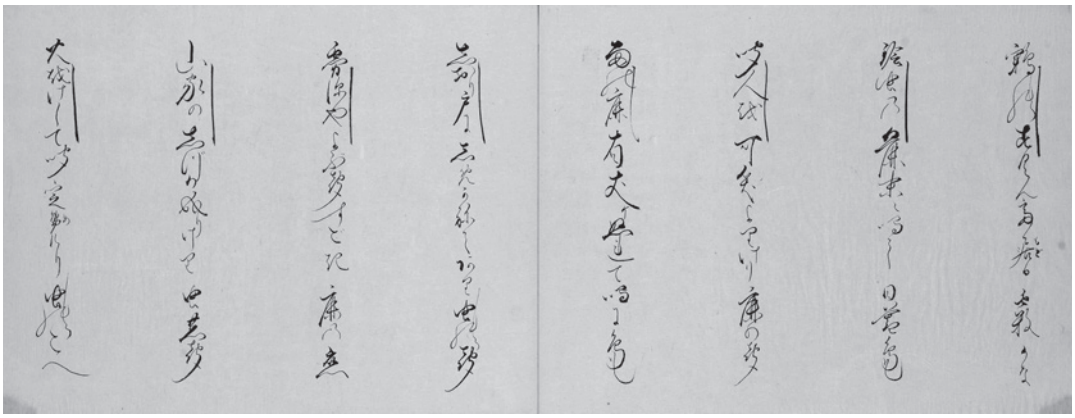


（42オ）　タンバ多保守鈍　（41ウ）

A→B（74オ）　B

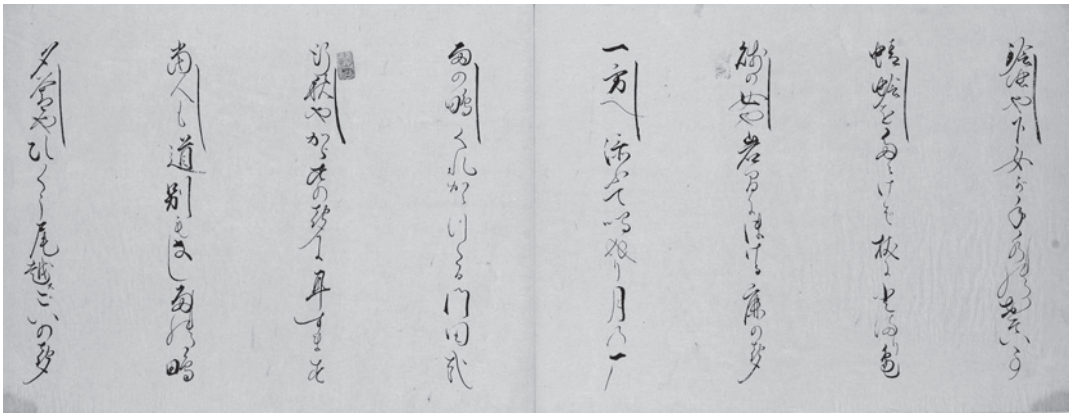


（43オ）　（42ウ）



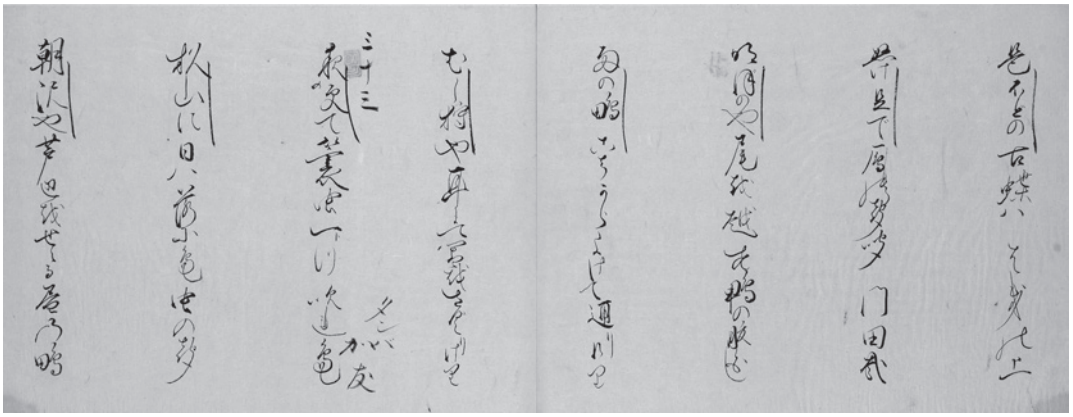
（44オ）　（43ウ）

A→B（73ウ）



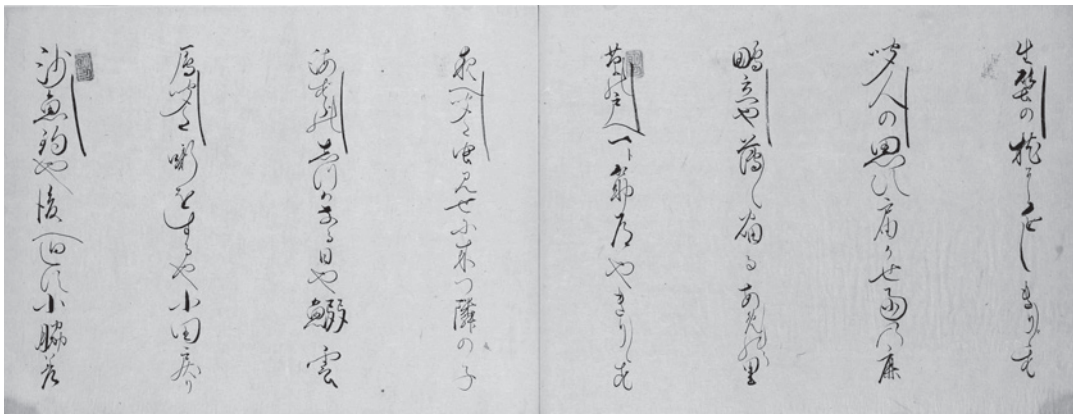
（45オ）　（44ウ）

A

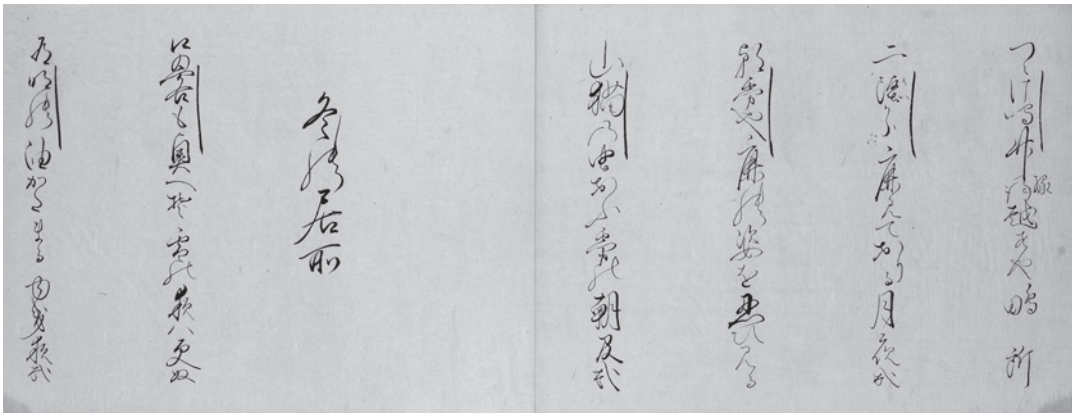


（46オ）　タンバ加友　（45ウ）

A→C（76ウ）　A→D（81オ）

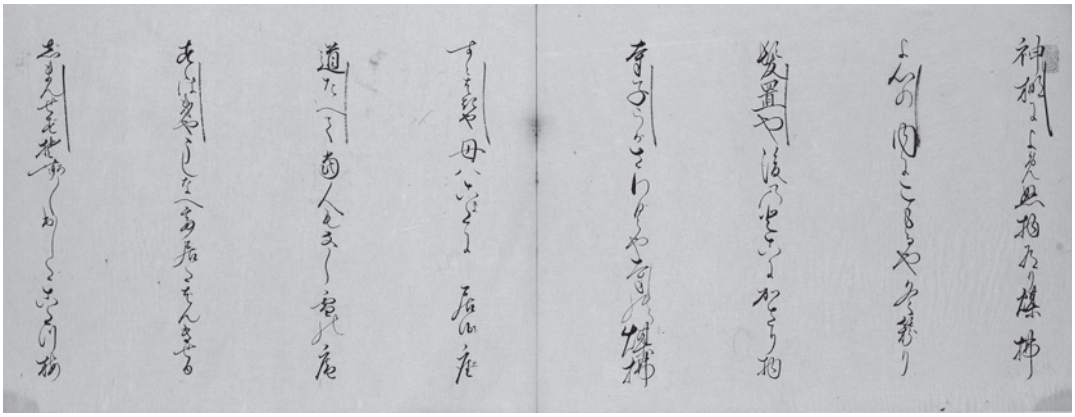


（47オ）　（46ウ）



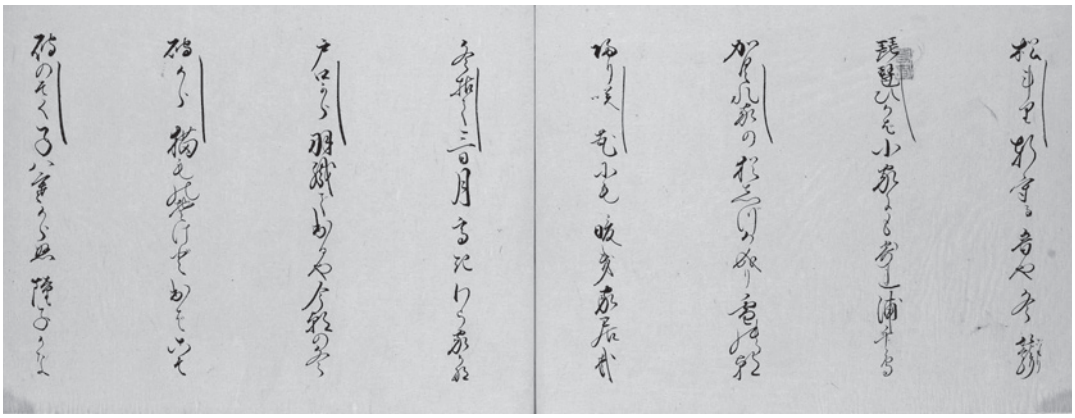
（48オ）　冬の居所　　（47ウ）

A→C（80ウ）

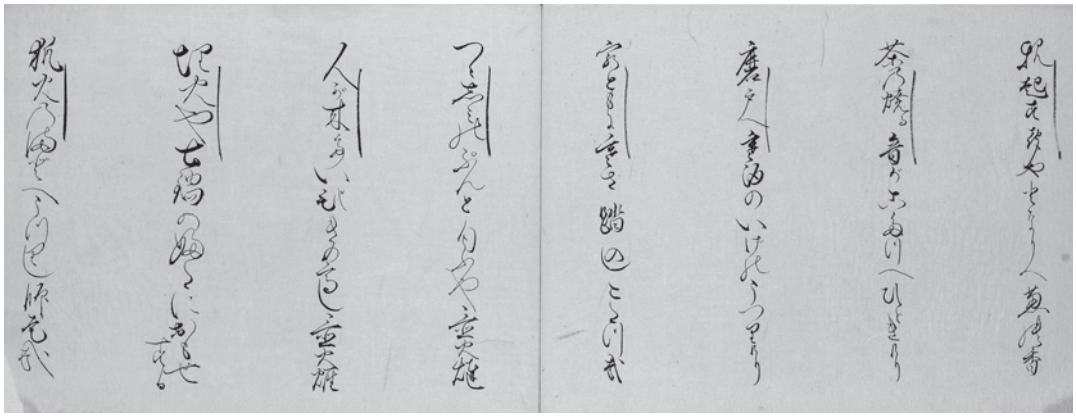


（49オ）　　（48ウ）

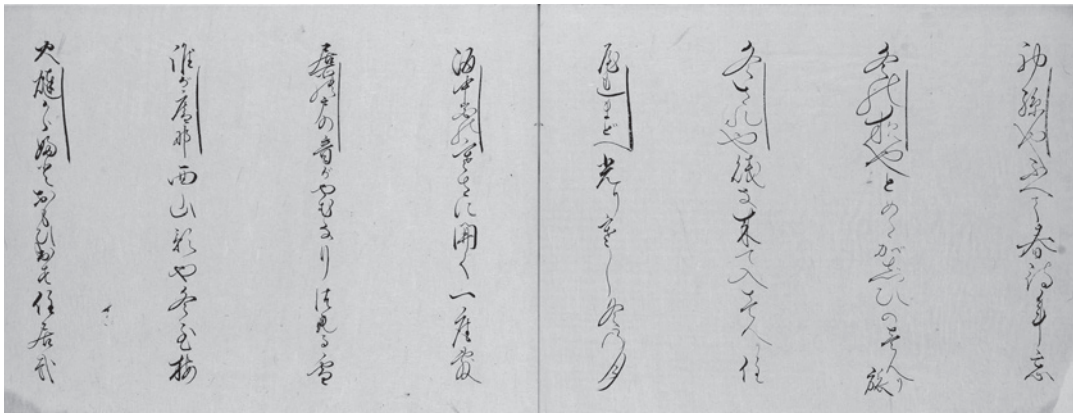
B



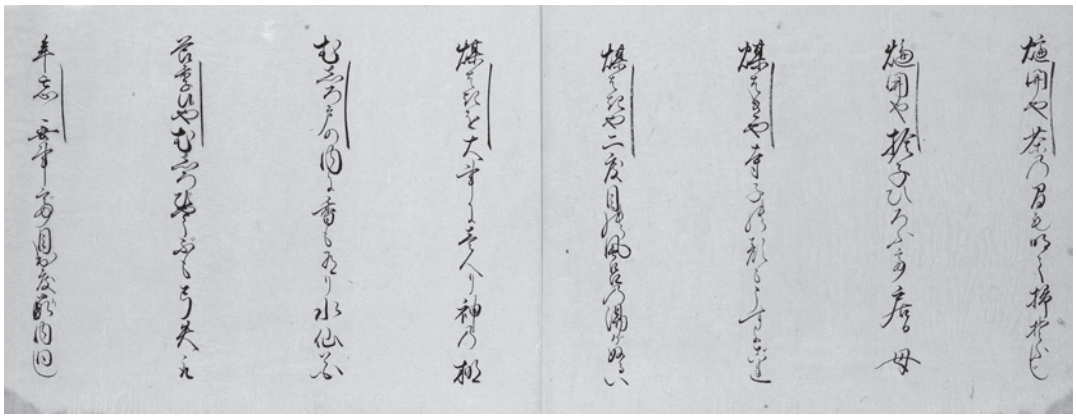
（50オ）　　（49ウ）



（50ウ）　（51オ）

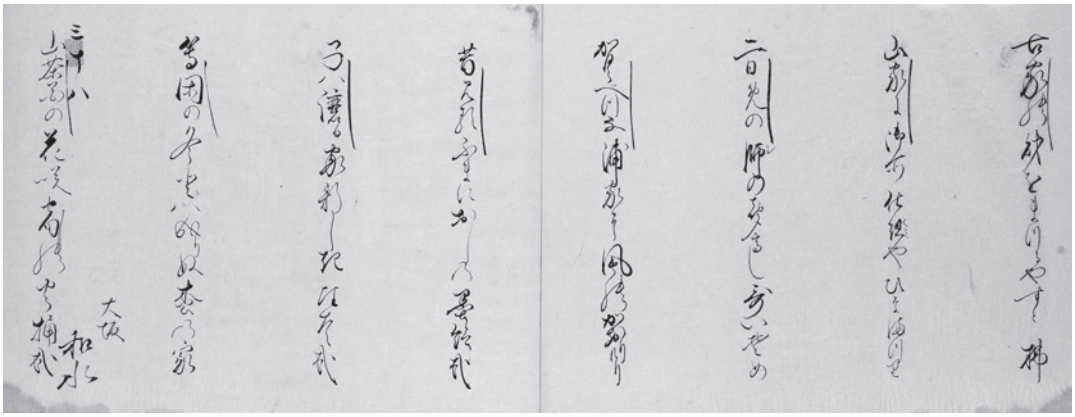


（51ウ）　（52オ）



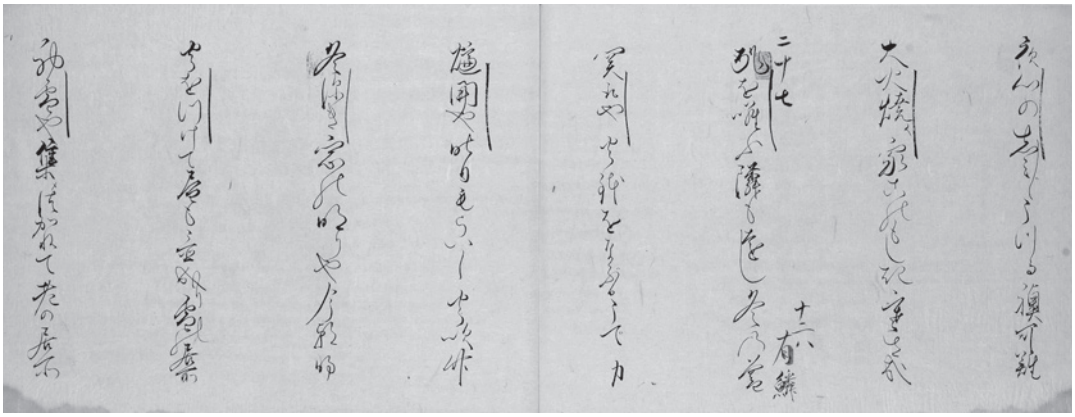
（52ウ）　（53オ）

A

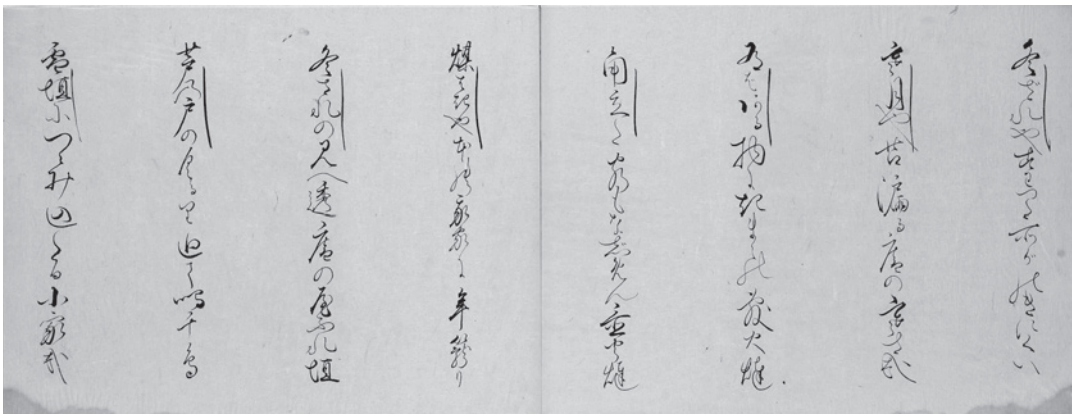


（54オ）大坂和水　　（53ウ）

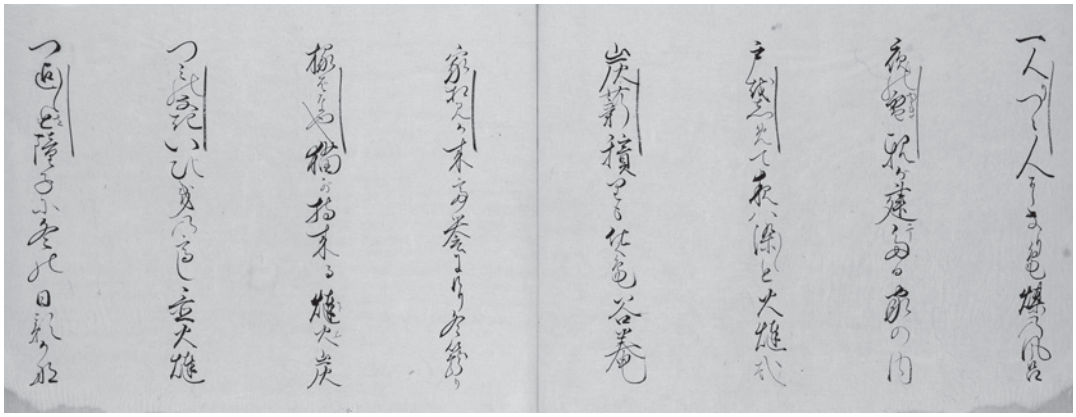
A



（55オ）　　（54ウ）　ナニハ有鱗

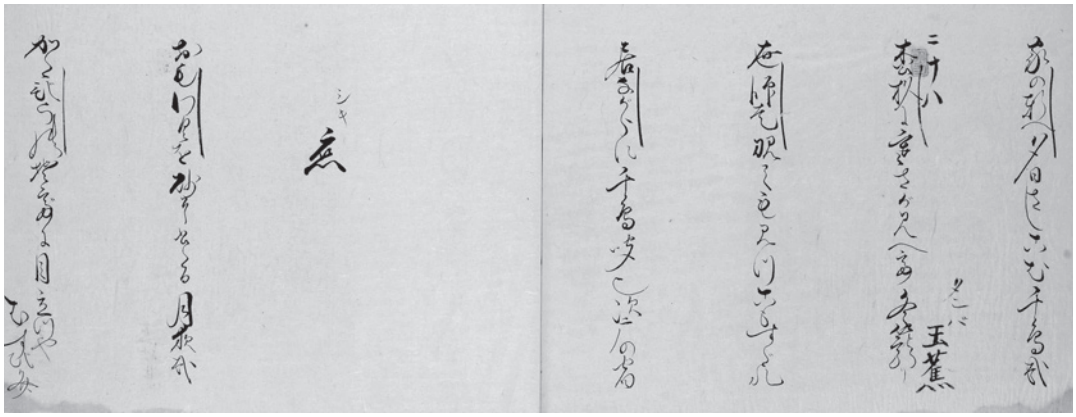


（56オ）　　（55ウ）

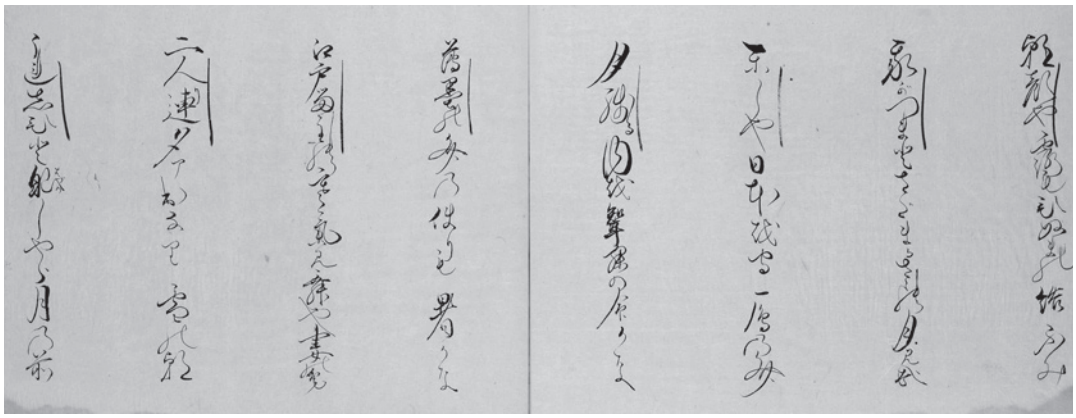


（57オ）　（56ウ）

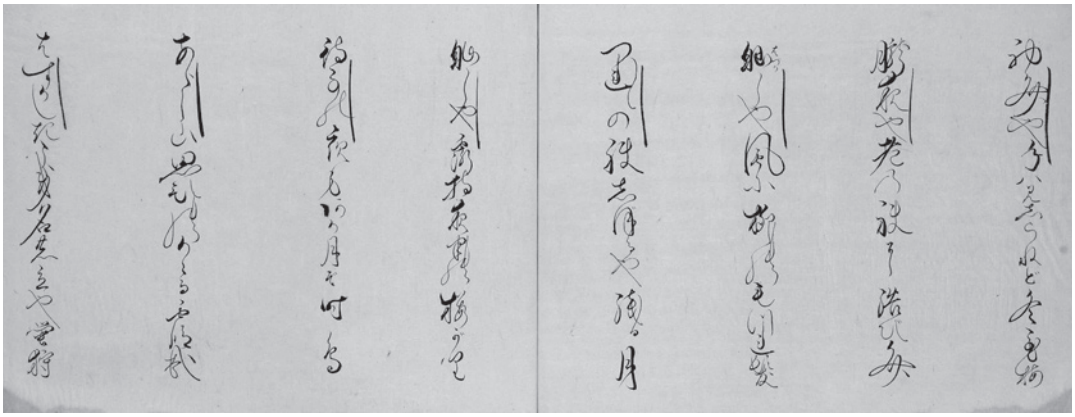
A



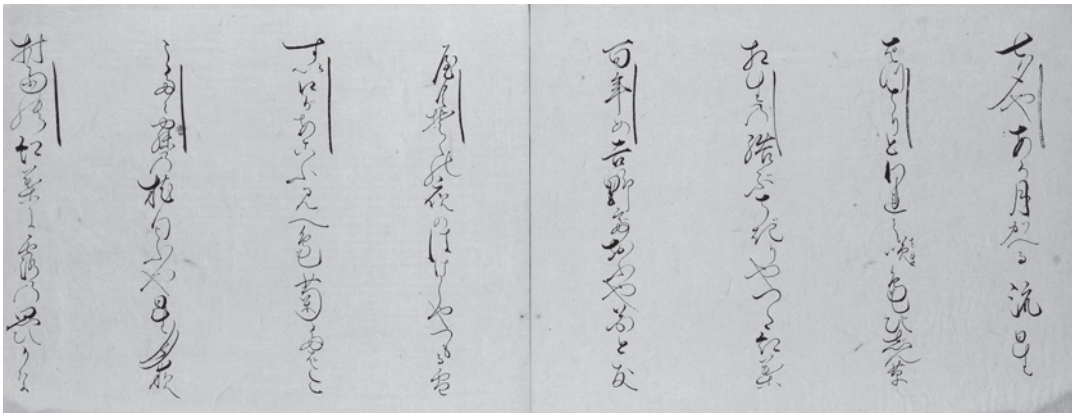
（58オ）　シキ　恋　（57ウ）　タンバ王蕉



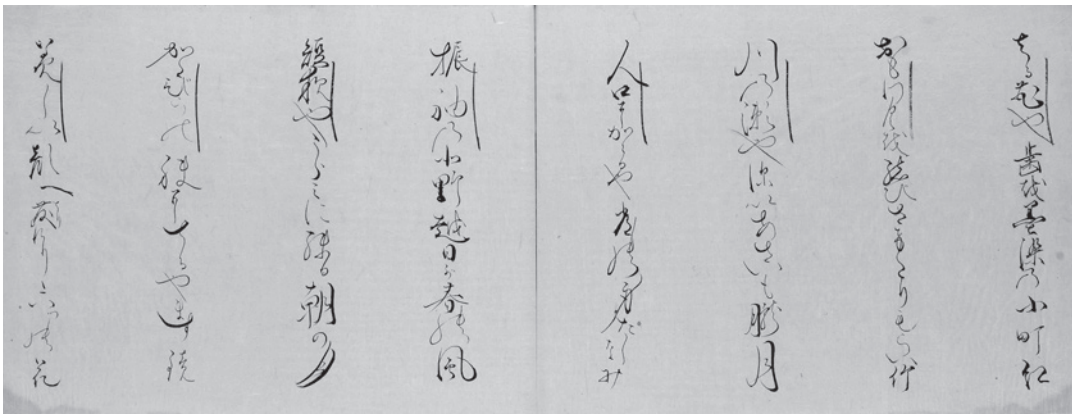
（59オ）　（58ウ）



（60オ）　（59ウ）

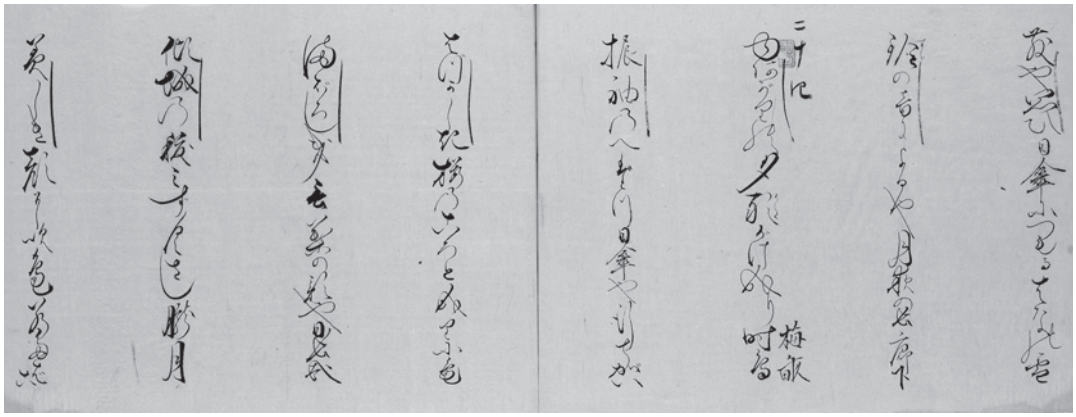


（61オ）　（60ウ）

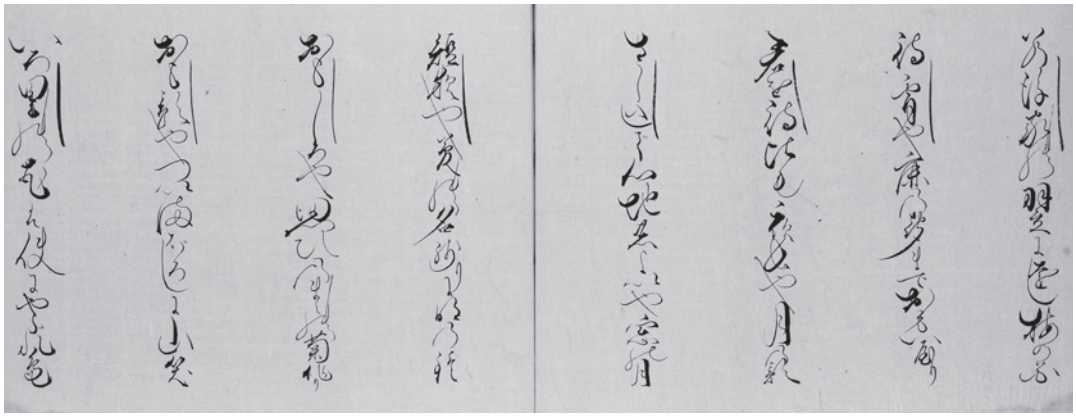


（62オ）　（61ウ）

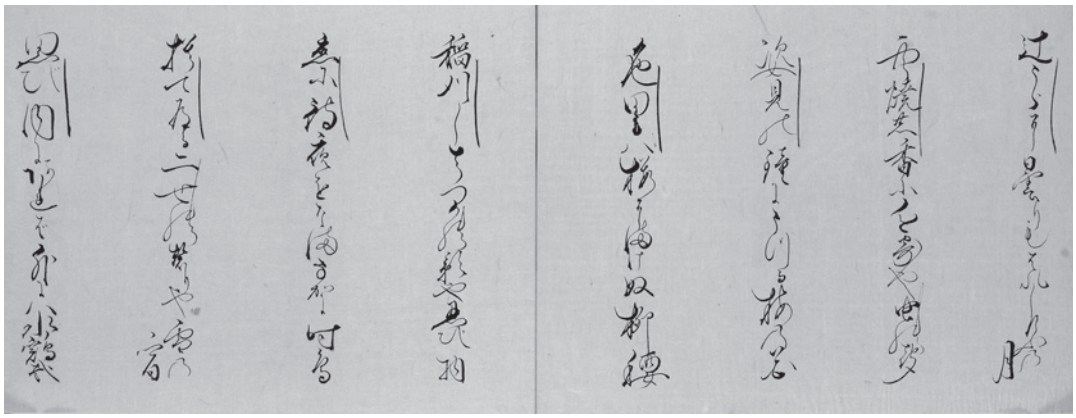
A



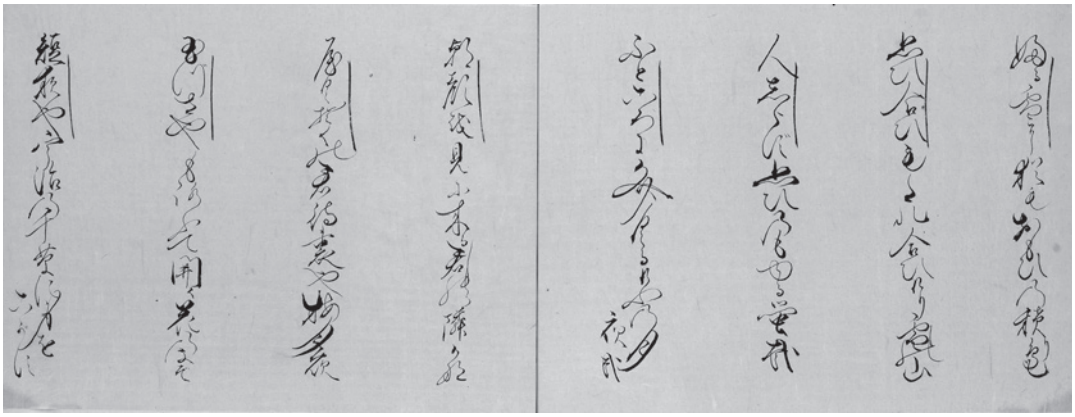
（63オ）　（62ウ）　梅畝



（64オ）　（63ウ）

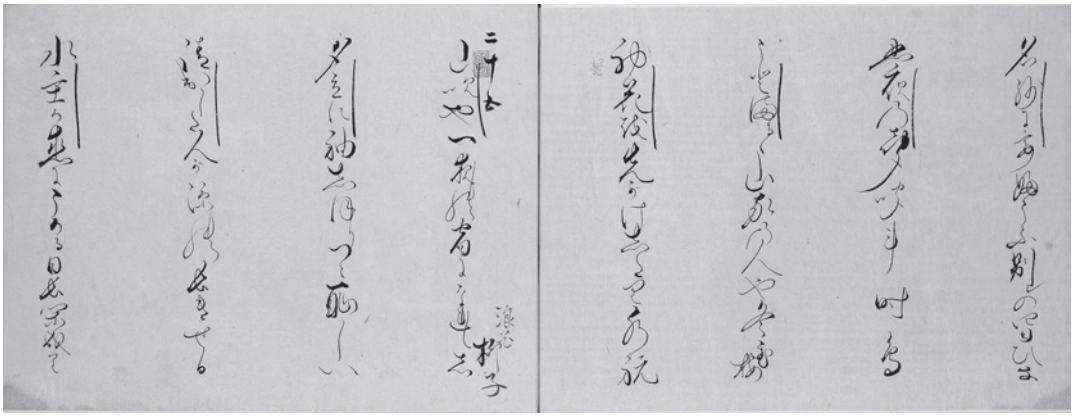


（65オ）　（64ウ）

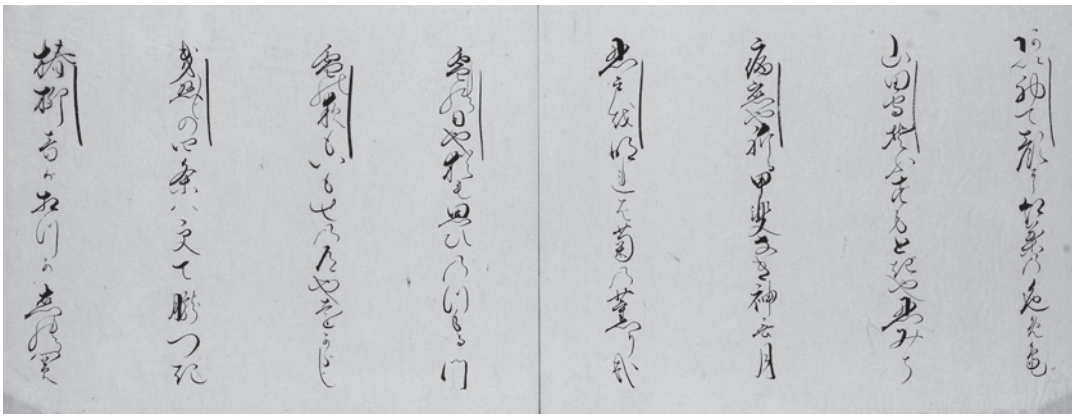


（66オ）　（65ウ）

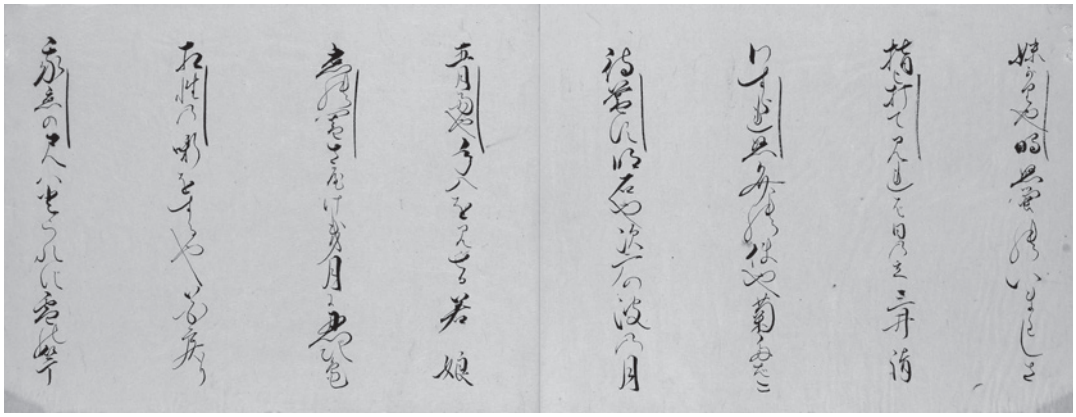
A



（67オ）　浪花柳子　（66ウ）

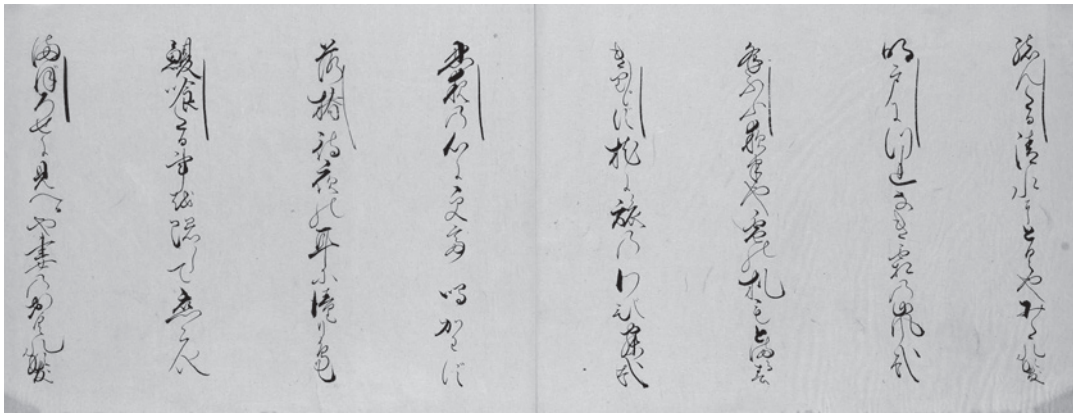


（68オ）　（67ウ）

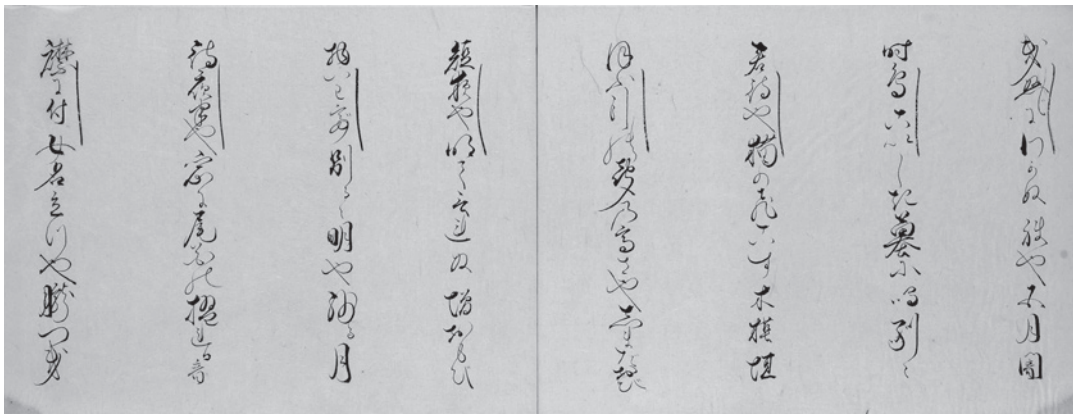


（69オ）　（68ウ）

長点→C（77オ）

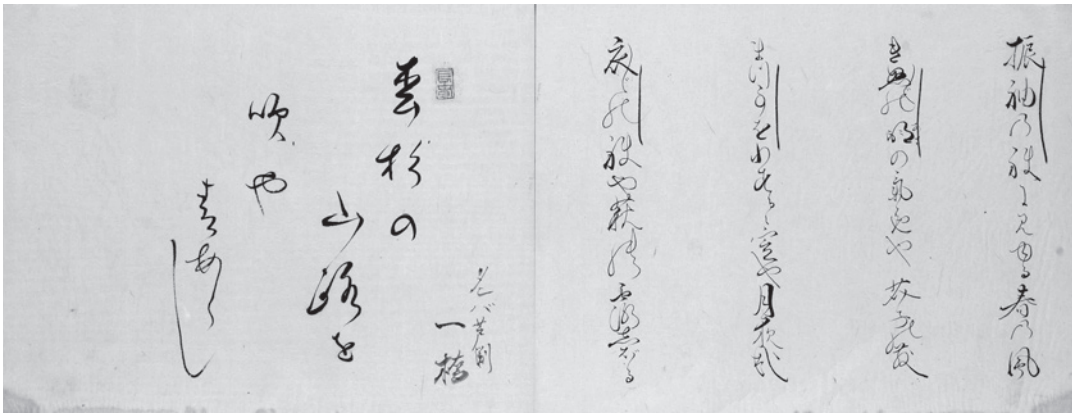


（70オ）　（69ウ）



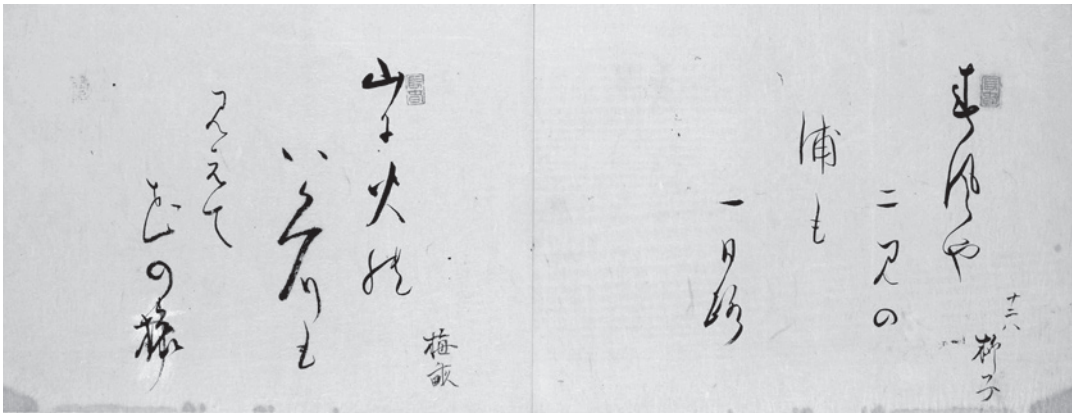
（71オ）　（70ウ）

A（28オ）→B



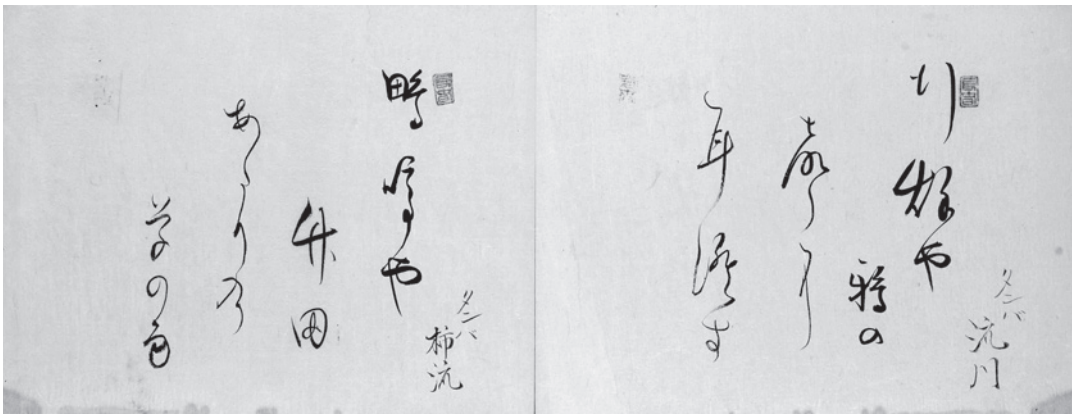
（72オ）　松杉の山路を吹や青あらし　タンバ芦渕一橘　（71ウ）

A（4オ）→B　　A（3ウ）→B



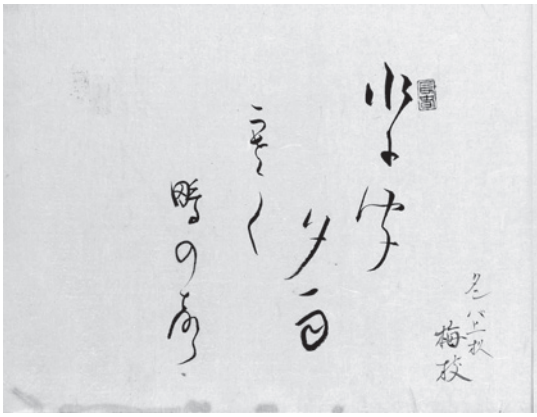
（73オ）　山に火のいくつも見えて花の旅　梅畝　（72ウ）　春風や二見の浦も一日路　ナニハ柳子

A（43オ）→B　　A（45オ）→B



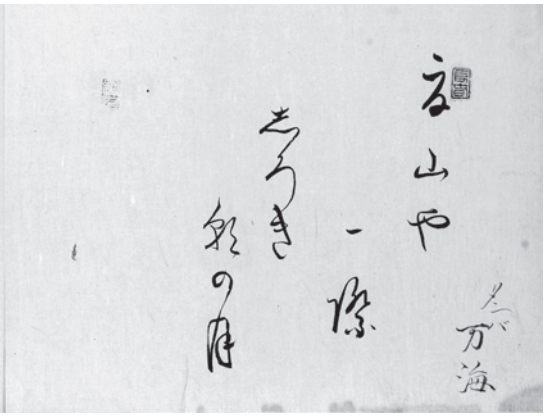
（74オ）　鳴啼や竹田あたりの草の雨　タンバ柿流　（73ウ）　行秋や鴉の声に耳澄す　タンバ流川

A（34オ）→B



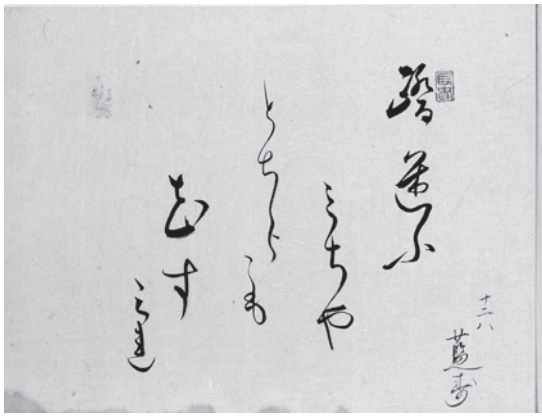
（75オ）　水に聞夕雨寒く鳴の声　タンバ上杉梅枝

A（29ウ）→B



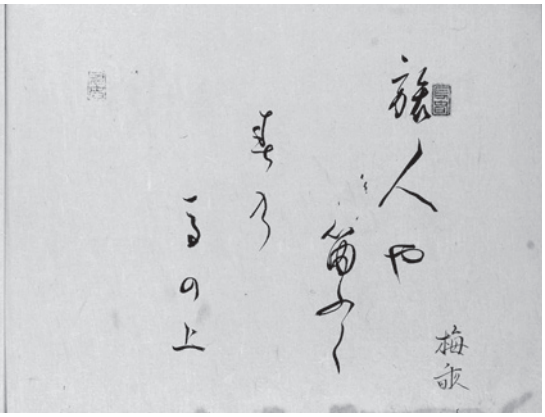
（74ウ）　夏山や一際しろき朝の月　タンバ万海

A（8オ）→B



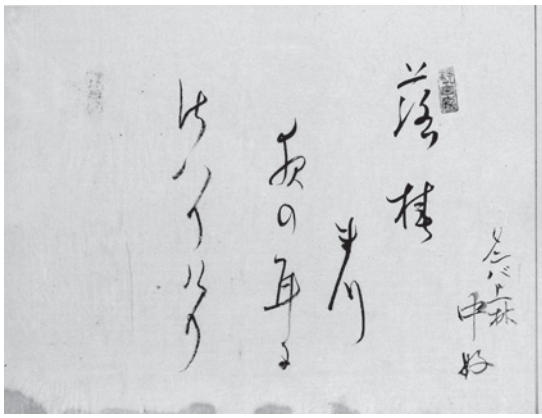
（76オ）　踏迷ふみちやどちらも花すみれ　ナニハ藍寿

A（9ウ）→B



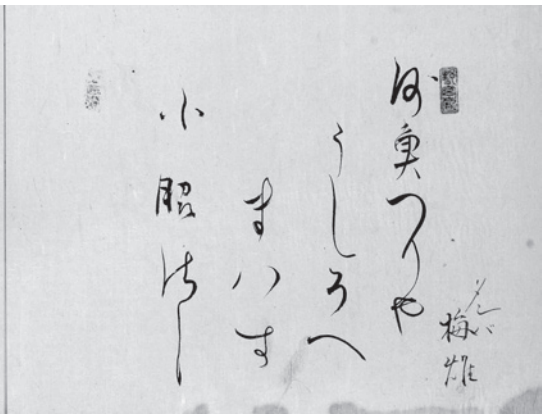
（75ウ）　旅人や笛ふく春の馬の上　梅畝

長点（70オ）→C



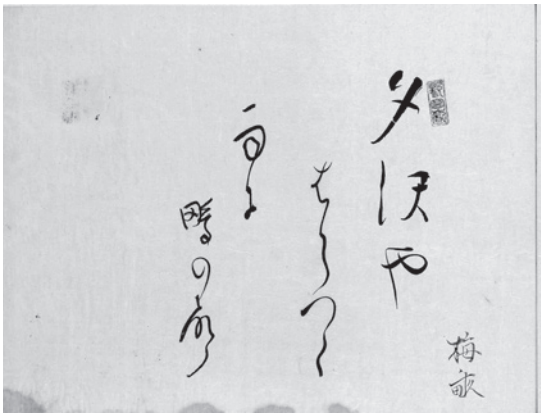
（77オ）　落椿まづ夜の耳にさはりけり　タンバ上林中好

A（47オ）→C



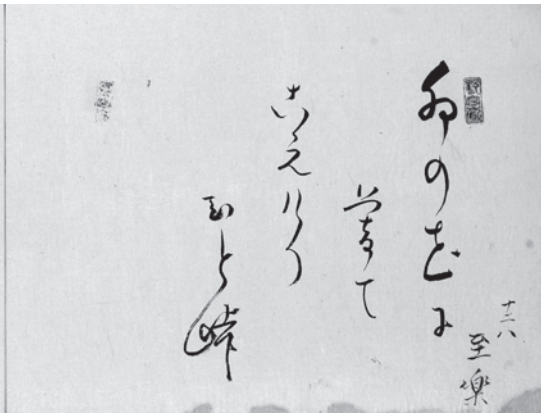
（76ウ）　沙魚つりやうしろへまはす小脇ざし　タンバ梅雄

A（32ウ）→C



（78オ）　夕沢やばらつく雨に鳴の声　梅畝

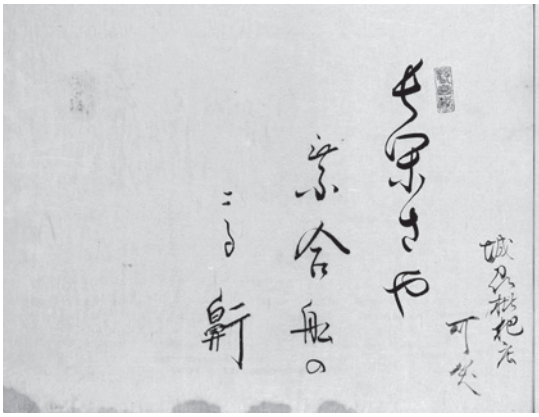
A（21ウ）→C



（77ウ）　卯の花に暮てこえけりひと峠

ナニハ至楽

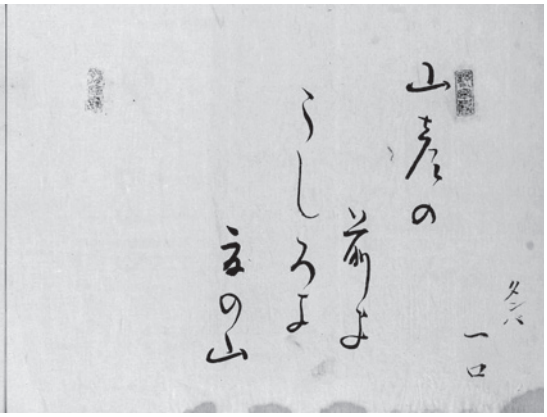
A（14オ）→C



（79オ）　長閑さや乗合船の高斛

城州枇杷庄可笑

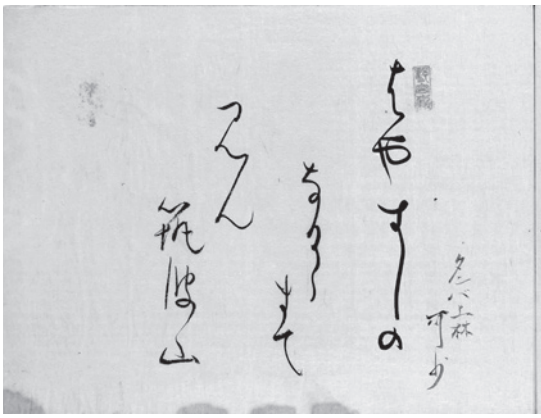
A（23オ）→C



（78ウ）　山彦の前ようしろよ夏の山

タンバ一口

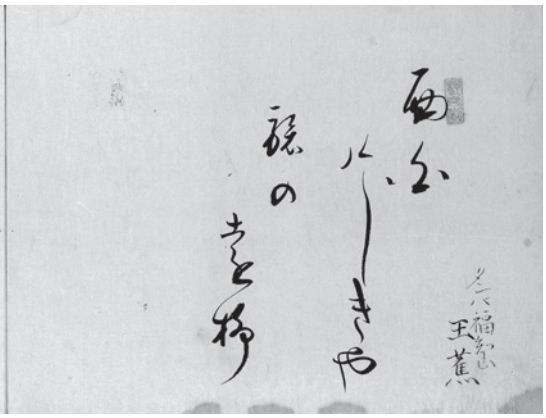
A（24オ）→C



（80オ）　はやずしのなるゝまで見ん筑波山

タンバ上林可少

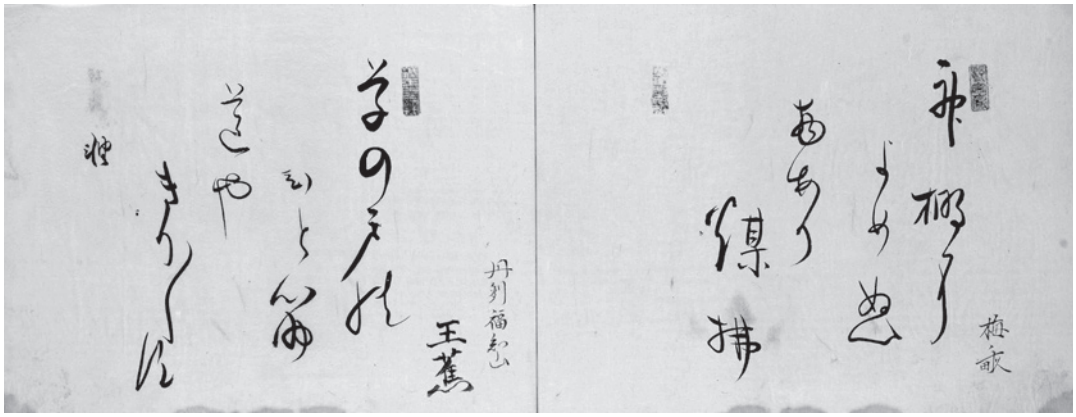
A（19オ）→C



（79ウ）　面白けしきや旅の遠柳

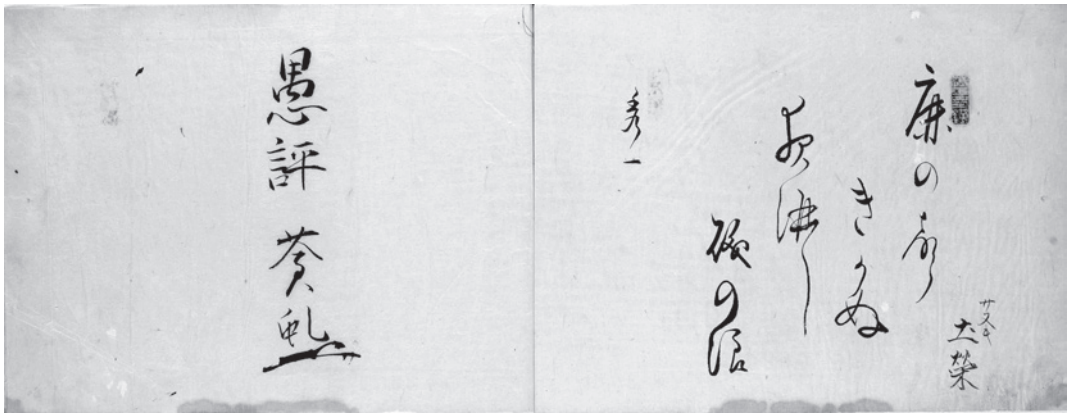
タンバ福知山王蕉

A（46ウ）→D　　A（48ウ）→C

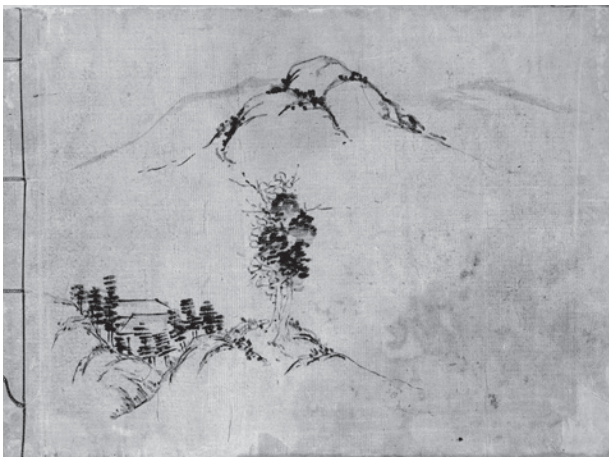


（81オ）　草の戸のひと筋道やきりぎりす　軸　（80ウ）　神棚によめぬ物あり煤払　梅畝
丹州福知山王蕉

A（36ウ）→D



（裏表紙見返し）　愚評　蒼虬（花押）　　（81ウ）　鹿の声きかぬ夜淋し磯の浪　秀一
サヌキ土栄



（裏表紙）

第五章　四世北村朝陽の点帖「月並　諸国発句抜章」影印　翻刻と解題

解　題

本冊は、芭蕉堂四世である北村朝陽の点帖である。朝陽は、『芭蕉堂門人録』（大正新冊）によれば、蒼虬門。芭蕉堂主としては、天保九年から同一一年までの二年間とする。これについては後述するが、「十月三日付吟風宛朝陽書簡―芭蕉堂開基披露案内」によれば、天保九年十月九日の継承と知られ、没年の天保一一年九月九日までの二年間となる。近江の人。生年は未詳、天保一一年九月九日に卒、享年未詳。

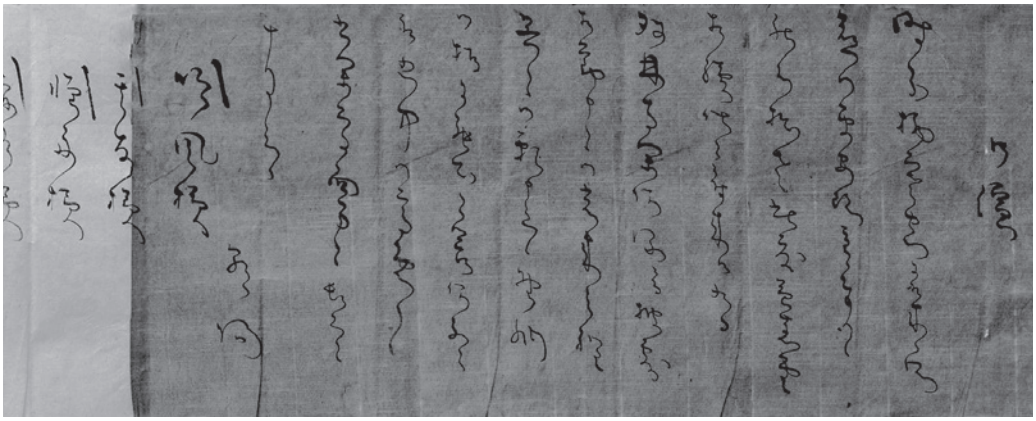
書誌を記す。縦一七・〇糎、横二四・〇糎。横本、写本一冊。表紙、裏表紙は共紙、墨付一九丁。畑忠良氏蔵。整理番号、2-5。畑家俳諧文書を読む会編・私家版「畑家俳諧文書目録」がある。

本点帖は、南山城、近江湖西、丹波地域の俳人を中心として催された三月の月並俳諧である。凡そ、朝陽の俳諧活動である花供養会の人々の範囲内である。月並発句のうち、秀句のみを書き抜き、半丁に一句ずつ、計三四句を収載する。発句は朝陽の自筆で、各句に点印を押す。所書きと作者名は、選後の書き込みである。最終句が最高点で、当時の慣習では、褒美の一つとして該当の作者に与えられることが多い。本冊の最高点は、「ヨド吟風」、淀藩士畑数馬、俳号吟風である。現所蔵者の畑忠良氏の曽祖父にあたり、ここに蔵されている由縁である。

点印については、翻刻凡例に記すが、五種類である。陰刻、陽刻、朱点、緑点、隷書、篆書などの創意工夫が認められる。また、「李白」、王維の「独坐幽篁弾琴復長嘯」（竹里館）などの漢詩人・漢詩から取材していることが知られる。なお、評語や添削は見られず、指導の意識は薄い。

朝陽は、吟風に芭蕉堂継承の披露案内を送っている。吟風は、二世堂主の蒼虬とも親交があり、芭蕉堂との親交が続いているのであるが、朝陽とはすでに俳仙堂（二世）時からの親交があった。俳仙堂とは、初代西村定雅の時から、淀藩士富原支雪、畑竹楼（吟風の父）らと共に交流があった。

次頁に「十月三日付吟風宛朝陽書簡　芭蕉堂継承披露案内」を紹介する。縦一六・二糎、横七〇・〇糎。畑忠良氏蔵、整理番号、1-87。成立は、天保九年十月三日興行の書簡と推定する。朝陽が三月の『花供養』を主催したことを確認できるのは、天保一〇年からである。前年の天保九年は『花供養』の出版が確認できない。しかし、『芭蕉堂門人録』によれば、九年から堂主であることが知られるので、同九年十月三日の書簡と推察される。



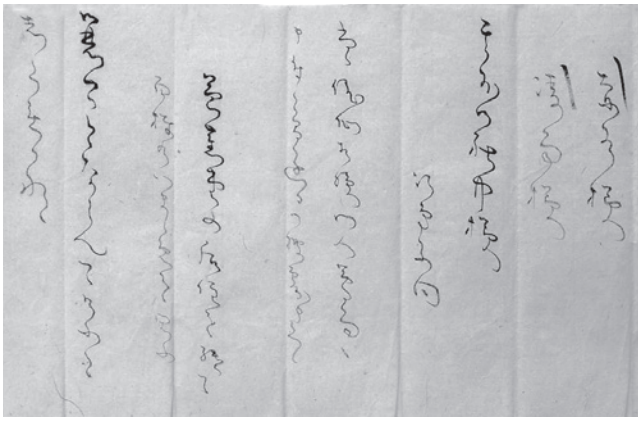
口演

時分柄寒空に相成候処、
愈御平安珍重に奉存候。
然ば拙老此度芭蕉堂
相続仕候に付、来る九日、
双林寺閑阿弥にて、披露
相勤申候。御光来之程、
呉々御頼申上候。野衲
御招に罷出候筈、何分に
取込中、御高免可被下候。
書閑高面万々　頓首

十月三日

朝陽

吟風様
其友様
軽舟様



赤水様
凌雨様
外御社中様

次第不問

尚々俳仙相続、門人蔦雨へ
申付候間、逐日御披露申上候

芭蕉堂の后住を継て
百棒のいましめを思ふ

蓑一つとならんでけふも
しぐれかな

『花供養』の出版は、蒼虬主催の天保五年を区切りに、天保六年から九年まで空白である。蒼虬は存命であるが、同五年以後に再び堂主としての活動は知られない。なお、蒼虬が堂主をつとめる間、『花供養』の出版はしばしば中断している。そのような状況の中にあって、当時俳仙堂堂主であった朝陽が継承することになったのである。本書簡により、朝陽の芭蕉堂堂主の就任は、天保九年十月九日と知られる。

参考文献

畑家文書を読む会編『畑家俳諧文書目録』（平成二三年三月跋、私家版）

翻刻凡例

一　丁移りは、各丁の名前の最後に丁数を付す。丁の表裏は「オ」「ウ」の略号で示す。

一　使用の便を考慮して、私に句番号を付す。

一　発句の清書と作者名、所書きの記載は別筆であるが、翻刻にあたっては区別しない。

一　字体は、原則として通行の字体に改める。

一　踊り字は原則として原本の表記に従うが、次のように統一する。なお、二字以上の繰返しについては原本に従わない。

平仮名・同濁点　　ゝ・ゞ
片仮名・同濁点　　丶・〻
一字の繰返し　　々

一　濁点・句読点を適宜私に付す。

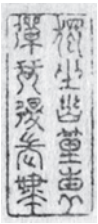
一　改行は、原本に従わない。

一　点印については、次のものがあるが、私に記号を付し、句の末尾に示す。

A

B

C

D


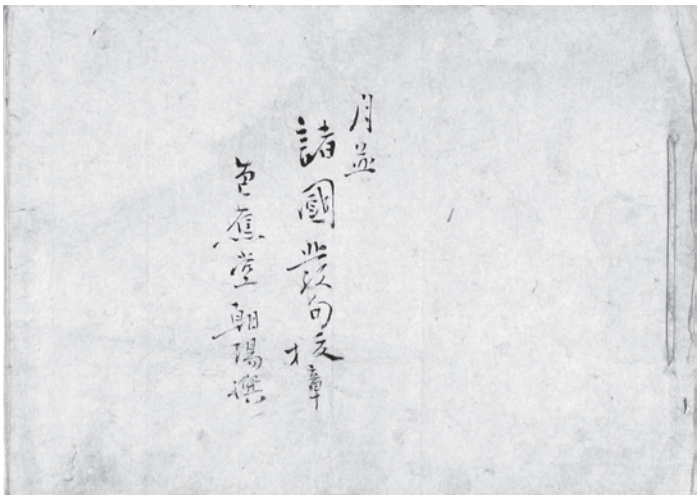
E

一　所書きについては、適宜私に〈　〉に注記する。

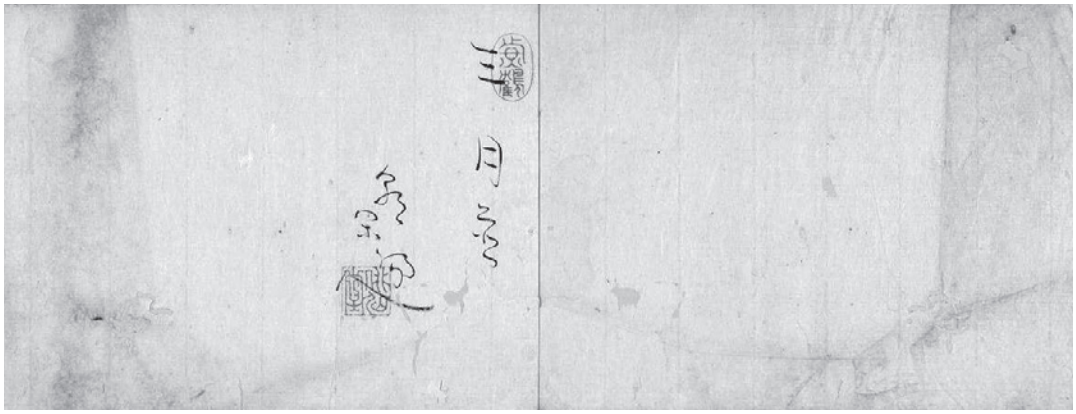
一　余白に記されている「イロハ」の付号は翻刻しない。

月並　諸国発句抜章

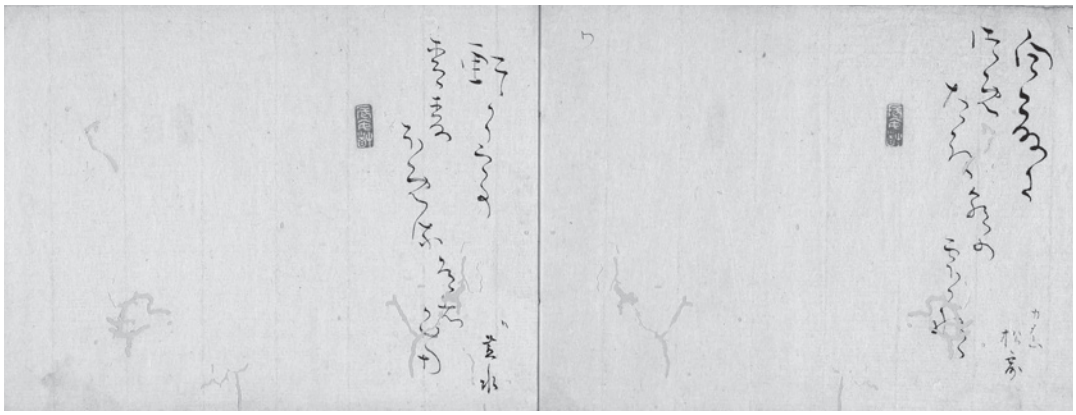
芭蕉堂朝陽撰



（表紙）

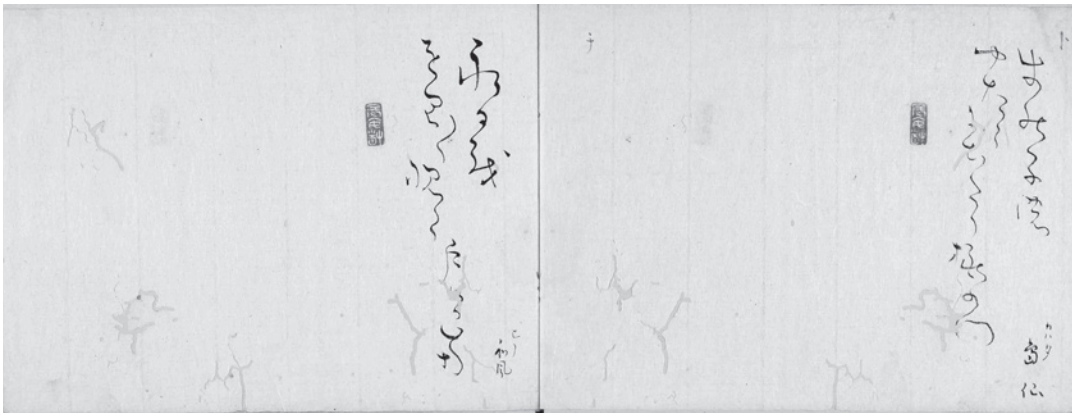


（１オ）　三月並　朝陽閑人 俳仙堂　　（表紙見返し）



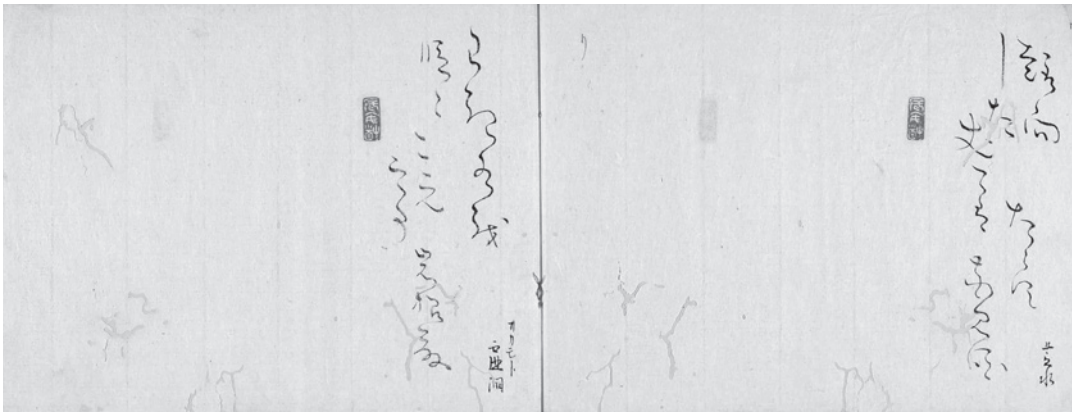
（２オ）　軒かりて青麦ほめる道者かな　　（１ウ）　白藤につめたき朝の雫かな

同〈亀山〉芝水　A　　カメ山松露　A



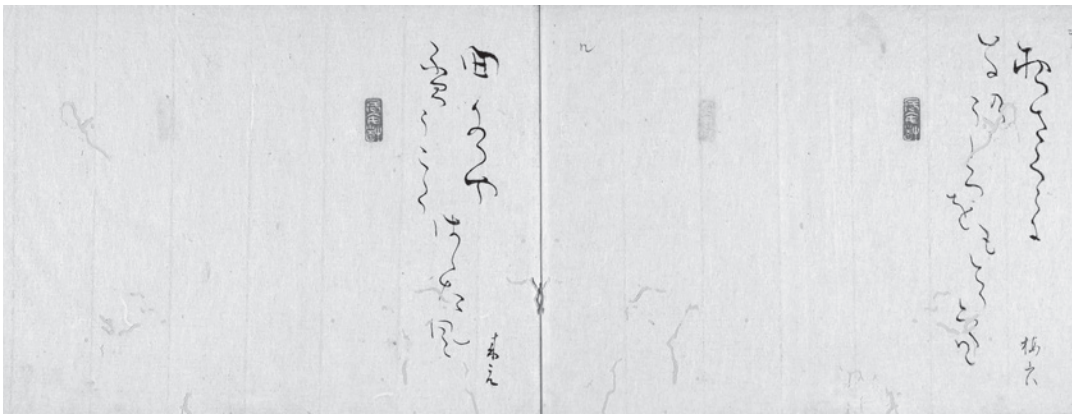
（２ウ）　牛の子のやたらに出たり桃の門
カバタ島仙　A

（３オ）　永日ををりをり覗く戸口かな
ヒノ和風　A



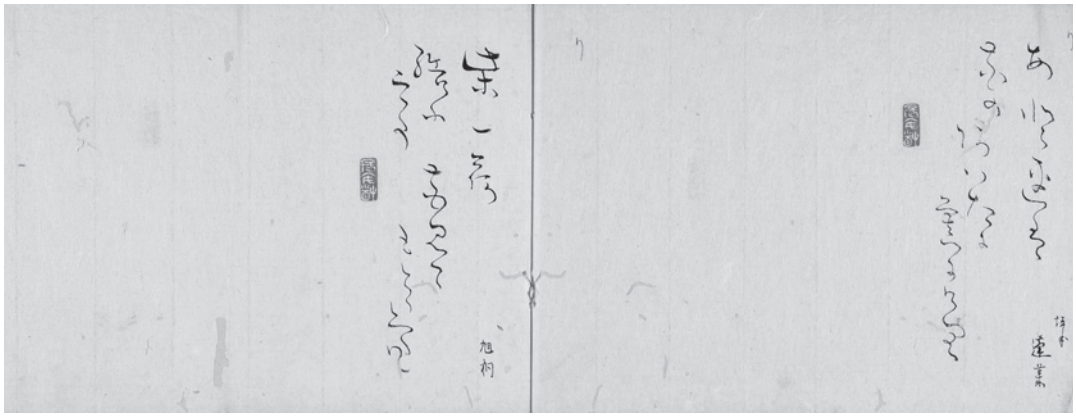
（３ウ）　趣向した丈ではたらず花見酒
芝水　A

（４オ）　わき水を段々こえて岩根藤
サカモト虚洞　A

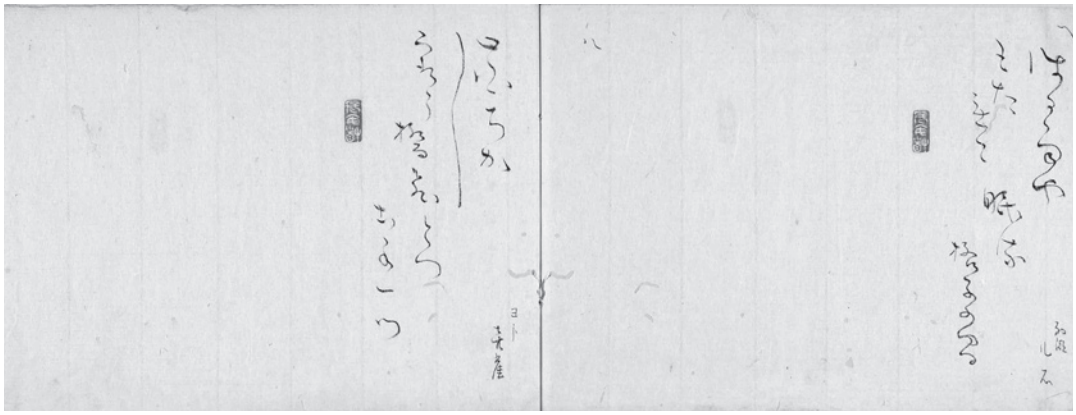


（４ウ）　夜ざくらに馬のうしろをもどりけり
梅六　A

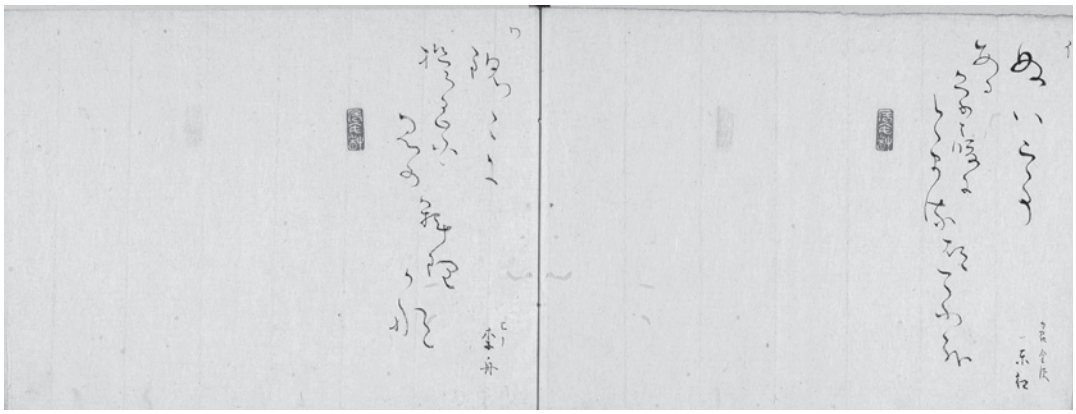
（５オ）　曲水や盃うごくはたゝ風
来之　A



（5ウ）　あと連は花のあいだに暮にけり
坂本蓬莱　A



（6ウ）　はる雨やもたれて眠る格子の間
西湖几石　A

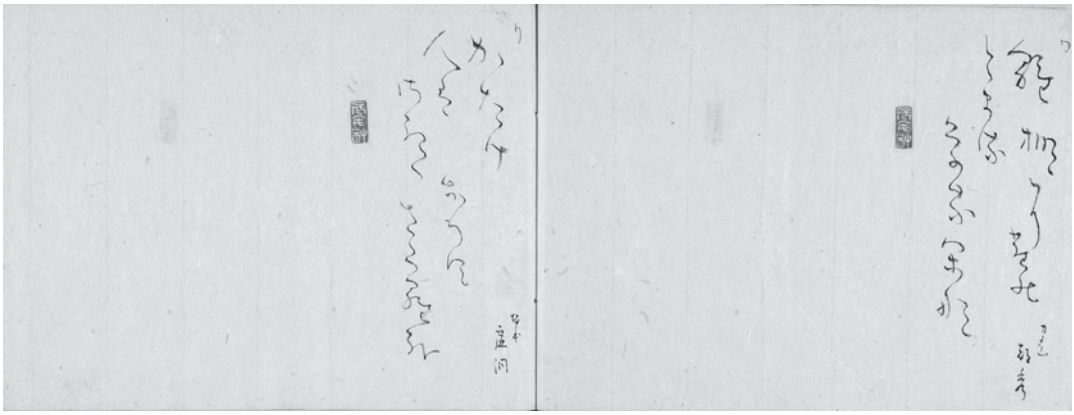


（7ウ）　ぬいである草履にとまる胡てふ哉
カ州金沢東紅　A

（6オ）　柴一荷結ふて花見てもどりけり
同〈坂本〉旭桐　A

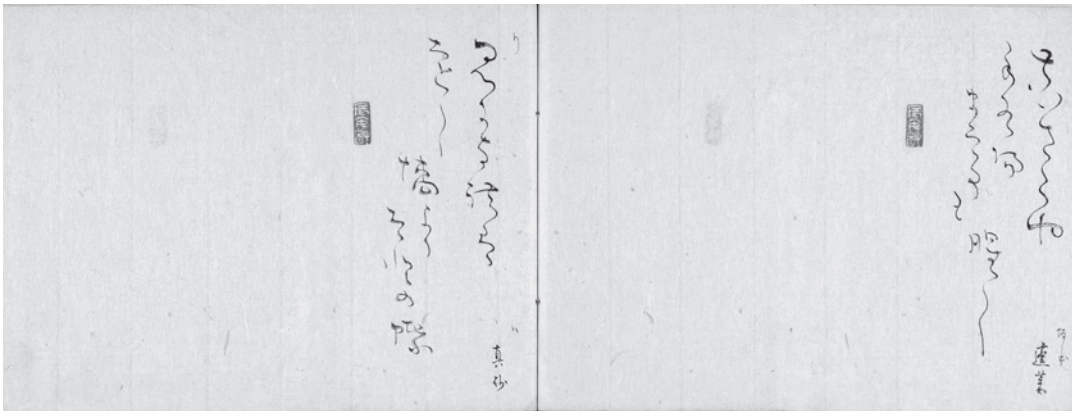
（7オ）　花ちかし最う橋ひとつ土手一つ
ヨド喜雀　A

（8オ）　銘々に提る花見の料理かな
ヒノ李舟　A



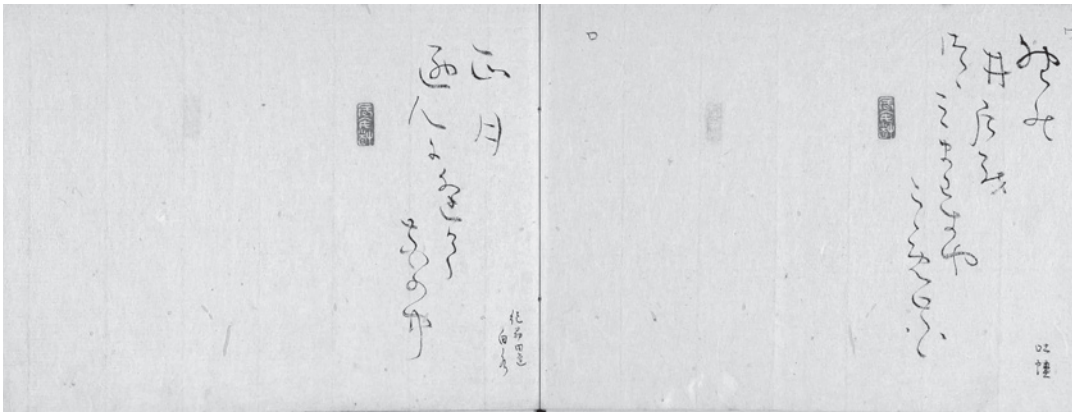
（９オ）　かたげ人はさきへ歩行すさくら哉　　坂本虚洞　A

（８ウ）　雛棚に雀のとまる草家かな　　カメ山都秀　A



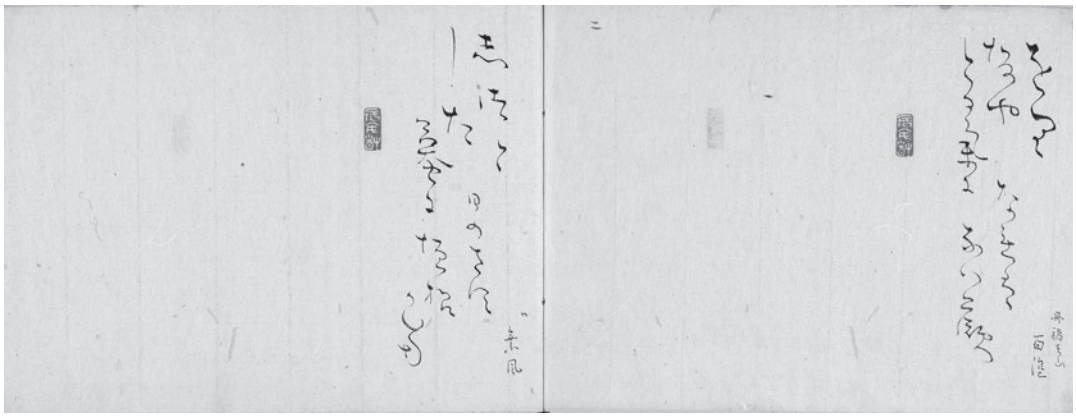
（10オ）　見になれば遠く墻よりそとの蝶　　同〈坂本〉真砂　A

（９ウ）　花さくや手水場までも腥く　　坂本蓬莱　A



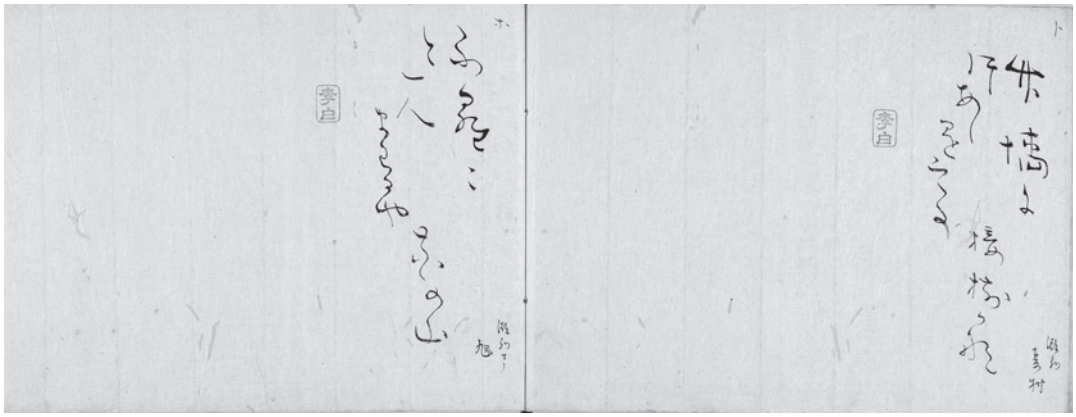
（11オ）　正月の人に逢けり花の中　　紀州田辺白水　A

（10ウ）　野の井戸をつゝみまわすやこゞめ花　　吐蛙　A



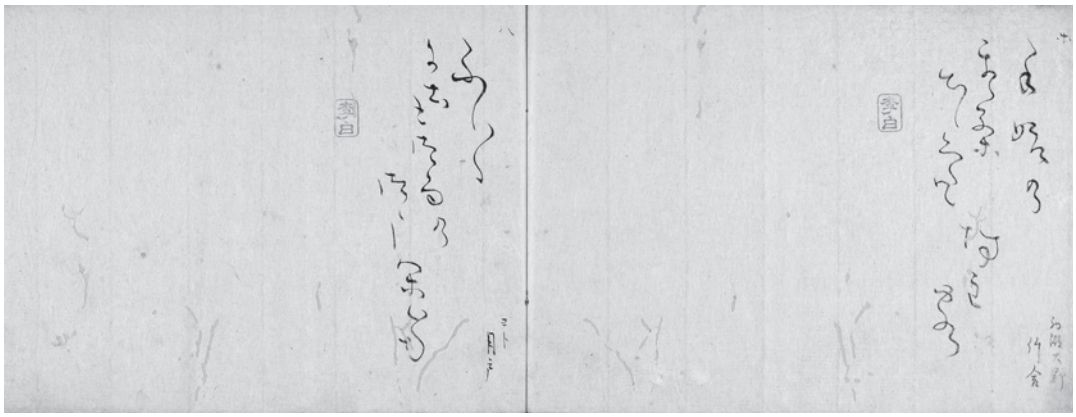
（11ウ）　をり坂やとる気になればない蕨
丹福知山百濫　A

（12オ）　じつとした墓に日のさす垣根かな
同〈福知山〉乗風　A



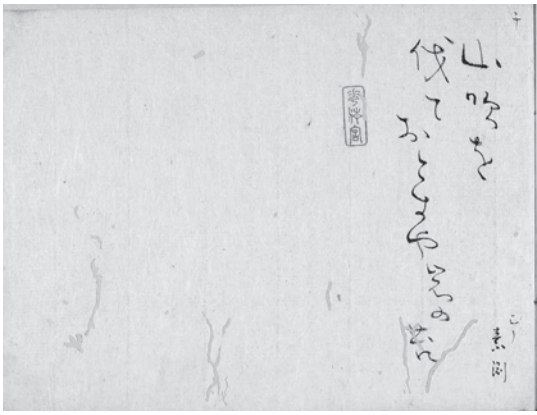
（12ウ）　竹墻に片あし置て接樹かな
湖西麦村　B

（13オ）　ふらふらと一人まわるや花の山
湖西ヒノ旭　B

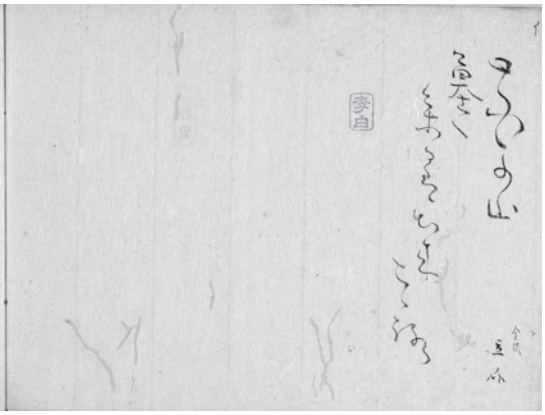


（13ウ）　手始の楽茶出しけり坊主客
西湖大野竹舎　B

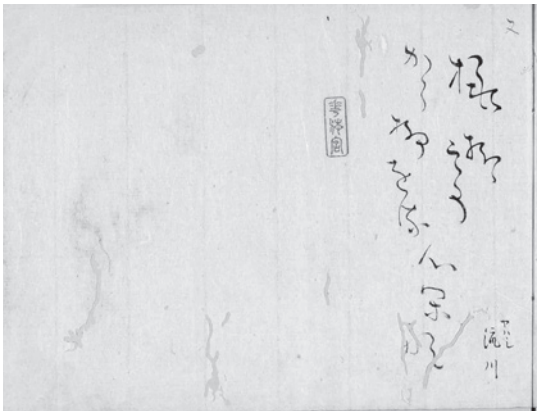
（14オ）　ふしぶしに土もつ雨のつゝじかな
ヨド月戸　B



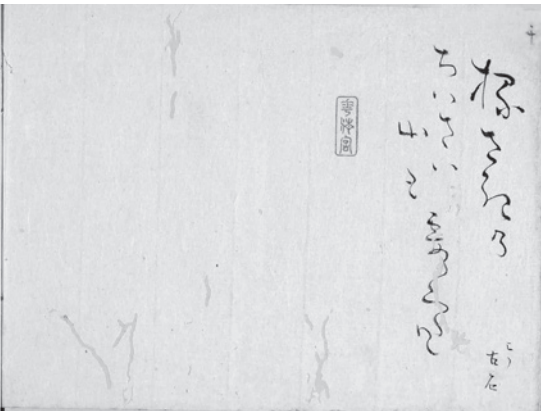
（15オ）　山吹を伐ておとすや岩の苔
ヒノ素渕　C



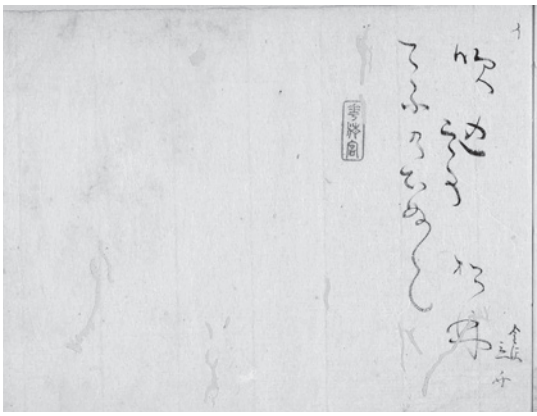
（14ウ）　花の山墓へ参るは出来ごゝろ
金沢立介　B



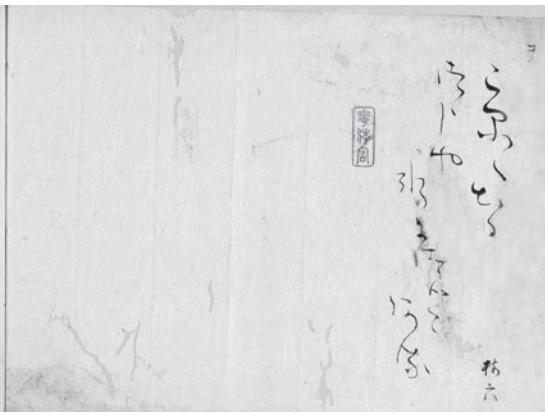
（16オ）　桃折てから柳をる心かな
ヤハシ流川　C



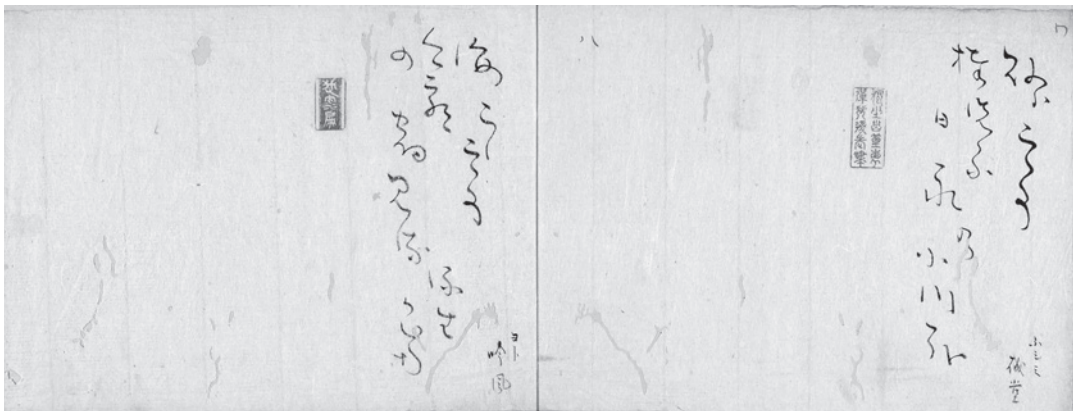
（15ウ）　椽さきのちいさい山も霞けり
ヒノ古石　C



（17オ）　吹込でてふの出ぬ也松林
金沢立介　C



（16ウ）　京へ出るつゝじや水につんである
梅六　C



（18オ）　海こして今朝の宿見る弥生かな　　（17ウ）　礫で棒つる日永の小川哉

ヨド吟風　E　　ふシミ磯堂　D

（裏表紙）

おわりに

花供養と京都の芭蕉顕彰

闌更は、『花供養』を刊行するにあたって、義仲寺刊『時雨会』に倣ったと考えられる。時雨会は芭蕉墓のある近江膳所で行われるが、京都の五升庵蝶夢や高弟である井上重厚（寛政四年以降、義仲寺看主）の影響が大きく、京都俳壇の動きと連動している。しかし、芭蕉顕彰を主導する蝶夢は、花供養に参会していない。また、蝶夢は京都の人であるが、京都では影響力の強い貞門の俳諧からも距離があり、独自の位置を確立していたと考えられる。

その蝶夢や重厚と闌更は、交際があった。次に年次を追って一覧する。

○天明元年冬、鷺橋発句の歌仙興行に、闌更脇句、重厚一座する。（あきのそら）
○天明五年立秋、五升庵における蝶夢・几董・闌更の俳諧興行に、重厚旅より帰り来て歌仙一巻と成る。〔連衆〕蝶夢・几董・闌更・重厚・執筆。（新雑談集）
○天明六年三月一二日、闌更編『花供養』（同興行）創刊。重厚発句一入集。
○天明六年秋、闌更編『力すまふ』（同跋）刊。重厚発句一入集。
○天明六年一〇月一二日、義仲寺時雨会。沂風は旅行中のため、重厚が同会を執行する。闌更は俳諧興行に一座する。
○天明年間、青蘿・重厚作『長月の夜』刊。闌更は序文を寄せる。
○寛政元年七月、闌更編『奉納集』刊。在江戸重厚発句一入集。
○寛政四年春、闌更編『奉納其二集』（同奥）刊。重厚発句一入集。
○寛政五年一月、伏見の梅渓に遊び、紫暁・重厚・闌更との三ツ物成る。（あけぼの草紙）
○寛政五年三月一二日、闌更編『花供養』（同興行）刊。義仲寺重厚発句一入集。

○寛政五年四月一二日、奉扇会。東巖公（二条殿）立句、重厚脇句、闌更第三以下一順の百韻を巻く（祖翁百回忌）。この折、義仲寺並びに洛東芭蕉堂へ「正風宗師」の染筆が贈られる（四月二八日付歩簫宛蝶夢書簡・道の杖）。
○寛政五年一〇月一二日、時雨会奉納巻頭に闌更が据えられる。（祖翁百回忌）
○寛政五年、闌更編『奉納其三集』（同序）刊。ァハッ重厚発句一入集。
○寛政六年三月一二日、闌更編『花供養』（同興行）刊。粟津重厚発句一入集。
○寛政六年夏、闌更閲・車蓋編『発句題林集』刊。重厚発句一四入集。
○寛政六年一月一二日、重厚編『時雨会』に奉納巻頭に闌更が据えられる。
○寛政七年三月二一八日、東瓦編『ちりゆく花』（同序）刊。知海一周忌追善歌仙に、義仲寺重厚・闌更一座する。
○同三月一二日、闌更編『花供養』（同興行）刊。江州粟津重厚発句一入集。
○同一月一二日、重厚編『時雨会』の奉納巻頭に闌更が据えられる。
○寛政八年三月一二日、闌更編『花供養』（同序）刊。粟津重厚発句一入集。
○同一月一二日、重厚編『時雨会』の奉納巻頭に闌更が据えられる。
○寛政九年三月一二日、闌更編『花供養』（興行）刊。粟津義仲寺重厚発句一入集。

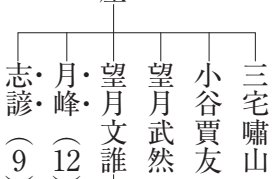
右に一覧したように天明・寛政期を通じて交際があり、特に、闌更は重厚とはしばしば交流している。蝶夢とは殆どないが、時雨会や蝶夢らの芭蕉顕彰、落柿舎の再興（明和七年）などには注目していた。蝶夢は、積極的に闌更に関わるのではないが、重厚が関わることには肯定的である。二条家から義仲寺に「正風宗師」が贈られたこと、花供養会に義仲寺の肩書をもって参会することに、蝶夢自らは表に立たないが、芭蕉顕彰を推進する立場からは認められることであったのであろう。なぜなら、蝶夢の目指す芭蕉顕彰は、一部の熱心な芭蕉顕彰者だけではなく、より多くの人々に受け入れられ、支えられる必要があったからである。『時雨会』が俳諧史的には重要であるが、先細りしていったのと対照的に、後発の『花供養』は江戸期を通じて盛んであり、芭蕉顕彰の一つの役目を果たしたと言える。芭蕉顕彰という点からすれば、『時雨会』の延長線上に『花供養』があるのである。

また、『花供養』を支える京都の俳人に寺村百池がいる。百池は、寛政二年から闌更が没する寛政一〇年まで、毎年参会

している。百池の俳諧は、蕪村、几董の門である。その几董と闌更との交流は盛んである。几董は京都の人であるが、貞門の俳諧からは距離がある。以下に年次を追って几董と闌更との動きを一覧する。浅見美智子著「几董年譜」を参照した。

○天明二年一一月一六日、几董は、三浦樗良大祥忌の句を闌更に遣わす。（晋明集二稿）
○天明五年立秋、五升庵における蝶夢・几董・闌更の俳諧興行に、重厚旅より帰り来て歌仙一巻と成る。〔連衆〕蝶夢・几董・闌更・重厚・執筆。（新雑談集）
○天明七年三月一二日、闌更編『花供養』（同興行）刊。几董発句一入集。
○寛政元年四月一三日、几董は桃睡を伴い、定雅、闌更を訪ねる。（寛政己酉句録）
○寛政元年五月一〇日、几董は闌更の南無庵を訪ねるが、留守。（寛政己酉句録）
○寛政元年五月二〇日、几董は闌更の文音句を録す。（寛政己酉句録）
○寛政元年七月、闌更編『奉納集』刊。几董発句一入集。
○寛政元年九月一〇日、桃睡の母の遠忌追福俳諧興行に出席、闌更・百池・桃睡・几董の歌仙満尾。（晋明集五稿）

几董は寛政元年一二月二三日急逝したが、闌更が花供養に専念していた頃、几董とは交際を重ねていたといえよう。さらに、『花供養』に入集している京都の俳人に、高城都雀、双林寺西阿弥月峰、双林寺正阿弥志諺がいる。これらは宋屋門である。『俳諧家譜後拾遺』（寛政九年）によって宋屋門との関連を示す。（数）は『花供養』入集回数である。



右からは、闌更が東山において俳諧活動を行う背景の一端を担うものとして、宋屋門の存在が指摘される。京都における貞門に近い立場の人々である。

右に見てきた重厚、几董、宋屋門との交流からは、京都の人ではない闌更が、京都俳壇に交わる際に寄る辺とした人脈の一端が知られる。京都俳壇は、貞門が強い勢力を持っていた状況から、次第に蕉門の勢力が増しているのである。蝶夢・重厚は、近江膳所の義仲寺に時雨会を営み、蕪村は金福寺の芭蕉庵を設け、几董はそれを助けた。貞門に近い立場の人々も芭蕉を慕った。このような中で、地理的に交通の便がよく、門流に拘らず広く受け入れ、句の優劣を問題としない洛東の芭蕉堂花供養は、時代の要請に適ったものであった。

参考文献

一　谷峯蔵著『芭蕉堂七世　内海良大』（昭和五二〈一九七七〉年四月、千人社刊）
一　義仲寺編『時雨会集成』（平成五〈一九九三〉年一一月、義仲寺刊）
一　富田志津子著『二条家俳諧　資料と研究』（一九九九年九月、和泉書刊、）
一　田中道雄著『蕉風復興運動と蕪村』（二〇〇〇年七月、岩波書店刊）
一　京都俳諧研究会著「『花供養』書誌」（立命館大学アート・リサーチセンター紀要「アート・リサーチ」10号、二〇一〇年三月刊）
一　立命館大学アート・リサーチセンター主催、二〇一〇年一一月一日、展示図録「花供養と京都の芭蕉」　WEB公開中
一　京都俳諧研究会著「花供養と京都の芭蕉」（立命館大学アート・リサーチセンター紀要「アート・リサーチ」11号、二〇一一年三月刊）
一　畑家文書を読む会編「畑家俳諧文書目録」（平成二三〈二〇一一〉年三月跋、私家版）
一　藤川玲満著『秋里籬島と近世中後期の上方出版界』（二〇一四年一一月、勉誠出版刊）
一　京都府綾部市資料館編「羽室家文書（文芸史料）調査報告」（二〇一七年三月、京都府綾部市資料館刊）
一　竹内千代子編・校訂「芭蕉堂門人録―影印と翻刻―」（二〇一八年三月、私家版）
一　竹内千代子編・著「堀秦夫句稿『秦夫草』翻刻と南山城の俳諧」（二〇一九年二月、私家版）
一　京都俳諧研究会編・翻刻「『花供養』翻刻集成」（継続中）　WEB公開中

付記

本稿は、科学研究費助成事業「近世後期京都俳壇における芭蕉顕彰資料の収集と研究」（課題番号 17K02474）の成果の一部である。

また、立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」二〇一九年度共同研究「花供養をめぐる近世後期京都俳諧の研究」の成果の一部である。なお、成果の一部は web 公開中である。

http://www.arc.ritsumei.ac.jp/rarebook/2/3/post-48.html

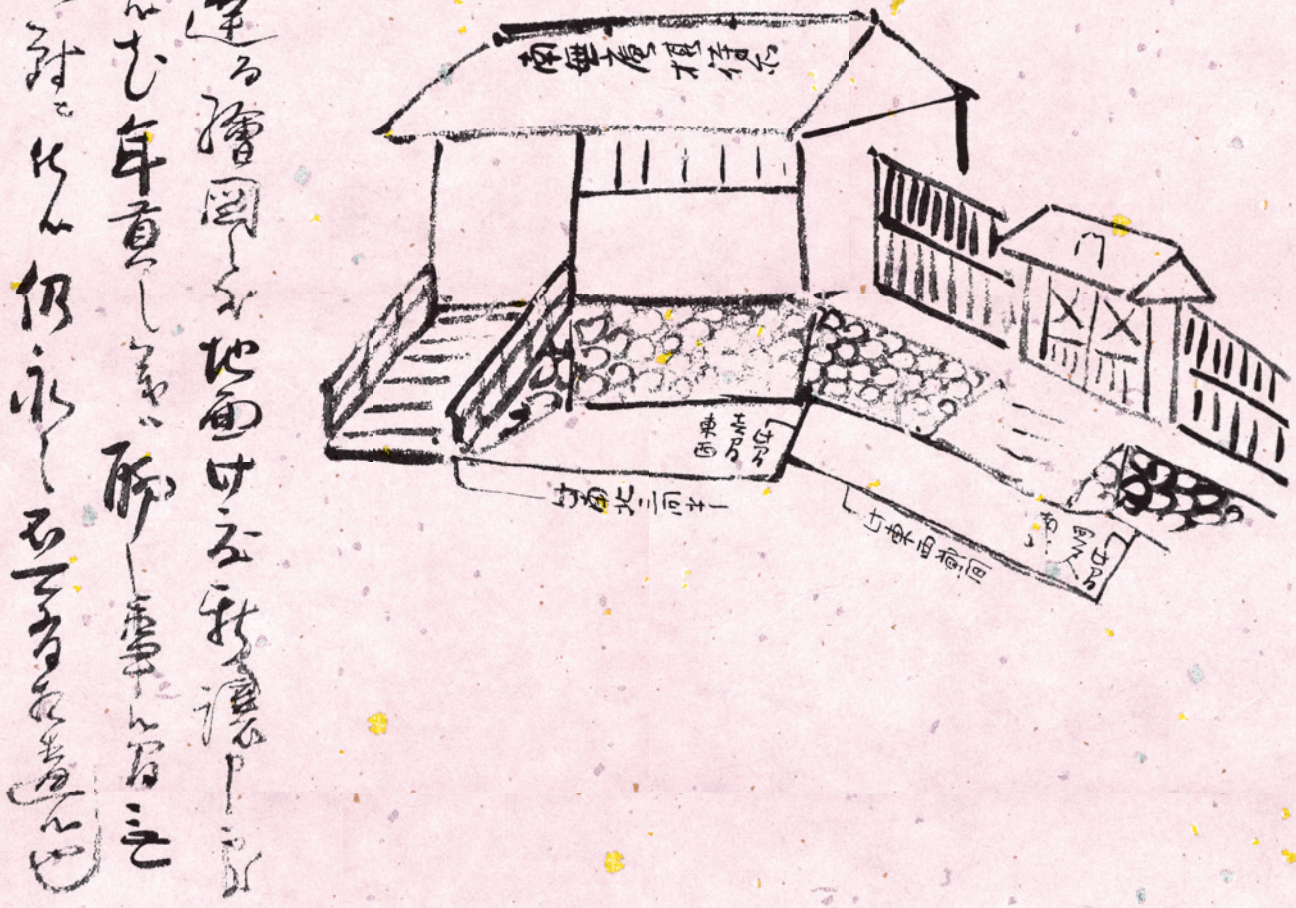
本稿を成すにあたっては、関西大学図書館、舞鶴市郷土資料館糸井文庫、綾部市資料館、京都俳諧研究会、国文学研究資料館、夢望庵文庫、畑家文書を読む会、並びに畑忠良氏、永井一彰氏、小林孔氏、松本節子氏、久後生歩氏の学恩を賜りました。記して深謝申し上げます。

近世後期京都の芭蕉顕彰俳諧資料
芭蕉堂歴世の俳諧と花供養

発行日　令和元年十二月八日

編・著　立命館大学（非）講師　竹内　千代子

印　刷　株式会社　昭　英　社
〒六〇〇―八一一九
京都市下京区五条通河原町西入本塩竈町五五八
電話　〇七五―三五一―一八一一



芭蕉堂関係資料（部分）　本稿第一章より